

## 第7節 東野V期（古墳時代後期）

### 1 壺穴建物

当該期の壺穴建物を3軒確認した。

#### S103（図201～204）(AS0065)

**検出状況** C地点 JD17～18 グリッドで検出した壺穴建物である。III層上面で検出した。建物西部は発掘区外である。S101、S102、S104、S2 1を切る。平面形は、北東～南西方向にやや長い隅丸方形と想定できる。竈から想定できる主軸はN-48° -Wである。

**埋土** 黒色土と黒褐色土がほぼ水平に堆積し、壁際埋土がやや傾斜して堆積する。北西辺から長さ1.3m×幅2.0m範囲で焼土粒を含む褐色粘質土の堆積を検出したため、竈の崩落土と判断し、それを残して掘り下げた。埋土中に褐色土・赤褐色土・黒褐色土ブロックを多く含むことから人為堆積の可能性が高いと考えられる。

**壁** III・IV層を掘り込んでいる。壁面はやや開く。壁の残存高は最大で0.31mである。

**床面** ほぼ平坦である。貼床（11層）が全体にわたって明瞭に残る。貼床はにぶい褐色土が主体で、黒色土ブロックを多く含み、固く締まる。床面で検出した遺構は柱穴3基、壁際溝、竈1基、貯蔵穴1基、周堤状遺構2基である。壺穴内の位置関係からP1、P2、P3を主柱穴と判断した。位置から4本柱建物と想定でき、残る1基は発掘区外に存在すると考えられる。すべての柱穴で明瞭な柱痕跡、P1とP2で柱の当たりが確認できる。柱径は0.08～0.10mと想定できる。柱穴埋土最上層に貼床層が確認できること、床下で柱穴掘方を確認したことから、柱埋設後、貼床形成したと考えられる。壁際溝は、建物の確認できる部分をほぼ全周する。深さ平均0.03mを測る。貼床層を切っていることから、貼床形成後に掘削されたと考えられる。

**竈** 建物の北西部中央に構築されている。煙道部は発掘区外である。竈を構築していたとみられる褐色粘質土が、本体から北東部にかけて長さ1.3m×幅2.0mの範囲に広がっており、大きく崩れたことを示唆する（図203）。両袖部は、それらしき高まり（H-H' 20層）は確認できるが低く、不明瞭である。竈本体は18～26層である。S106 貼床層（27～31層）の上に構築されることから、貼床形成後、竈の構築という順になる。両袖部間は燃焼部と考えられ、H-H' の15層に焼土ブロックが混じる。焼土の堆積は薄い。燃焼部が、想定できる壺穴建物の北西辺から約0.9m離れることから、竈本体が中央部に大きく張り出していると思われる。

**貯蔵穴・周堤状遺構** 建物北隅部で検出したP4を貯蔵穴と判断した。底部はVI層に達しつつほぼ平らで、壁はやや開く。土師器片2点、須恵器片7点が出土し、その一部（取上番号1620）は床面出土須恵器横瓶（467）と接合した。その周囲を黒褐色粘質土と褐色粘質土の混合土で構築される周堤状遺構M1、M2が囲む。P3側に周堤は確認できない。最も高いところで床面から0.11mの高さである。貼床の上に載り、壁際溝・P4上端を覆うことから、貼床形成→壁際溝埋戻し→柱穴掘削・埋め戻し一周堤状遺構の構築と考えられる。

**床下** 貼床除去後、掘方整地層と性格不明土坑1基を検出した。性格不明土坑は竈解体後検出したことから、竈構築に関わる遺構の可能性もある。掘方整地層は黒色粘質土と褐色粘質土の混合土の層（12層）で、ほぼ平坦である。貼床層、基盤層よりしまりは弱い。

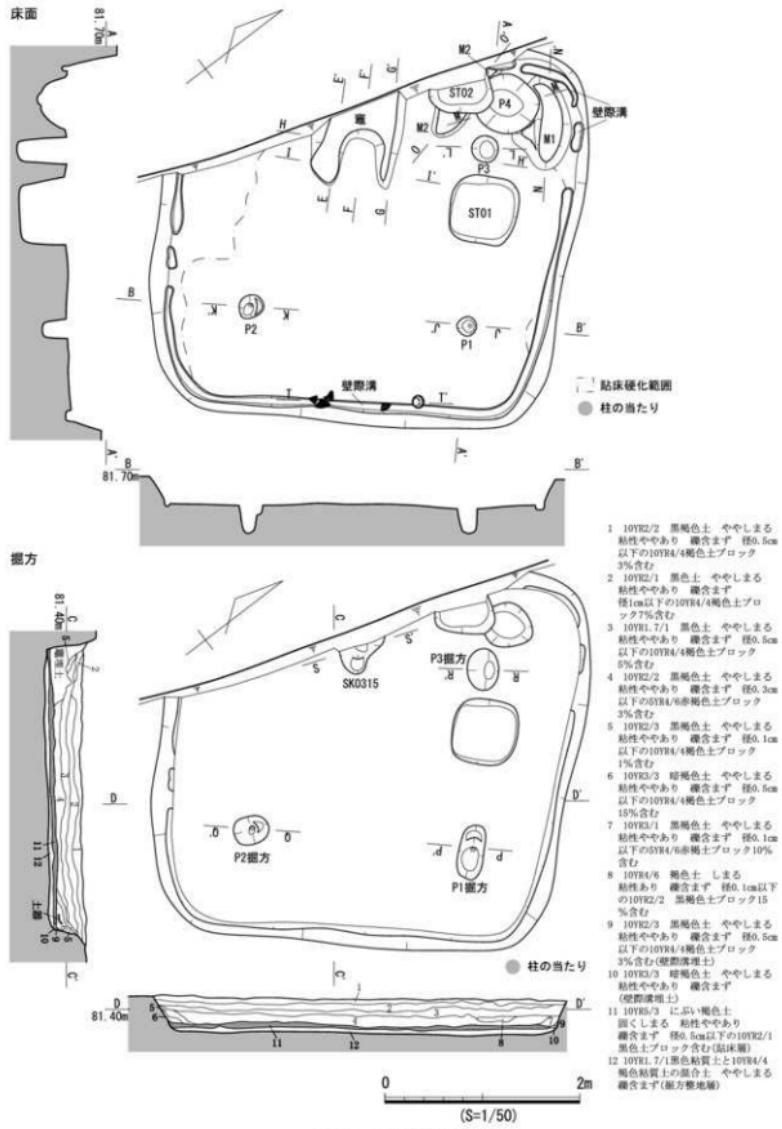
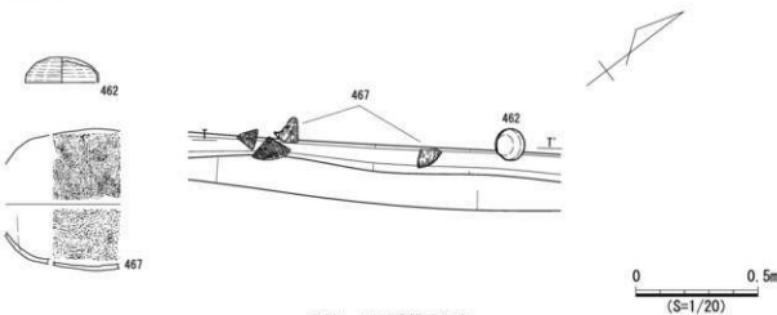


図201 S103遺構図(1)

1 10Y2/2 黒褐色土 やや暗色 しより弱い 黏性ややあり 硬含まず 硬5cm下の10YR4/4 黄褐色土ブロック 15%含む	1 10Y2/2 黒褐色土 やや暗色 しより弱い 黏性ややあり 硬含まず 硬5cm下の10YR4/4 黄褐色土ブロック 15%含む	1 10Y2/2 黒褐色土 やや暗色 しより弱い 黏性ややあり 硬含まず 硬5cm下の10YR4 黄褐色土ブロック 15%含む	1 10Y2/2 黒褐色土 やや暗色 しより弱い 黏性ややあり 硬含まず 硬5cm下の10YR4 黄褐色土ブロック 15%含む
2 10Y2/1 黒褐色土 ややしまる 粘性なし 硬含まず 硬5cm以下の 10YR4/4 黄褐色土ブロック2%含む 10YR2/2 黑褐色土 ややしまる 粘性なし 硬含まず 硬5cm下の 10YR4/4 黄褐色土ブロック3%含む	2 10Y2/1 黑褐色土 ややしまる 粘性なし 硬含まず 硬5cm以下の 10YR4/4 黄褐色土ブロック5%含む 3 10Y2/2 黑褐色土 ややしまる 粘性ややあり 硬含まず 硬5cm下の 10YR4/4 黄褐色土ブロック3%含む 4 10Y2/3 黑褐色土 ややしまる 粘性ややあり 硬含まず 硬5cm下の 10YR4/4 黄褐色土ブロック3%含む 5 10Y2/4 喀褐色土 ややしまる 粘性ややあり 硬含まず	2 10Y2/1 黑褐色土 ややしまる 粘性なし 硬含まず 硬5cm以下の 10YR4/4 黄褐色土ブロック5%含む 3 10Y2/2 黑褐色土 ややしまる 粘性ややあり 硬含まず 硬5cm下の 10YR4/4 黄褐色土ブロック3%含む 4 10Y2/3 喀褐色土 ややしまる 粘性ややあり 硬含まず 硬5cm下の 10YR4/4 黄褐色土ブロック3%含む 5 10Y2/4 黄褐色土 ややしまる 粘性ややあり 硬含まず	2 10Y2/1 黑褐色土 ややしまる 粘性なし 硬含まず 硬5cm以下の 10YR4/4 黄褐色土ブロック5%含む 3 10Y2/2 黑褐色土 ややしまる 粘性ややあり 硬含まず 硬5cm下の 10YR4/4 黄褐色土ブロック3%含む 4 10Y2/3 黑褐色土 ややしまる 粘性ややあり 硬含まず 硬5cm下の 10YR4/4 黄褐色土ブロック3%含む 5 10Y2/4 黄褐色土 ややしまる 粘性ややあり 硬含まず
1 10Y2/2 黑褐色土 しまり弱い 粘性ややあり 硬含まず 硬5cm以下の 10YR4/4 黄褐色土ブロック5%含む 2 10Y2/3 黑褐色土 ややしまる 粘性ややあり 硬含まず 硬5cm以下の 10YR4/4 黄褐色土ブロック3%含む 3 10Y2/2 黑褐色土 ややしまる 粘性ややあり 硬含まず 硬5cm下の 10YR4/4 黄褐色土ブロック3%含む 4 10Y2/1 黑褐色土 ややしまる 粘性なし 硬含まず 硬5cm以下の 10YR4/4 黄褐色土ブロック20%含む 5 10Y2/4 喀褐色土 ややしまる 粘性ややあり 硬含まず	1 10Y2/2 黑褐色土 しまり弱い 粘性ややあり 硬含まず 硬5cm以下の 10YR4/4 黄褐色土ブロック3%含む 2 10Y2/3 黑褐色土 ややしまる 粘性ややあり 硬含まず 硬5cm以下の 10YR4/4 黄褐色土ブロック5%含む 3 10Y2/2 黑褐色土 ややしまる 粘性ややあり 硬含まず 硬5cm下の 10YR4/4 黄褐色土ブロック3%含む 4 10Y2/1 黑褐色土 ややしまる 粘性なし 硬含まず 硬5cm以下の 10YR4/4 黄褐色土ブロック20%含む 5 10Y2/4 喀褐色土 ややしまる 粘性ややあり 硬含まず	1 10Y2/3 黑褐色土 やや暗色 しより弱い 黏性ややあり 硬含まず 硬5cm下の10YR4/6 明黄褐色土 ブロック3%含む	1 10Y2/4 黑褐色土 しまる 粘性ややあり 硬含まず 硬2cm以下の 10YR4/6 明黄褐色土ブロック3%含む 2 10Y2/3 黑褐色土 しまる 粘性ややあり 硬含まず 硬2cm以下の 10YR4/6 黄褐色土 しまる 粘性ややあり 硬含まず
1 10Y2/1 黑褐色土 やや基色 ややしまる 粘性なし 硬含まず 硬5cm以下10YR4/4 黄褐色土ブロック 2 10Y2/2 黑褐色土 ややしまる 粘性ややあり 硬含まず 硬5cm下の 10YR4/4 黄褐色土ブロック3%含む 3 10Y2/2 黑褐色土 ややしまる 粘性ややあり 硬含まず 硬5cm下の 10YR4/4 黄褐色土ブロック3%含む 4 10Y2/1 黑褐色土 ややしまる 粘性なし 硬含まず 硬5cm以下の 10YR4/4 黄褐色土ブロック3%含む 5 10Y2/4 喀褐色土 ややしまる 粘性ややあり 硬含まず	1 10Y2/2 黑褐色土 やや暗色 しより弱い 黏性ややあり 硬含まず 硬5cm下の10YR4/4 黄褐色土ブロック 2 10Y2/3 黑褐色土 やや暗色 ややしまる 粘性ややあり 硬含まず 硬5cm下の 10YR4/4 黄褐色土ブロック3%含む	1 10Y2/3 黑褐色土 やや暗色 しより弱い 黏性ややあり 硬含まず 硬5cm下の10YR4/6 明黄褐色土 ブロック3%含む	1 10Y4/6 黑褐色土 しまる 粘性ややあり 硬含まず 2 10Y2/3 黑褐色土 しまる 粘性ややあり 硬含まず 3 10Y3/3 黑褐色土 しまる 粘性ややあり 硬含まず 4 10Y4/4 黑褐色土 しまる 粘性ややあり 硬含まず 5 10Y2/1 黑褐色土ブロック3%含む
1 10Y1.1/1 黑褐色土 ややしまる 黏性なし 硬含まず 硬1cm以下の10YR4/4 黄褐色土ブロック 2 10Y2/3 黑褐色土 ややしまる 黏性ややあり 硬含まず 硬5cm下の10YR4/4 黄褐色土ブロック 3 10Y2/2 黑褐色土 ややしまる 黏性ややあり 硬含まず 硬5cm下の10YR4/4 黄褐色土ブロック 4 10Y2/1 黑褐色土 ややしまる 粘性なし 硬含まず 硬5cm以下の 10YR4/4 黄褐色土ブロック3%含む 5 10Y2/4 喀褐色土 ややしまる 粘性ややあり 硬含まず	1 10Y2/1 黑褐色土 ややしまる 黏性なし 硬含まず 硬1cm以下の10YR4/4 黄褐色土ブロック 2 10Y2/3 黑褐色土 ややしまる 黏性ややあり 硬含まず 硬5cm下の10YR4/4 黄褐色土ブロック 3 10Y2/2 黑褐色土 ややしまる 黏性ややあり 硬含まず 硬5cm下の10YR4/4 黄褐色土ブロック 4 10Y2/1 黑褐色土 ややしまる 粘性なし 硬含まず 硬5cm以下の 10YR4/4 黄褐色土ブロック3%含む 5 10Y2/4 喀褐色土 ややしまる 粘性ややあり 硬含まず	1 10Y2/3 黑褐色土 やや暗色 しより弱い 黏性ややあり 硬含まず 硬5cm下の10YR4/6 明黄褐色土 ブロック3%含む	1 10Y4/6 黑褐色土 しまる 粘性ややあり 硬含まず 2 10Y2/3 黑褐色土 しまる 粘性ややあり 硬含まず 3 10Y3/3 黑褐色土 しまる 粘性ややあり 硬含まず 4 10Y4/4 黑褐色土 しまる 粘性ややあり 硬含まず 5 10Y2/1 黑褐色土ブロック3%含む
1 462 	467 	462 	0 2m (S=1/50)

遺物出土状況



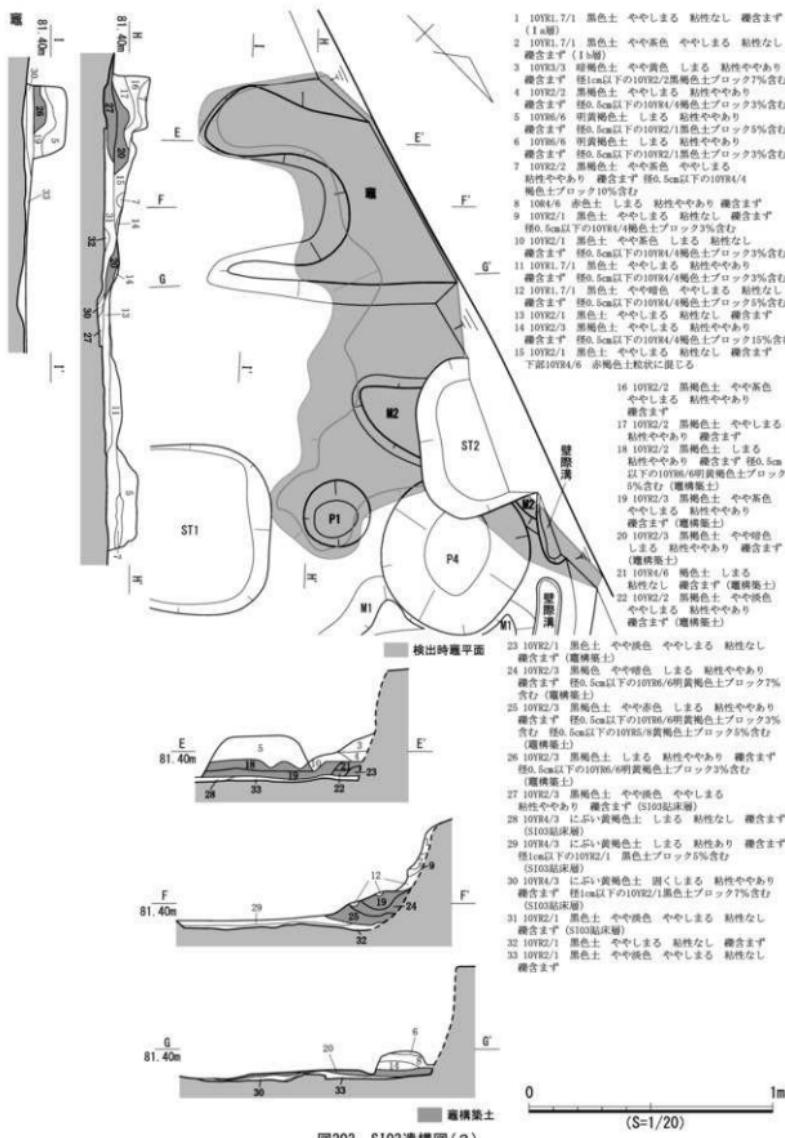


図203 SI03遺構図(3)

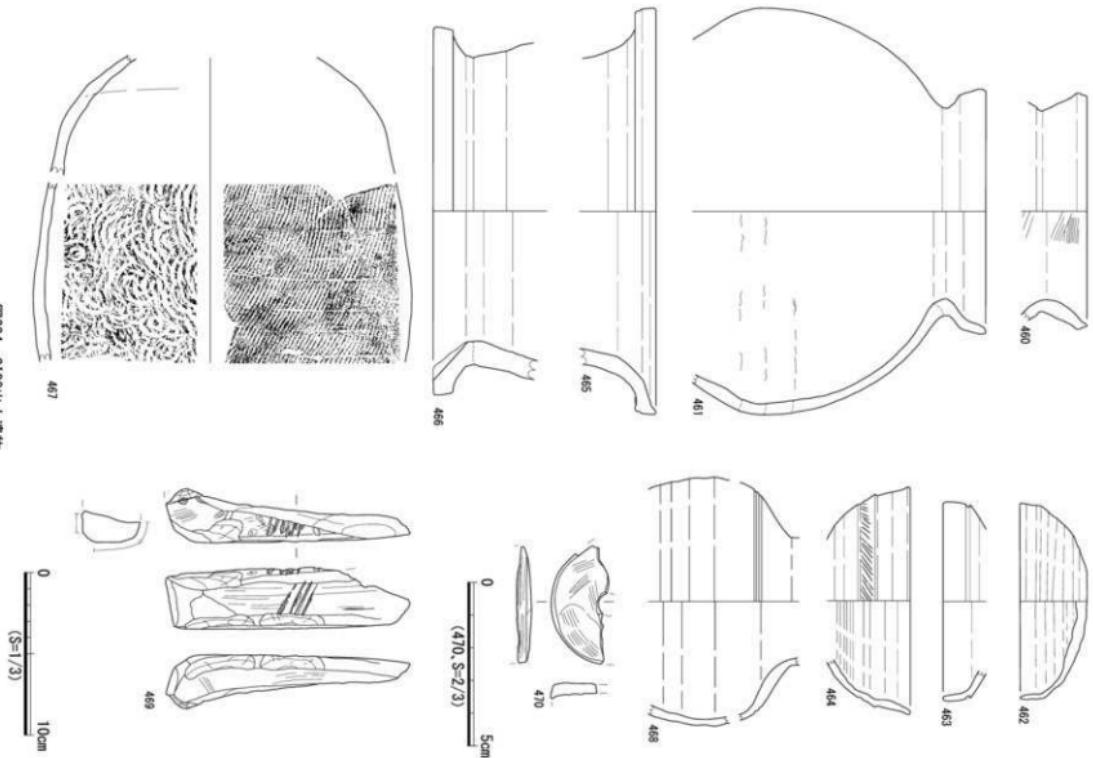


図204 S103出土遺物

**遺物出土状況** 縄文土器5点、弥生土器9点、古墳前期土師器19点、古墳後期以降土師器類16点、時期不明土師器類41点、須恵器30点、灰釉陶器1点、礫5点、石器10点、炭化物3点が出土した。埋土上層から須恵器、弥生土器・土師器類、縄文土器の破片が出土したが、下層の掘削にしたがい量は減少し、土師器、須恵器が出土した。床面直上の南東壁際中央部で須恵器横瓶(467)と須恵器壺蓋(462)が出土した。竈から想定できる入口に位置する。

**出土遺物** 460、461はV・VI期甕である。460は口縁部で、端部に面をもつ。内面にヨコハケ調整が残る。461は器壁が厚い。口縁部は受口状に弱く屈曲する。破片によって被熱の度合いが異なることから、SI03竈の構築材として使用していた可能性が考えられる。462、463は須恵器壺蓋である。462は天井部が丸みを帯び口縁部が垂下する。7世紀前半に比定できる。463は外面の屈曲部に沈線が1条巡る。外面に自然軸が付着する。7世紀前半に比定できる。464は須恵器無蓋高坏で、外面中央部に帶状の面が巡り、斜方向のヘラ描きを施す。6世紀後半に比定できる。465は須恵器甕である。口縁部を受口状につまみ上げ、外方に面をもつ。面の下寄りに沈線が1条巡る。7世紀代であろう。466は須恵器甕の底部で、下端と外方に面をもつ。屈曲部に浅い沈線が2条巡る。屈曲部内面に穴が一部残る。7世紀代であろう。467は須恵器横瓶である。外面は平行叩き後沈線が巡る。内面は同心円の当て具痕が残る。468は須恵器壺である。肩が弱く張る形状で、肩に沈線が2条巡る。頸部で緩やかに屈曲する。6世紀後半に比定できる。469は床面出土の砥石である。表面と側面にV字溝がある。V字溝を使用中に剥離した痕跡がある。470は鉢鍤車である。上部と背面を折損する。形状から断面形は長方形と看取できる。強く研磨し、なめらかに仕上げる。

**時期** 床面及び貯蔵穴出土土器から東野V期と判断した。

SI15(図205・212)(AS1345)

**検出状況** C地点 JN15~16 グリッドで検出した竪穴建物である。III層上面で検出した。建物北部でSI12に切られる。南西方向に向かい緩やかに低くなる地形で、後世の削平を受けていること、搅乱坑により消失していることをふまえ、平面形は四辺がほぼ直線状の隅丸不整形と想定できる。南～西部の平面形は、貼床の残存範囲を括ったため、当時の平面形と異なる可能性がある。長軸の方位は、N-12° - Eである。

**埋土** 検出時、埋土はほとんど確認できず、貼床層が表出していた。北東部にわずかに残る埋土は黒褐色土である。僅かに残る埋土中に赤褐色土ブロックを多く含むことから人為堆積の可能性が高いと考えられる。

**壁** III層を掘り込んでいる。残存部分の壁面はやや開く。壁の残存高は最大で0.02mである。

**床面** ほぼ平坦である。貼床(11層)が建物の残存する部分の多くで確認できるが、南西部はIII層が露出する。確認できた貼床は黒褐色粘質土と暗褐色粘質土の混合土で、固く締まる。床面で検出した遺構は柱穴2基、性格不明土坑5基である。また、検出時に床面が表出していたことから、SI15検出時にSI15を切ると判断した遺構もSI15に関連する可能性が考えられる。主柱穴は不明である。位置から想定すると、P1・柱穴状のSK0648・やや深いP6がSI15の主柱穴の可能性も考えられる。この場合、残る1基は建物中央部を横断する搅乱坑によって消失したと考えられる。P1は明瞭な柱痕跡と柱の当たりが確認できる。柱径は約0.09mと想定できる。柱埋戻土最上層に貼床層が確認できないことから、貼床形成後、柱穴が掘削されたと考えられる。P7は柱穴である。明瞭な柱痕跡と柱の

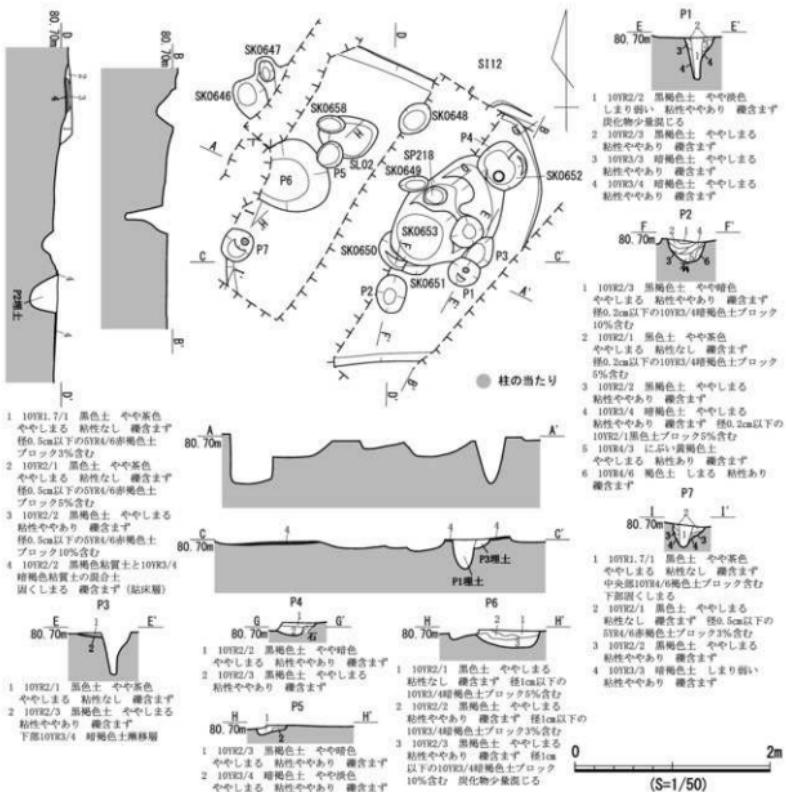
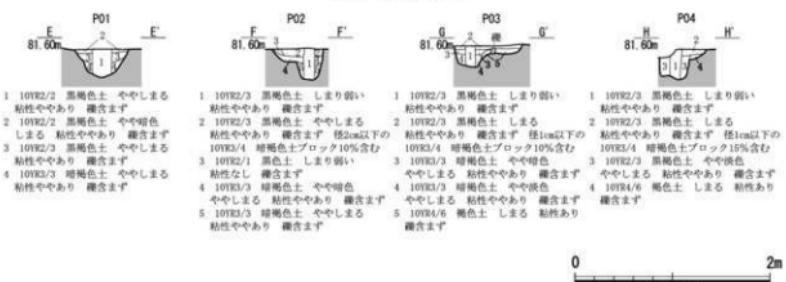


图205 S115清根图



• 200 • 中国地名大典

当たりが確認できる。柱径は約0.11mと想定できる。残存する竪穴建物の西辺と重複することから、SI15に付属しない可能性も考えられる。

**床下** 貼床除去後、遺構は確認できなかった。

**遺物出土状況** 古墳後期以降土師器類4点、時期不明土師器類1点、灰釉陶器3点、礫1点が出土した。わずかに残存する埋土から極少量出土した。

**出土遺物** 471は灰釉陶器碗である。残存部は全面施釉される。口縁端部は横につまみ出す。9世紀中頃に比定できる。

**時期** SI12(VI期)、SK0652(V期)に先行することから東野V期以前と判断した。

S135(図206~209・212)(AS2645)

**検出状況** C地点KJ4～KK5グリッドで検出した竪穴建物である。III層上面で検出した。SI36、SB8を切る。平面形は隅丸方形である。竈から想定できる主軸はN-103°-Eである。

**埋土** 黒色土と黒褐色土がほぼ水平に堆積する。まず床上に3層が堆積するが、このとき北西部は床が露出したままであると思われる。その後2層が堆積し、次に1層が堆積した状況を示す。また、壁際埋土がやや傾斜して堆積する。埋土中に暗褐色土・黒色土ブロックを多く含むことから人為堆積の可能性が高いと考えられる。

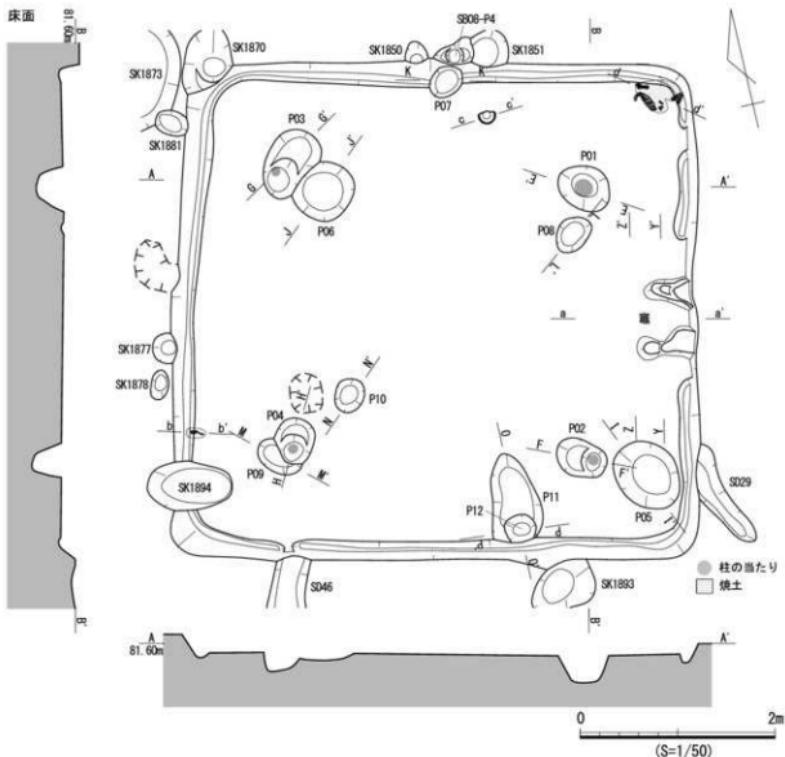
**壁** III～V層を掘り込んでいる。壁面はやや開く。壁の残存高は最大で0.18mである。

**床面** ほぼ平坦である。貼床(5層)が全体にわたって明瞭に残る。貼床は黒褐色粘質土と暗褐色粘質土の混合土で、縮まる。床面で検出した遺構は柱穴4基、壁際溝、竈1基、貯蔵穴1基、性格不明土坑7基で、竈直下で検出した土坑1基をこの建物に属すると判断した。竪穴内の位置関係からP01～P04をこの建物の主柱穴と判断した。4基とも明瞭な柱痕跡と柱の当たりが確認できる。柱径は約0.09～0.17mと想定できる。柱埋戻土最上層に貼床層が確認できることから、柱埋設後、貼床形成したと考えられる。壁際溝は、竈の位置する東辺中央部を除いた壁際を巡る。深さ平均0.07mを測る。貼床層を切っていることから、貼床形成後に掘削されたと考えられる。

**竈** 建物の東部中央に構築される。煙道部は上層の攪拌・削平によって確認できない。竈天井部を構築していたとみられる明黄褐色粘質土や焼土ブロックが、1.6×1.1m範囲に広がっており、大きく崩れたことを示す。検出範囲に礫や土器片が散在しており、被熱の度合いが強いことから竈の構造材であった可能性が考えられる。両袖部(19・20・21層)の残存状態は良好である。両袖部が貼床直上に構築されていることから、貼床形成後竈を構築し、その後壁際溝を掘削したと考えられる。燃焼部は暗赤褐色を呈する。天井部(13・14層)は、燃焼部との間に埋土が確認できないが、竈の焚き口に16層が確認できることから、竈廐棄と竈崩落には時間差があると考えられる。天井部の上層から土師器甕が出土した。破片によって被熱の度合いが異なることから、竈の芯材として用いられていた可能性が考えられる。

**貯蔵穴** 南東隅部に位置するP05を竪穴内の位置関係や規模から貯蔵穴と判断した。平面形は梢円形である。壁は開き、底面は丸みを帯びる。長軸0.75m、短軸0.62m、深さ0.25mを測る。埋土から須恵器坏の破片(取上番号12944、12949)が出土した。

**床下** 貼床除去後、SB04柱穴2基、性格不明土坑7基を検出した。性格不明土坑とSI35との関連は不明である。



遺物出土状況

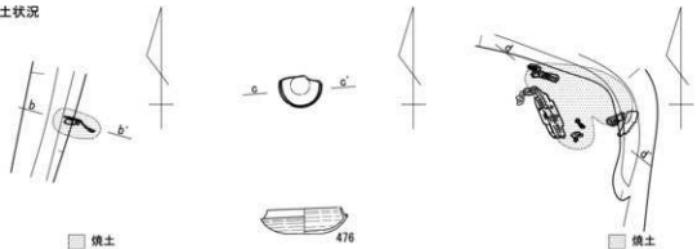


図207 SI35遺構図(2)

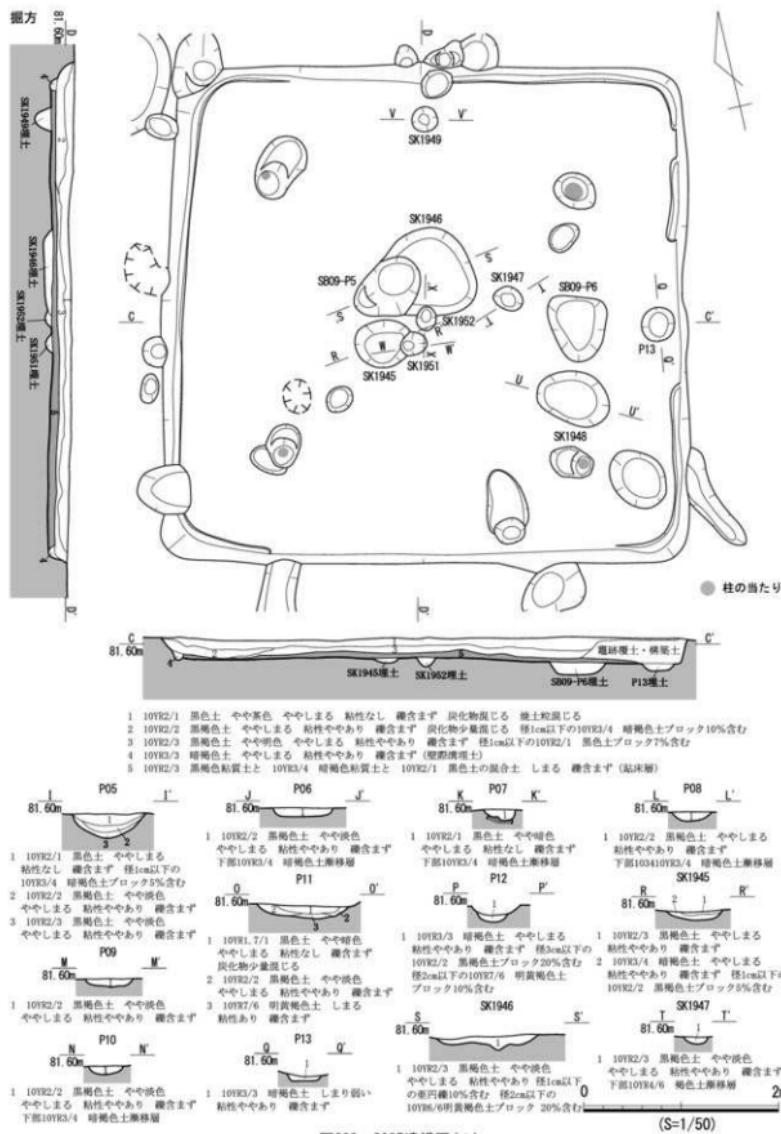


図208 S135遺構図(3)

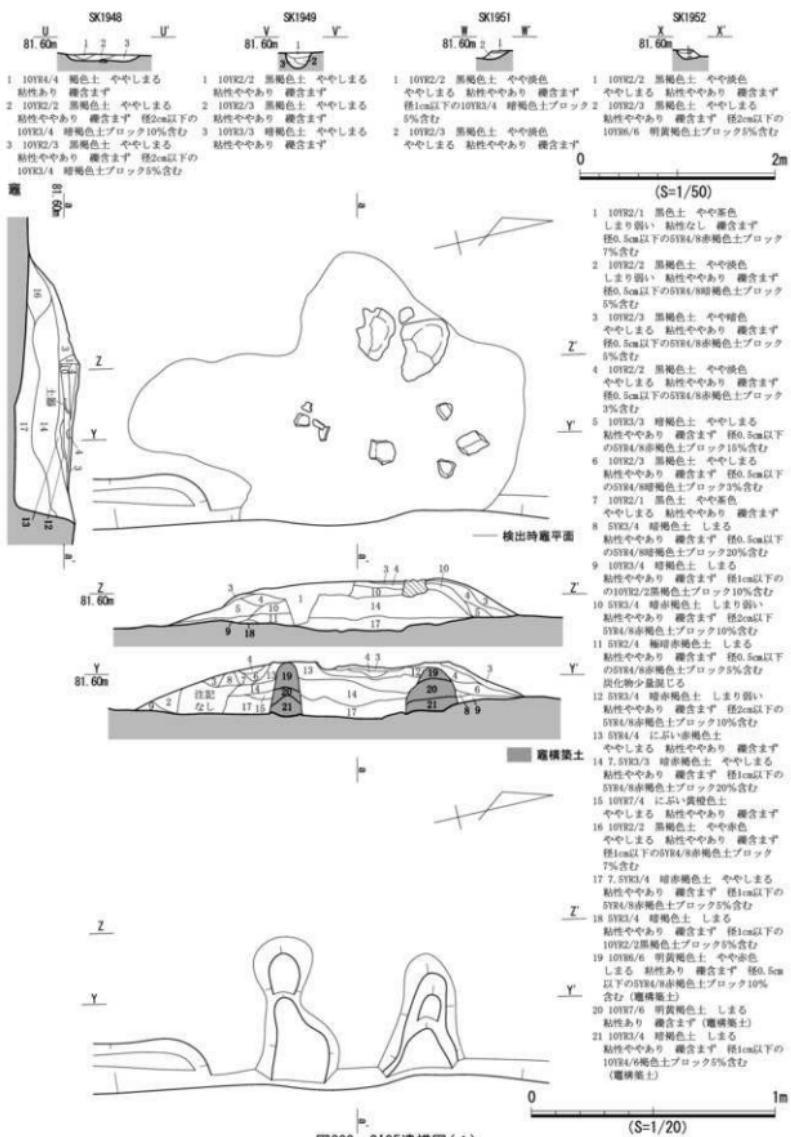


図209 S135遺構図(4)

**遺物出土状況** 繩文土器 23 点、古墳前期土師器 25 点、古墳後期以降土師器類 47 点、時期不明土師器類 59 点、須恵器 12 点、山茶碗 1 点、石器類 5 点、炭化物 8 点が出土した。埋土から須恵器、弥生土器・土師器類、繩文土器の破片が大量に出土した。床面北部中央で須恵器の須恵器坏身（476）、北東隅部、南西隅部で炭化材が出土した。また、炭化材周囲で焼土を確認した。焼土は炭化材を覆うよう検出した。南西隅部で出土した炭化材（b-b'）は西辺に対してほぼ直交する。北東隅部で出土した炭化材（d-d'）は、北辺に対して約 45 度東へ傾く。分析の結果、前者はサクラ属 1 点、後者はアカガシ亜属 7 点と判明した。前回調査を含め当遺跡で確認した焼失建物出土炭化材は IV 期以降はハンノキ亜属やアカガシ亜属が多く、部材として周辺から入手していた可能性を指摘している（第4章第4節参照）。V 期の建物で炭化材が出土したのは SI35 のみだが、炭化材の樹種から建築部材であった可能性が考えられる。

**出土遺物** 472～474 は V・VI 期甕である。473、474 は外面のハケが比較的強く残る。473 はやや胴長の形状である。外面のハケが比較的強く残る。472 と 474 は破片毎の被熱の度合いが異なり、473 は破片毎の被熱の度合いが似ている。これらのことから、472 と 474 は破断後、竈の構築材として入れられたと考えられる。475 は須恵器坏蓋である。摩耗が著しく、二次堆積と思われる。476 は須恵器坏身である。受部が直線的である。6 世紀中頃に比定できる。

**時期** 床面出土土器、貯蔵穴出土土器から、東野 V 期と判断した。

## 2 溝状遺構（図 210）

当該期に関連すると判断した溝状遺構は 2 条である。通水の痕跡はない。2 条ともに V 期に属する遺構との重複関係や出土遺物によって、V 期以降の溝状遺構と判断した。

## 3 柱穴（図 210）

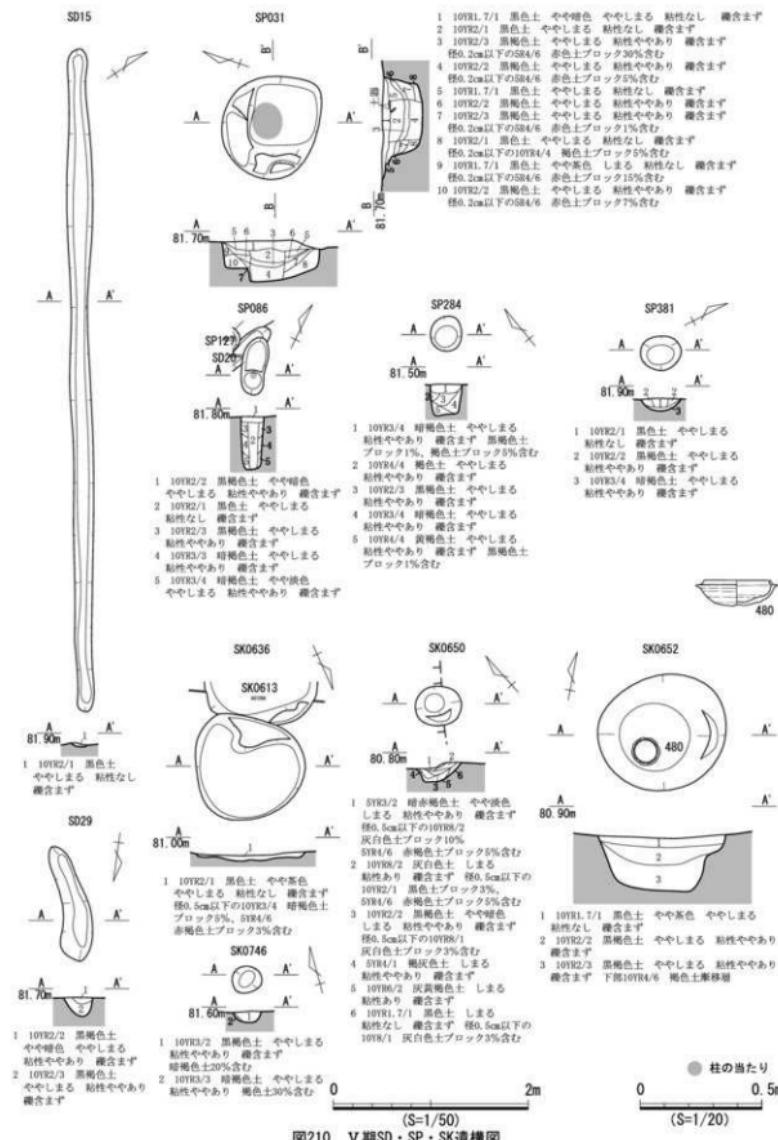
当該期に関連すると判断した柱穴は 3 基である。すべて V 期に属する遺構との重複関係や出土遺物によって、V 期に関連する柱穴と判断した。以下、特徴的な柱穴について記述する。

### SP031（図 210・212）（AS0208）

**検出状況** C 地点 JD18～JE18 グリッド、SI01 プラン内で検出した。平面形は不整円形である。SI01 を切る。

**埋土** 中央部に掘り込まれた堆積（2・3・4 層）が確認できる。出土した遺物は散在しており、埋設したとは考えにくいこと、底面に柱の当たり状の硬化面が確認できることから柱穴と判断し、周囲に同規模の柱穴が存在しないことから単独の柱穴とした。2・3・4 層を柱痕跡と仮定すると、柱径は 0.32m と想定できる。埋土は、まず柱を設置し（2・3・4 層）、その後掘方を埋め戻し（8・7・6・5 層）、柱の欠落後に最上層（1 層）が埋まる状況を示す。しかし、3 層が埋戻し土 6 層に類似し分層線が近接することから、堆積状況を見誤った可能性も考えられる。北と西にテラス状の段があり三段構造となるが、9・10 層の堆積状況から重複する遺構の可能性がある。底面は方形である。

**遺物出土状況** 繩文土器 11 点、弥生土器 3 点、古墳前期土師器 1 点、古墳後期以降土師器類 24 点、時期不明土師器類 14 点、須恵器 1 点、石器類 4 点、鉄製品 1 点が出土した。中層から古墳後期に比定できる鉄製の短茎鎌（477）が出土した。中～下層から、V・VI 期甕（478）が散在して出土した。



**出土遺物** 477 は鉄鏃である。鏃身中央部に孔がある。鏃身部は側縁部に膨をもって三角形を呈し、鏃身関部は深い脇抉をなす。有頭鏃と考えられるが途中で折損する。478 はV・VI期甕で、胎土が粗い。下半部を折損する。

**時期** 出土遺物から東野V期の可能性が高いと判断した。隣接する S103 とほぼ同時期と考えられる。

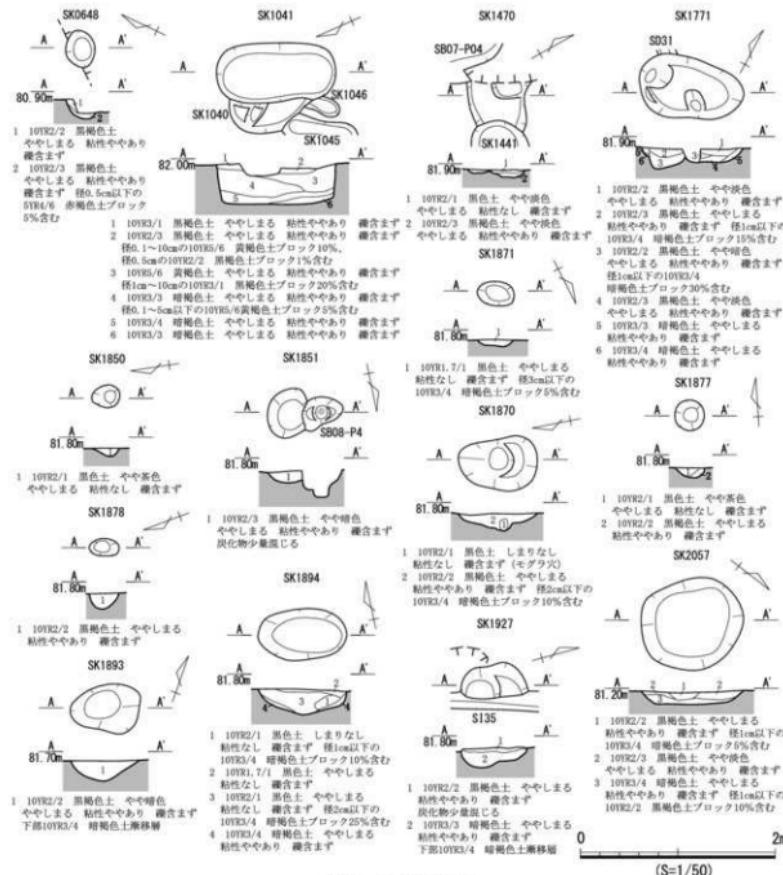


図211 V期SK遺構図

**その他の柱穴出土遺物** IV期に関連すると判断した柱穴出土の特徴的な遺物について記述する。479はSP284出土のV・VI期甕である。口縁部は外反しつつ開く。口縁端部に面をもち、沈線状にくぼませる。頸部外面に輪積み痕が残る。

#### 4 土坑（図210・211）

当該期に関連すると判断した土坑は27基である。すべてV期に属する遺構との重複関係や出土遺物によって、V期に関連する土坑と判断した。以下、特徴的な土坑について記述する。

SK0652（図210・212）（AS1343）

**検出状況** JN16グリッド、III層上面で検出した。平面形は円形である。SI15プラン内で検出し、SI15のは埋土が薄く一部床面が出ていたが、SI15埋土を一部切ることからSI15に関連しない遺構と判断した。

**埋土** 埋土は3層で、中央部がくぼむ堆積である。底は平らで、東部がテラス状の二段構造である。形状は貯蔵穴状である。

**遺物出土状況** 底部中央から須恵器坏身（480）が出土した。

**出土遺物** 480は須恵器坏身で受部をもつ。底部外面にヘラ切りが見られる。6世紀後半に比定できる。

**時期** 出土遺物から東野V期と判断した。

#### 5 搅乱坑・遺物包含層出土遺物（図212）

481は搅乱坑出土のV・VI期甕である。口縁端部外側が折り返し状に肥厚する。口縁部内面はヨコハケ、外面ヨコナデ調整し、胴部内面は板ナデ、外面はハケ調整する。外面に煤が付着する。482、483は搅乱坑出土の須恵器坏蓋である。482は天井部が丸みを帯び、口縁部が垂下する。6世紀後半に比定できる。483は屈曲部に沈線が1条巡り、口縁端部をつまみ出す。6世紀中頃に比定できる。484、485は搅乱坑出土の須恵器坏身である。484は小さく突き出した受部から口縁部を立ち上げて端部を尖らせる。7世紀前半に比定できる。485は大きく受部を突出させ、口縁部は内傾して短い。7世紀前半に比定できる。486は搅乱坑出土、487はJG18グリッド出土の須恵器短脚高坏である。486は裾端部が強く外反する。7世紀前半に比定できる。487の脚部は大きく開く。7世紀前半に比定できる。488は搅乱坑出土の須恵器甕で、小型である。口縁端部外方に面をもつ。その下は有段状になり下段幅が広い。下段に沈線が2条巡る。7世紀前半に比定できる。489はJL20グリッド出土の須恵器甕である。胴部片で、穴の上部が残る。外面は穴の上部に沈線が1条巡る。その下から回転ヘラケズリ調整し、内面は回転ナデ調整する。穴の上で胴部は最大幅となる。6世紀代であろう。

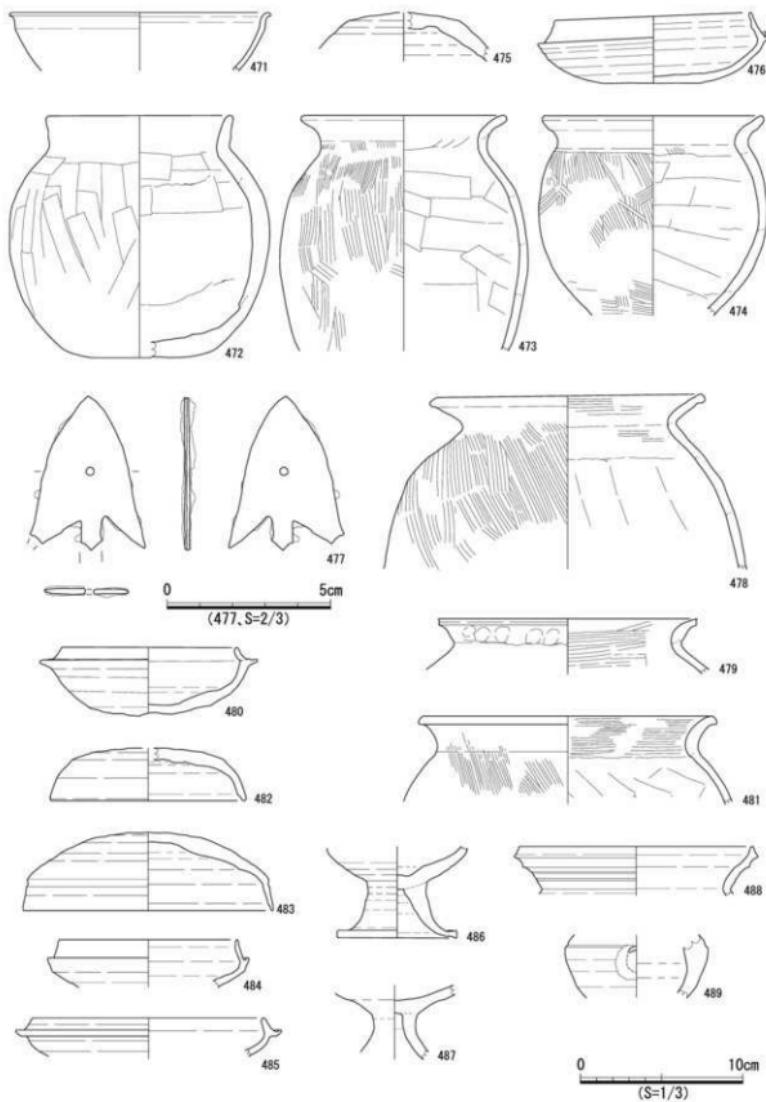


図212 S115・S135・SP031出土遺物、V期出土遺物

## 第8節 東野VI期（古代）

### 1 壓穴建物

当該期の壓穴建物を7軒確認した。

#### SI05（図213～215・218）（AS0464）

**検出状況** C地点 JH19～JJ20 グリッドで検出した壓穴建物である。III層上面で検出した。検出時、大小2基の方形遺構が重複し、小型壓穴が大型壓穴に含まれると考えて掘削した。土層C-C'西側は小型壓穴が大型壓穴に後出する状況を示すが、土層D-D'南側は一体で埋没した状況を示しており判断が困難であった。床面を検出した段階で、主柱穴と想定できる柱穴は小型壓穴の四隅に近接してこの4基以外に主柱穴が想定できないこと、壁際溝が大型壓穴のみで確認できること、小型壓穴の平面形が不整であることなどから一体のものと判断した。一部現代の搅乱により消失している。平面形はほぼ隅丸正方形である。長軸の方位は、N-18°-Wである。

**埋土** 黒色土と黒褐色土がほぼ水平に堆積し、壁際埋土がやや傾斜して堆積する。埋土中に暗褐色土・明赤褐色土・褐色土ブロックを多く含むことから人為堆積の可能性が高いと考えられる。

**壁** III～V層を掘り込んでいる。壁面はやや開き、二段構造になる。壁の残存高は上・下段合わせて最大で0.22mである。

**床面** 上段、下段の二段構造である。各床ともにはぼ平坦である。下段貼床層（6層）、上段貼床層（8層）が全体にわたって明瞭に残る。貼床は上下段ともに暗褐色粘質土と黒褐色粘質土の混合土で、固く締まる。下段床の掘方がところどころVI層に到達しているため、木曾川泥流堆積物を覆うような厚さで貼床を形成している。床面で検出した遺構は柱穴6基、壁際溝、性格不明土坑12基である。竈は確認できなかった。壓穴内の位置関係からP01、P02、P03、P04を主柱穴と判断した。P01、P03、P04に明瞭な柱痕跡と柱の当たりが確認できる。柱径は0.10～0.11mと想定できる。主柱穴は下段貼床の四隅に近接している。柱埋戻土最上部に貼床層が確認できることから、柱埋設後、貼床を形成したと考えられる。建物中央で確認したP10は、3層に極少量の焼土粒を含むが、P13自体に被熱した痕跡は確認できなかった。建物中央北寄りで確認したP13の底部でP18を検出した。被熱状の赤色部が認められたため赤色部分が除去できるまで掘削したが、岩盤のような硬さであったことから、鉄分が多く沈着した基盤層である可能性が高く、何らかの機能を持つ穴であった可能性は低いと判断した。壁際溝は、建物上段部の残存する部分をほぼ全周する。深さ平均0.06mを測る。

**床下** 貼床除去後、性格不明土坑3基を検出した。性格不明土坑とSI05との関連は不明である。

**遺物出土状況** 繩文土器3点、弥生土器44点、古墳前期土師器69点、古墳後期以降土師器類26点、時期不明土師器類183点、須恵器26点、灰釉陶器9点、山茶碗1点、礫111点、石器17点が出土した。埋土中から土師器と須恵器が多く出土した。床面で、底部のみが残る須恵器有台坏（493）が逆位で、須恵器瓶（497）が横位で出土した。埋土2層から少量ではあるが炭化物が出土した。また、埋土掘削中に大量の礫が出土した。ほとんどがVI層起源の木曾川泥流堆積物の風化した礫である。貼床直上に多く、下層にしたがって増える。礫の出土位置や状況に意図性は認められない。建物の廃絶後のくぼみに礫を廃棄した可能性が考えられる。

**出土遺物** 490はV・VI期甕である。口縁端部外面に面をつくる。491、492は須恵器坏蓋である。491

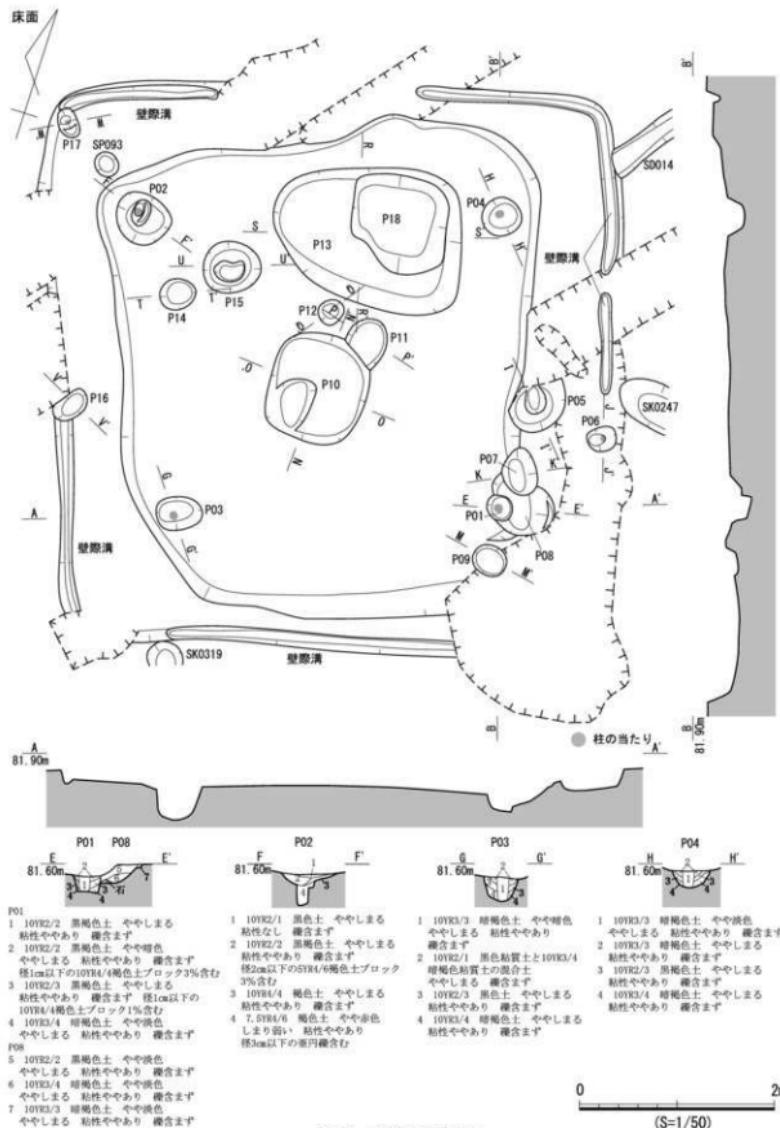


図213 SI05遺構図(1)

掘方

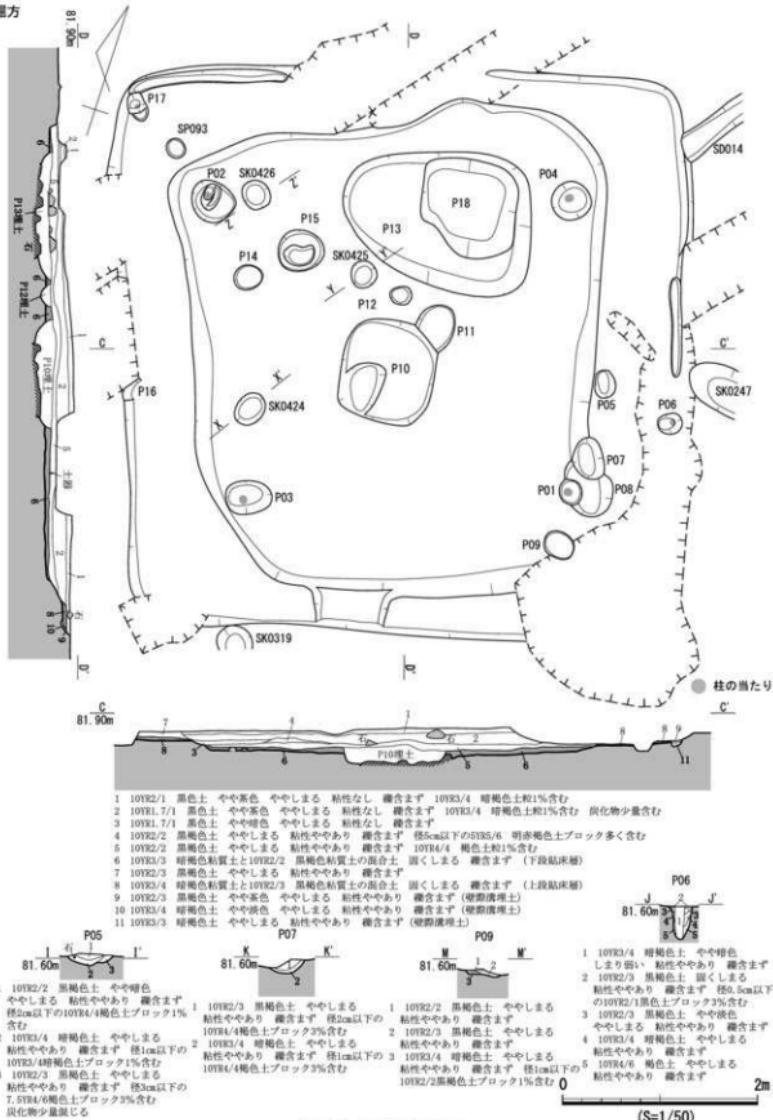


図214 S105遺構図(2)

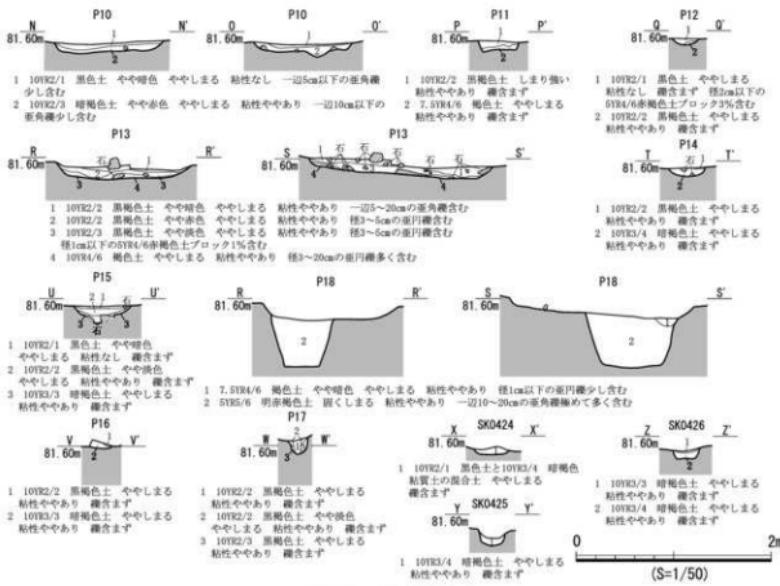


図215 S105遺構図(3)

は天井部は回転ヘラケズリ調整する。ヘラケズリの端部に沈線が1条巡り、かえり状に段をつくる。その下から回転ナデ調整する。端部は外傾し、内側に面をつくる。6世紀後半に比定できる。492は端部に向かう屈曲部に沈線が1条巡る。天井部に自然軸と融着物が見られる。6世紀後半に比定できる。493~495は須恵器有台坏である。493は底部で、高台が短く、断面形は内に傾く平行四辺形である。内外面ともに中央部に静止ヘラケズリが見られる。底径は比較的大きい。8世紀後半に比定できる。494は須恵器碗である。高台の断面形が逆台形である。口縁端部を外方へつまみ出す。9世紀前半に比定できる。495は底部で、高台の断面形は台形である。8世紀後半に比定できる。496は須恵器甕で、口縁部が大きく開く。口縁端部外方に面をもち、下方へつまみ出す。頭部上方に突帯を貼り付け、上から波状文、沈線2条を施す。胴部との境に沈線が1条巡る。6世紀代と思われる。497は須恵器瓶の胴部である。肩部が丸みを帯びる。高台は潰れ気味で、外に面を持ち、内に押し出される。内外面に自然軸が付着する。8世紀代と思われる。498は灰釉陶器碗である。口縁部が波打ち、端部を外へつまみ出す。10世紀代と思われる。499は灰釉陶器皿である。内面全面と外面上部に施釉する。口縁端部の下がくぼみ、外方へ屈曲する。9世紀後半に比定できる。500、501は砥石である。500は板状で、表面と側面が砥面である。縦方向の線状痕が見られ、表面の稜の内側は、外側と比較するとよりなめらかである。

時期 床面出土土器(493、497)から東野VI期と判断した。

## SI12（図216～218）(AS1246)

**検出状況** C地点 JM15～JN16 グリッドで検出した竪穴建物である。III層上面で検出した。建物南部で SI15 を切る。四辺がほぼ直線状の隅丸方形である。検出面で攪拌された可能性が高い貼床層を形成していたと考えられる暗褐色粘質土ブロックが散在し、その含有率は南西部ほど高い。これは、SI12 内部で SI12 に後出する径 1m 前後の土坑を複数検出したことに起因する。長軸の方位は、N-60°-W である。

**埋土** 黒色土と黒褐色土がほぼ水平に堆積し、壁際埋土がやや傾斜して堆積する。埋土中に褐色土・暗褐色土・赤褐色土・黒色土ブロックを多く含むことから人為堆積の可能性が高いと考えられる。

**壁** III・IV層を掘り込んでいる。壁面はやや開く。壁の残存高は最大で 0.11m である。

**床面** ほぼ平坦である。貼床（10 層）が、建物の残存する部分全体にわたって残る。貼床は黑色土と暗褐色粘質土の混合土で、固くしまる。床面で検出した遺構は柱穴 3 基、壁際溝、性格不明土坑 11 基である。竈は確認できなかった。竪穴内の位置関係から P01、P07、P13 を主柱穴と判断した。残る 1 基は、搅乱坑によって消失したと考えられる。P01 に明瞭な柱痕跡と柱の当たりが確認できる。柱径約 0.08m と想定できる。P04 は検出面に焼土ブロックが散在することから、竈跡の可能性を想定したが、焼土ブロックが P04 底面から浮くこと、SI12 床面で竈の袖やその痕跡を確認できなかつたことから竈ではないと判断した。壁際溝は、建物の東半部の壁際を巡る。深さ平均 0.02m を測る。

**床下** 貼床除去後、床下で検出した遺構は性格不明土坑 3 基である。土坑 3 基の SI12 との関連は不明である。

**遺物出土状況** 弓生土器 3 点、古墳前期土師器 2 点、古墳後期以降土師器類 8 点、時期不明土師器類 7 点、須恵器 27 点が出土した。埋土から土師器片、須恵器片が出土した。

**出土遺物** 502～504 は須恵器杯蓋である。502 は中央部がややふくらむボタン状のつまみをもつ。9 世紀前半に比定できる。503 は宝珠状のつまみをもつ。8 世紀中頃に比定できる。504 はやや小ぶりである。端部でほぼ直角に屈曲する。つまみをもつと思われる。9 世紀前半に比定できる。505 は須恵器有台杯である。口縁部に向かってやや開く。高台は直立する。内面に自然釉が付着する。8 世紀中頃に比定できる。506～508 は須恵器有台盤である。506 は口縁部がやや開く。底部は平らで、高台が一部残る。8 世紀中頃に比定できる。507 は底部から脚部で、高台の厚みが薄い。8 世紀中頃に比定できる。508 は口縁がほぼ直立し、高台も直立気味である。8 世紀中頃に比定できる。

**時期** 出土土器から東野VI期の可能性が高いと判断した。

## SI19（図219・226）(BS0230)

**検出状況** C地点 JI16～JK17 グリッドで検出した竪穴建物である。III層上面で検出した。建物西部を SK0811 に切られる。北部で SZ3 と近接する。平面形は、四辺がほぼ直線状の隅丸方形である。長軸の方位は、N-18°-E である。

**埋土** 黒色土、黒褐色土、暗褐色土がほぼ水平に堆積し、壁際埋土がやや傾斜して堆積する。埋土中に褐色土ブロックを多く含むことから人為堆積の可能性が高いと考えられる。

**壁** III層を掘り込んでいる。東壁は直立に近いが、残る壁面は大きく開く。壁の残存高は最大で 0.19 m である。

**床面** 建物中央付近から西寄りにやや凹凸のみられる貼床（7 層）が残存する。貼床は黄褐色土が主

床面

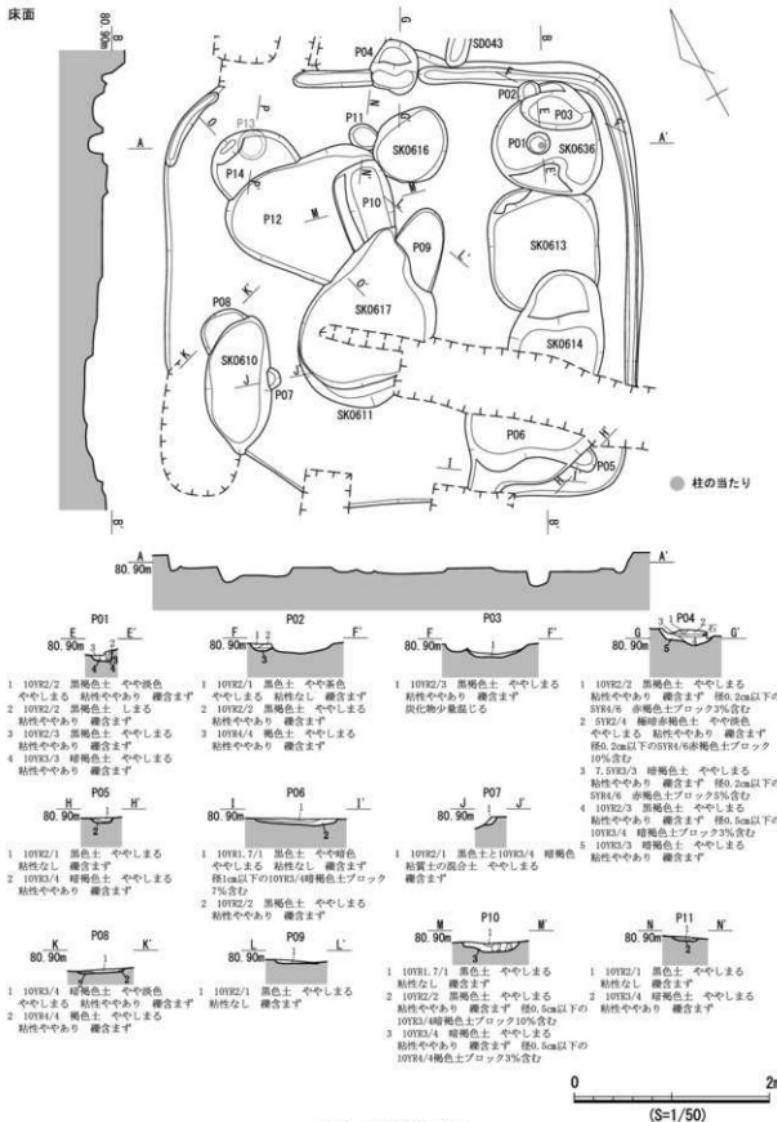


図216 SI12遺構図(1)

掘方

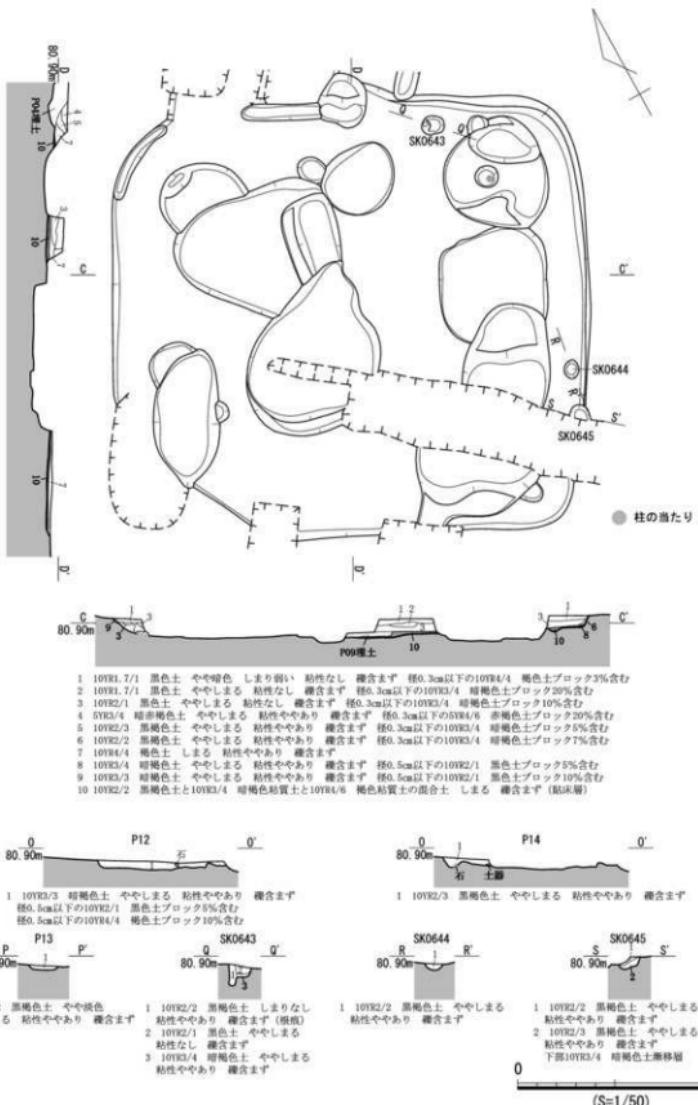


図217 SI12遺構図(2)

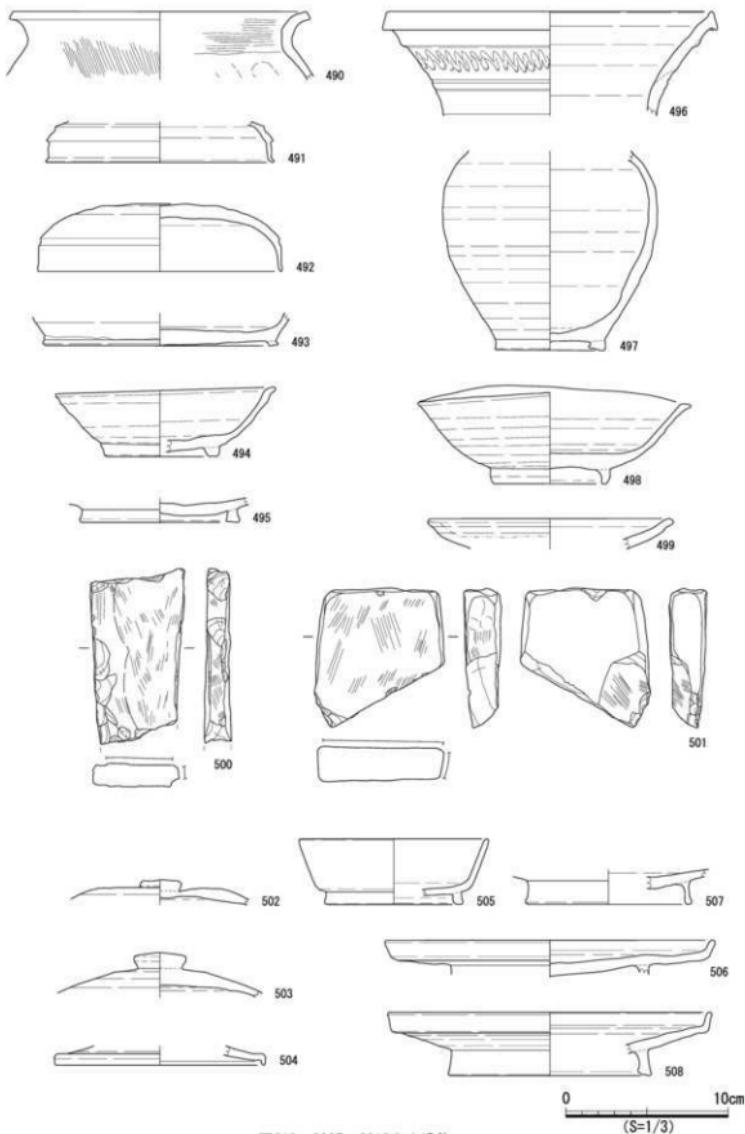


図218 S105・S112出土遺物

体で黒褐色土ブロックをわずかに含み、しまる。床面で検出した遺構は柱穴1基、貯蔵穴1基、性格不明土坑1基である。壁際溝、炉は確認できなかった。建物中央のP1を主柱穴と判断した。竪穴建物内及び竪穴掘方周囲に上屋を支えるような柱穴や柱の痕跡は確認できなかった。貼床除去後検出したSK1348は、P1を含むことからP1の掘方の可能性も考えられる。この場合、柱埋設後、貼床形成されたと考えられる。東壁際中央部で確認した長梢円形のP3を、竪穴内の位置と形状から貯蔵穴と判断した。底面は平らで、立ち上がりの東側は竪穴建物東壁と一致する。

**床下** 貼床除去後、性格不明土坑4基を検出したが、SI19との関連は不明である。

**遺物出土状況** 繩文土器9点、弥生土器5点、古墳前期土師器12点、古墳後期以降土師器類1点、中世土師器1点、時期不明土師器類38点、須恵器23点、灰釉陶器13点、山茶碗2点、陶器類8点、石器類1点が出土した。建物内部で近代以降の擾乱坑に切られており、繩文から近世の遺物を雜多に含む。

**出土遺物** 509はⅢ期斐C類である。口縁部は直線的に開く。端部外方に面をもち、叩きの痕跡が残る。内外面横ナデだが、摩耗が著しい。510は須恵器坏身である。受部端部の断面形は三角形で横につまみ出す。外面に自然釉が付着する。7世紀前半に比定できる。511は灰釉陶器碗である。高台はハの字状で端部に丸みをもつ。9世紀中頃に比定できる。512は瀬戸戸の登窯第1～4小期の擂鉢である。内面の擂鉢の幅が広いことから中世と考えられる。外面に沈線が2条巡るが上段の沈線は途切れる。513は美濃産の登窯第7小期の汁注である。口縁部は内にかえりが付き、蓋をもつと思われる。胴部外面に桜花の鉄絵を染め付ける。高台は削り出す。底部内面にトチン痕が見られる。底部と断面に煤が付着する。

**時期** 出土遺物から東野VI期の可能性が高いと判断とした。

#### S121（図220～222・226）（BS0572）

**検出状況** C地点 JM17～JN18グリッドで検出した竪穴建物である。III層上面で検出した。南西方向にやや大きく述べる発掘区南部の斜面上に構築されるため建物南部の立ち上がりを消失している。建物中央をSD11に切られる。建物北西部でSI25、北東部でSI22を切る。残存する三辺から北東～南西方向に長い隅丸方形と想定できる。長軸の方位は、N-40°-Eである。

**埋土** 褐色土ブロックを含む黒褐色土がほぼ水平に堆積する。下層にしたがい、褐色土ブロックの含有率が高くなる。埋土中に褐色土ブロックを多く含むことから人為堆積の可能性が高いと考えられる。南に向かい埋土が薄くなる。

**壁** III・IV層を掘り込んでいる。残存する壁面は直立に近い。壁の残存高は最大で0.13mである。

**床面** ほぼ平坦であるが、南に向かって僅かに傾斜する。貼床（6層）は黄褐色土を主体とし黒褐色土ブロックを不均一に含み、やや縮まる。床面で検出した遺構は柱穴4基、貯蔵穴1基、性格不明土坑13基である。竈、壁際溝は確認できなかった。なお、SI21北東部で重複するSK1382は、検出面で黒褐色土に赤褐色粒を含む埋土のため竈の可能性を想定し掘削したが、火床面や袖部などの構造的な特徴を確認できなかったため、SI21に後出する遺構と判断した。竪穴内の位置関係からP01、P02、P04を主柱穴と判断した。柱痕跡と柱の当たりは確認できなかった。埋土最上層に貼床層が確認できないことから、貼床形成後、柱穴が掘削されたと考えられる。P03は主柱穴の同心円上からやや内に入るため主柱穴から除外したが、その可能性も考えられる。

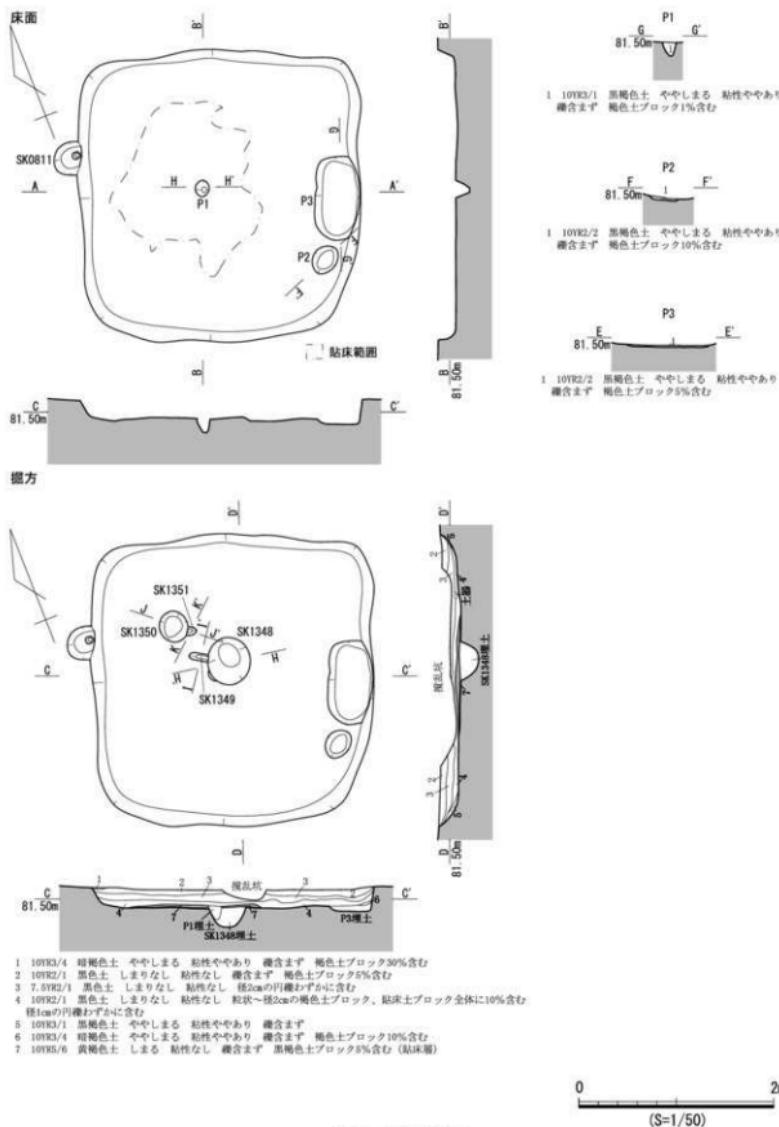


図219 SI19遺構図

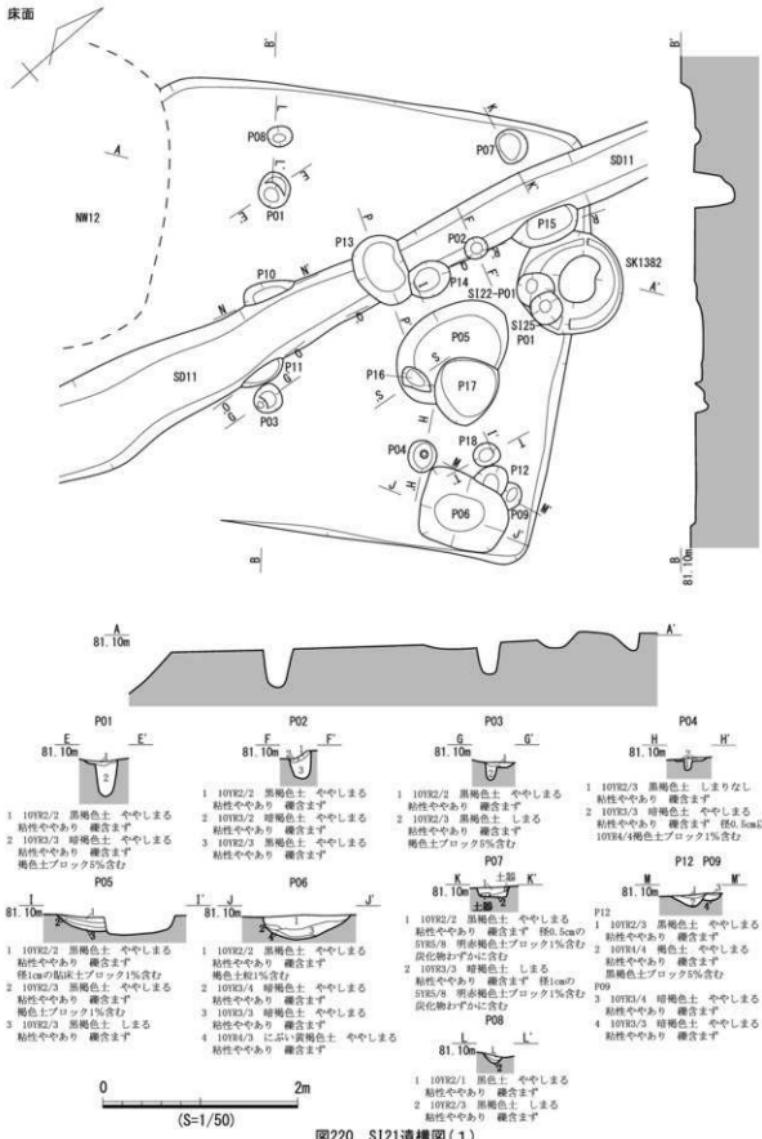


図220 SI21遺構図(1)

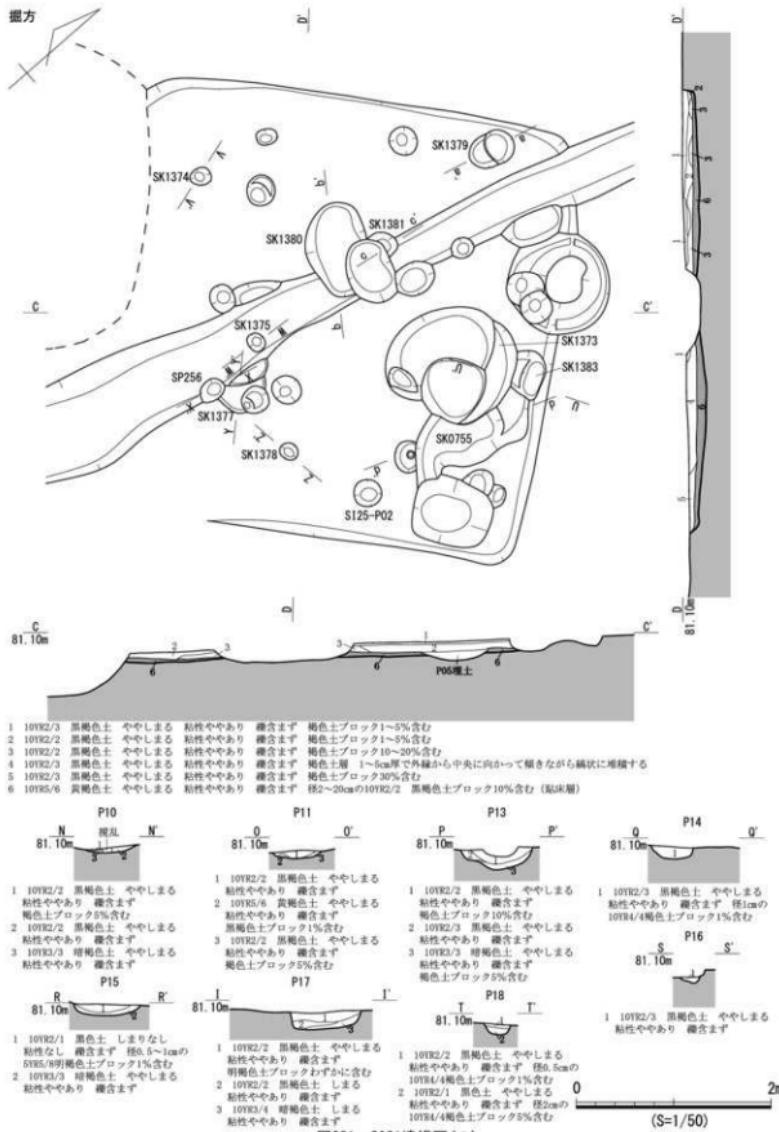


図221 S121遺構図(2)

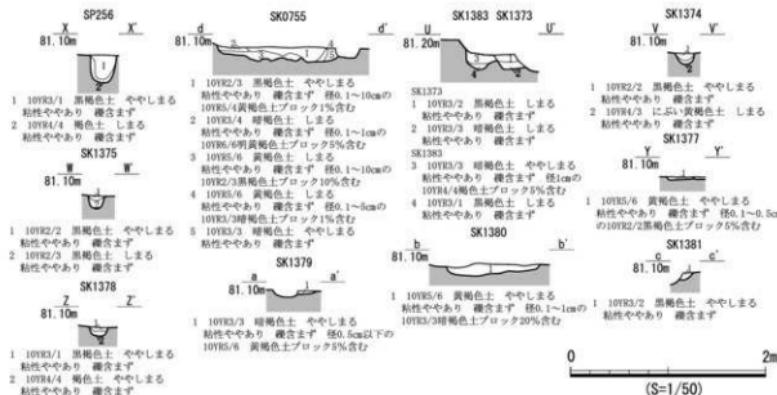


図222 SI21遺構図(3)

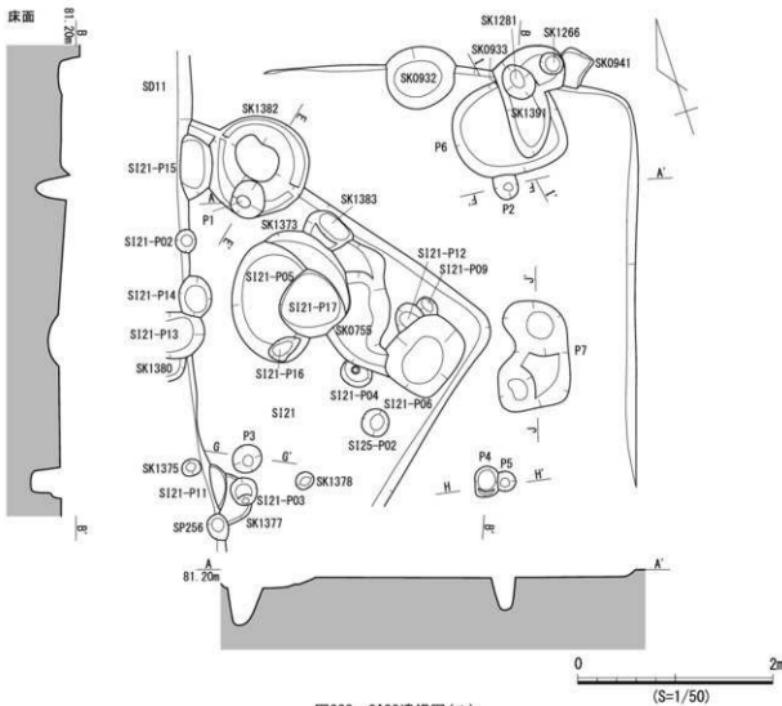


図223 SI22遺構図(1)

**貯蔵穴** 竪穴内東隅で検出したP06を竪穴内の位置関係と形状から貯蔵穴と判断した。北東辺は丸みを帯び、残る三辺は直線状である。底面はやや丸く、深さは0.25mを測る。埋土はほぼ水平の堆積である。

**床下** 貼床除去後、柱穴6基、性格不明土坑10基を検出した。検出した柱穴のうち5基を、SI22、SI25との重複関係から、SI22-P03、SI25-P01、SI25-P02、SI25-P03、SI25-P04とした。SK0755は、竪穴内北東部で検出した不定形の穴である。位置、規模、形状からSI21の掘方の可能性もある。その他の遺構とSI21との関連は不明である。

**遺物出土状況** 繩文土器3点、弥生土器10点、古墳前期土師器4点、古墳後期以降土師器類8点、時期不明土師器類32点、須恵器14点、山茶碗2点が出土した。山茶碗は埋土最上層で出土した。また、上層から中層までの間に須恵器の蓋や甕類などの破片が出土した。SI21 遺構内ではP17出土の須恵器甕の口縁部片(517)が出土した。

**出土遺物** 514はⅢ期壺F類の口縁部である。外面に凹線が4条巡り、直交する縱位の直線文が見られる。口縁端部上方に面をつくり、内彎する。515、516は須恵器坏蓋である。515は宝珠形のつまみをもつ。中心から2分の1外方で段をつくり、回転ヘラケズリと回転ナデの境になる。8世紀中頃に比定できる。516の口縁部はほぼ直立し、屈曲部に段をもつ。6世紀代と思われる。517は須恵器甕の口縁部で、頸部から外反して開き、口縁端部で直立する。端部は肥厚する。口縁端部内面側につまみ出す。端部上面をなでてややくぼませる。8世紀中頃に比定できる。

**時期** 出土遺物から東野VI期の可能性が高いと判断した。

#### SI22(図223~226)(BS0626)

**検出状況** C地点JM18~JN18グリッドで検出した竪穴建物である。Ⅲ層上面で検出した。南西方向に傾斜がやや大きくなる発掘区南部の斜面上に位置するため、建物南部と西部の立ち上がりを消失している。南西部をSI21に切られる。残存する辺から平面形は隅丸方形と想定できる。長軸の方位は、N-20°-Wである。

**埋土** 黒褐色土と暗褐色土が不均一に堆積する。埋土中に黄褐色土ブロックを含むことから人為堆積の可能性が高いと考えられる。

**壁** Ⅲ・Ⅳ層を掘り込んでいる。壁面は北壁は直立に近く、東壁はなだらかに開く。南、西壁は消失しており不明である。壁の残存高は最大で0.03mである。

**床面** ほぼ平坦であるが、南西に向かってやや傾斜する。貼床(4~7層)は黄褐色土が主体で暗褐色土ブロックを不均一に含み、やや縮まる。床面で検出した遺構は柱穴2基、貯蔵穴1基、性格不明土坑2基である。竈、壁際溝は確認できなかった。重複するSI21・22で検出した遺構の中に、配置状況からSI22に関連すると判断した主柱穴が2基ある。竪穴内の位置関係からSI21内のP01、P03、SI22内のP02、P04を主柱穴と判断した。柱痕跡や柱の当たりは確認できなかった。

**貯蔵穴** 竪穴内北東隅部で検出したP06を竪穴内の位置、規模、形状から貯蔵穴の可能性が高いと判断した。東辺が直線状で、残る三辺は丸みを帯びる。底は平らである。埋土は、北部に偏る堆積である。

**床下** 貼床除去後、性格不明土坑15基を検出した。SK1397は底面から須恵器坏蓋(521)が出土した。SI22出土須恵器とほぼ同時期に位置付くことから建築儀礼の土坑である可能性も考えられるが、関連

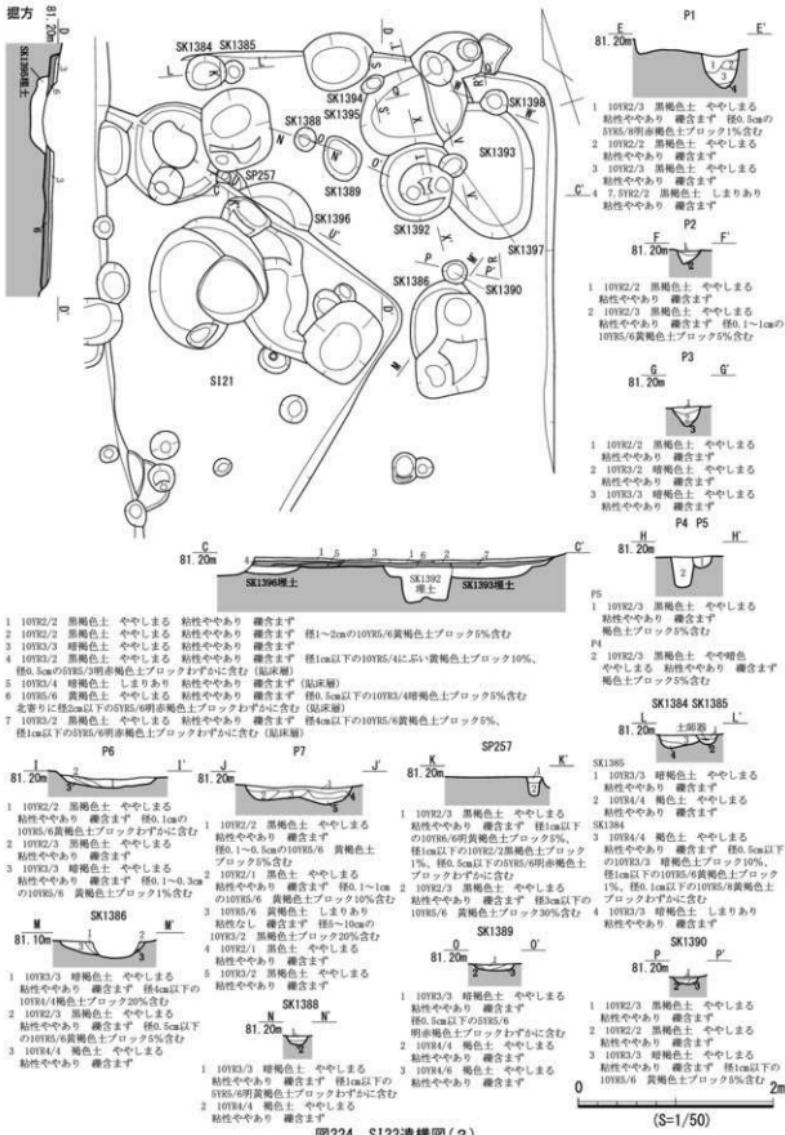


図224 S122遺構図(2)

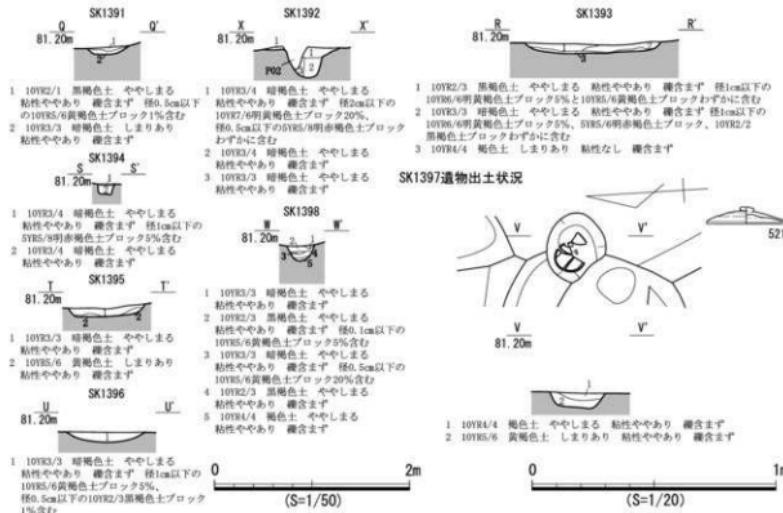


図225 S122遺構図(3)

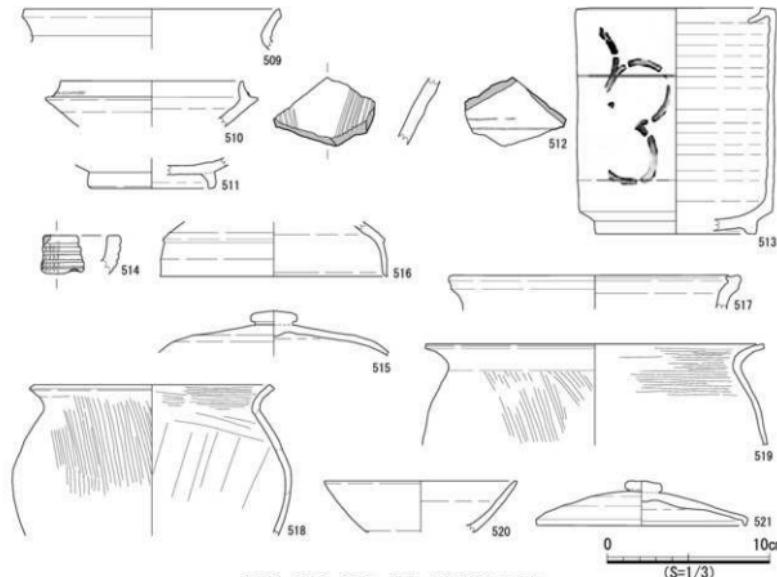


図226 S119・S121・S122・SK1397出土遺物

は不明である。その他の性格不明土坑と SI22との関連は不明である。

**遺物出土状況** 弥生土器6点、古墳前期土師器1点、古墳後期以降土師器類6点、時期不明土師器類5点、須恵器12点が出土した。また、P04上層から灰釉陶器1点（取上番号22783）、P06からV・VI期甕（519）が出土した。床下で検出したSK1397底面から須恵器坏蓋（521）が出土した。

**出土遺物** 518、519はV・VI期甕である。518は口縁部が開く。口縁端部に面をもち、沈線が1条巡る。胴部外面のハケが口縁部の中程まで見られる。外面に煤が付着する。519は口縁部が外反して開く。口縁端部外方に面をもつ。520は須恵器坏類である。小型で、高台の有無は不明である。緩やかに開き、折損部分で屈曲することから底部になると思われる。521はSK1397出土の須恵器坏蓋である。頂部にボタン状のつまみをもち、口縁端部で屈曲する。外面は自然釉が付着する。8世紀後半に比定できる。

**時期** SI21との重複関係と埋土出土遺物から東野VI期の可能性が高いと判断した。

#### SI25（図227）（BS0918）

**検出状況** C地点 JM17・18グリッドで検出した堅穴建物である。III層上面で検出した。SI21に切られるため、北西の一部のみ残存する。平面形は不明であるが、残存する二辺から隅丸方形の可能性が高いと考えられる。長軸の方位は、N-2°-Wである。

**埋土** 埋土は後世の削平のため残存しない。検出時に貼床層が表出していった。

**壁** III層を掘り込んでいる。壁面形状は不明である。

**床面** ほぼ平坦である。黄褐色土が主体で黒褐色土ブロックを含み、やや締まる。床面で検出した遺構は性格不明土坑7基である。堅穴内外の位置関係から、SI21内で検出したP01、P02、P03、P04の4基をSI25主柱穴と判断した。柱痕跡と柱の当たりは確認できなかった。P03はSI21貼床層が残存しており、最上層を覆う。SI22床下で検出したSK1387は、位置、規模、形状、重複関係からSI25の貯蔵穴の可能性が考えられる。底面は2段になっており、土層と平面から2基の遺構が切り合っている可能性も考えられる。

**床下** 貼床除去後、遺構は確認できなかった。

**遺物出土状況** 時期不明土師器1点が出土した。

**出土遺物** 実測に足る遺物は出土していない。時期不明土師器はIII・IV期高坏部でミガキが残る。

**時期** 出土遺物及びSI21、SI22との重複関係から東野III～VI期の可能性が高いと判断した。

#### SI26（図228～231）（AS1800）

**検出状況** C地点 KD4～KE5グリッドで検出した堅穴建物である。III層上面で検出した。平面形は、南北方向にやや長い隅丸方形である。SI27、SB11、SA14を切る。主軸はN-10°-Eである。

**埋土** 表土除去後床面に到達し、埋土が確認できないため堆積状況は不明である。

**壁** III層を掘り込んでいる。壁面形状は不明である。

**床面** ほぼ平坦である。貼床（3層）が全体にわたって明瞭に残り、中央部はより硬化する。貼床は黒褐色粘質土と暗褐色粘質土の混合土で、固く締まる。床面で検出した遺構は柱穴3基、壁際溝、竈1基、性格不明土坑2基である。堅穴内の位置関係からP1、P2、P3を主柱穴と判断した。4本柱建物と想定でき、残る1基は攪乱溝により消失したと考えられる。3基とも一気に埋没した土層を示す。底面で柱の当たりが確認できる。P1のみ下層で柱痕跡（3層）が確認できる。この柱痕跡か

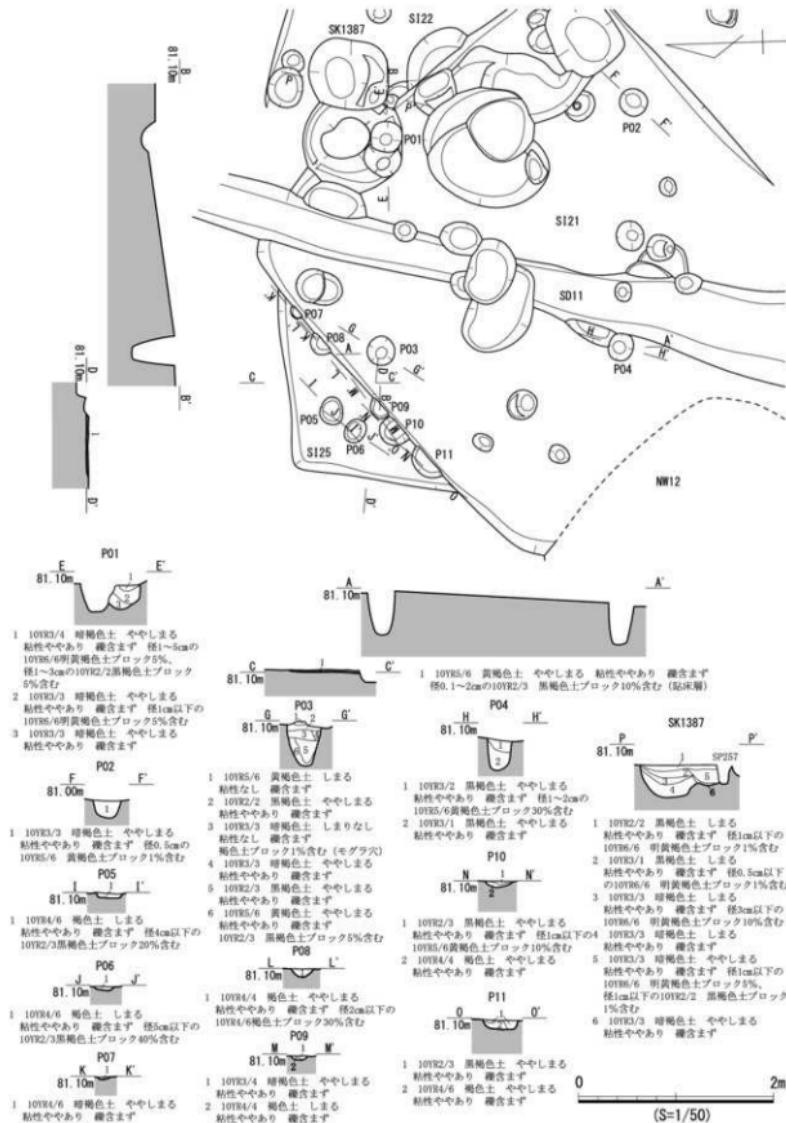


図227 S125遺構図

床面

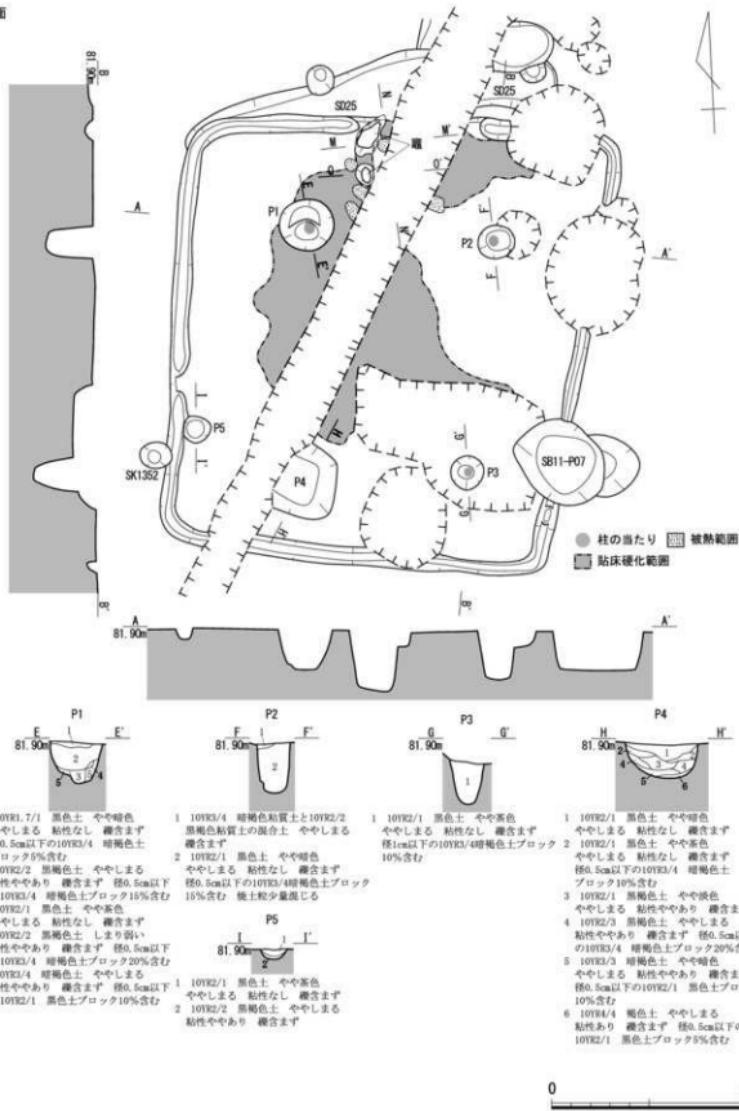
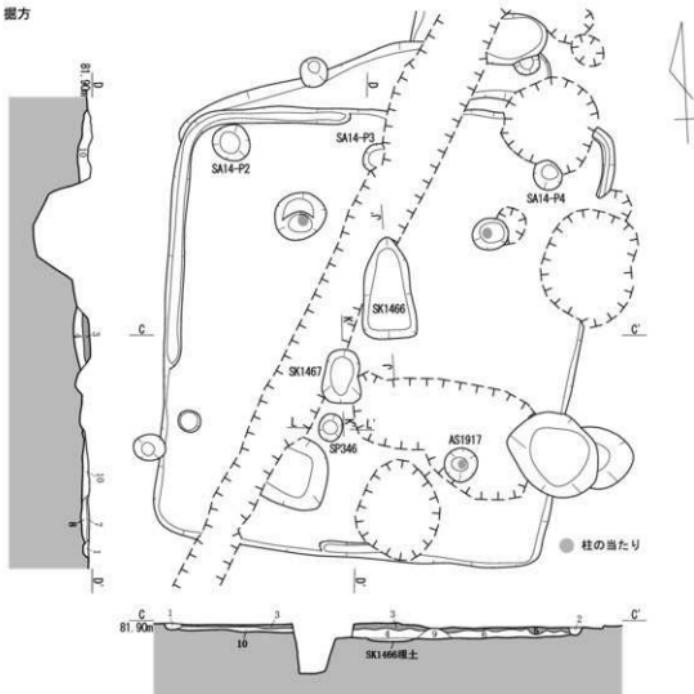


図228 S126遺構図(1)

0 2m  
(S=1/50)

## 図方



- 1 10YR2/2 黒褐色土 やや赤色 ややしまる 粘性やあり 硬含まず (堅密構造土)
- 2 10YR2/2 黒褐色土 やや赤色 ややしまる 粘性やあり 硬含まず (堅密構造土)
- 3 10YR2/2 黒褐色粘質土と10YR2/4 坚硬物少量混じるの底付土 固くしまる 硬含まず (堅密層)
- 4 10YR2/2 黒褐色土 ややしまる 粘性やあり 硬含まず (堅密層)
- 5 10YR2/1 黑色土 しまる 粘性なし 硬化物少量混じる (堅密層)
- 6 10YR2/2 黑褐色土 ややしまる 粘性やあり 硬含まず 坚硬物少量混じる (S127埋土)
- 7 10YR2/1 黑褐色土 やや赤色 ややしまる 粘性なし 硬含まず
- 8 10YR2/3 黑褐色土 ややしまる 粘性やあり 硬含まず
- 9 10YR1/1 黑色土 やや赤色 ややしまる 粘性なし 硬含まず 0.1cm以下の10YR3/4 坚硬物10%含む 坚硬物多量に混じる
- 10 10YR4/6 橙色土 ややしまる 粘性あり 硬含まず 0.1cm以下の10YR3/4 坚硬物7%含む

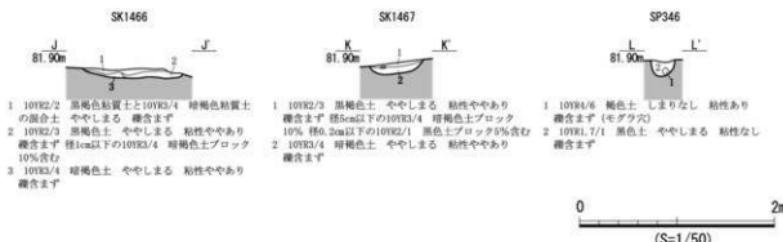
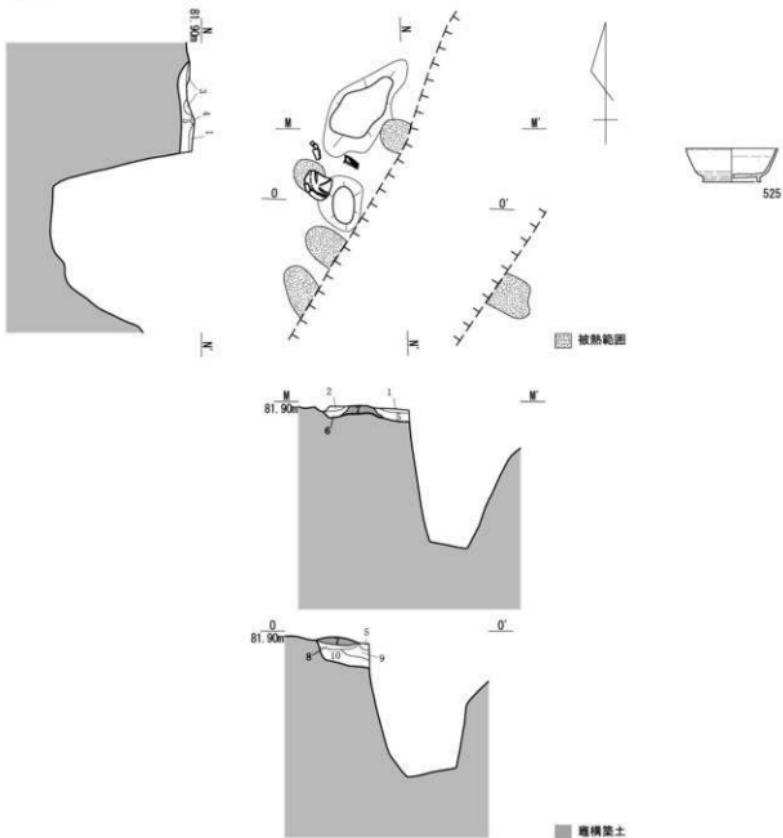


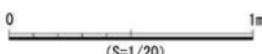
図229 S126遺構図(2)

SI26-底



- 1 50Y2/4 楊葉色或褐色土 ややしまる 粘性ややあり 硬含まず 厚0.1cm以下の2, 50Y4/8 黒褐色土ブロック10%含む (電天井部崩落土)
- 2 10Y4/4 黑褐色土 ややしまる 粘性あり 硬含まず 厚0.5cm以下の10Y2/3 黑褐色土ブロック5%含む
- 3 10Y2/7 黑褐色土 ややしまる 粘性ややあり 硬含まず 厚0.5cm以下の10Y3/4 黑褐色土ブロック10%含む
- 4 10Y3/2 楊葉色土 ややしまる 粘性ややあり 硬含まず
- 5 10Y3/4 楊葉色土 ややしまる 粘性ややあり 硬含まず
- 6 10Y2/2 黑褐色土 ややしまる 粘性ややあり 硬含まず 厚0.5cm以下の10Y3/4 楊葉色土ブロック5%含む
- 7 10Y5/4 にじむ黄褐色土 やくしまる 粘性あり 硬含まず 厚0.5cm以下の10Y2/4 黑褐色土ブロック5%含む (遺構底土)
- 8 10Y2/2 黑褐色粘質土と10Y3/4 楊葉色粘質土の混在土 固くしまる 硬含まず 厚0.5cm以下の10Y2/4 黑褐色土ブロック5%含む
- 9 10Y2/1 黑褐色土 やや赤色 ややしまる 粘性なし 硬含まず
- 10 10Y3/4 楊葉色土 ややしまる 粘性ややあり 硬含まず 厚0.2cm以下の10Y4/6 黑褐色土ブロック5%, 10Y2/1 黑褐色土ブロック7%含む

図230 SI26遺構図(3)



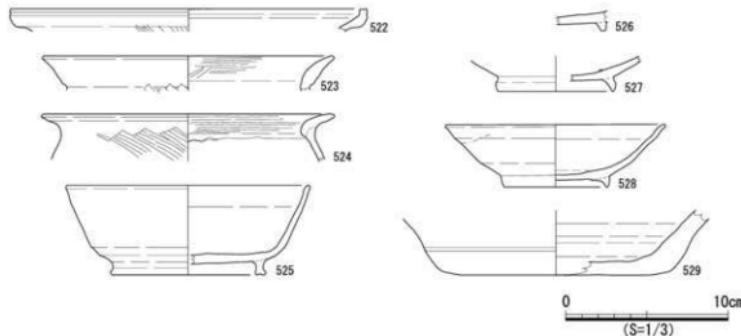


図231 SI26出土遺物

ら、柱径は0.13mと想定できる。P4は形状から貯蔵穴の可能性が考えられるが、南西の主柱穴と重複する位置にあることから、この建物に関連する遺構でない可能性も考えられる。壁際溝は、龜部分を除いて建物をほぼ全周する。深さ平均0.10mを測る。貼床層を切っていることから、貼床形成後に掘削されたと考えられる。

**龜** 建物の北部中央に構築されている。上層の削平及び近現代の搅乱溝によって西袖の一部が確認できるのみである。1層は強く被熱する層だが、袖部（7層）との間に5層を挟むことから、燃焼部ではなく、天井崩落土の可能性が高いと考えられる。天井崩落土は、西袖外縁の南西側に多く確認できる。西袖はにぶい黄褐色粘質土が主体で、固く締まる。直下で貼床層が確認できることから、貼床形成後に龜を構築したと考えられる。天井崩落土下層から須恵器有台坏（525）が出土した。

**床下** 貼床除去後、SA14柱穴3基、柱穴1基、性格不明土坑3基を検出した。SA14柱穴以外の遺構のSI26との関連は不明である。

**遺物出土状況** 弥生土器4点、古墳前期土師器1点、古墳後期以降土師器類9点、時期不明土師器類24点、須恵器1点、石器類1点が出土した。

**出土遺物** 522はⅢ期甕A類である。口縁部は受け口状で、口縁端部を叩き調整後、沈線が1条巡る。口縁端部外面にも沈線が1条巡る。523、524はV・VI期甕である。523は口縁部が開き、内面は横ハケ調整する。頸部にハケのはじまりの工具当たりが3箇所見られる。524は口縁部が開き、内面は横ハケ調整する。頸部以下をハケ調整するが、調整開始時に頸部に強く工具を押し当てるためその痕跡が残る。525は須恵器有台坏である。口縁端部は肥厚する。坏部下面下方にヘラケズリでできた面が明瞭に残る。高台端部を棒状工具で回転ナデ調整し、沈線状のくぼみになる。8世紀前半に比定できる。526～528は灰釉陶器碗である。526は内面外方に中心から同心円状に付着した釉薬が見える。527は内面に重ね焼きの痕跡が残る。9世紀後半に比定できる。528は口縁端部が緩やかに屈曲する。口縁端部の灰釉が厚く施釉されることから、底部をもって漬けがけしたと考えられる。9世紀後半に比定できる。529は山茶碗の壺である。底部近くの外面に沈線が見られる。

**時期** 龜出土土器（525）から東野VI期と判断した。

## 2 檻

当該期に関連すると判断した檻を3条確認した。

### SA02（図232）

**検出状況** C地点KI1～KJ1グリッド、Ⅲ層上面で検出した。柱穴が直線上に位置することから檻と判断した。長さは4.62mを測り、柱間は、P1-P3で2.04m、P3-P2で1.20m、P2-P4で1.38mである。辺の方位はN-25°-Eである。

**柱穴** 4基の柱穴を検出した。柱穴の規模は、直径0.25～0.46m、深さ0.14～0.23mを測る。すべての柱穴で柱痕跡を確認し、柱径は0.07～0.08mと想定できる。P3は南西部でⅢ層が被り袋状となるが、硬化面は垂直方向でⅢ層部分と重ならない。

**遺物出土状況** P2上層から時期不明土師器類3点、灰釉陶器1点、P4上層から時期不明土師器類1点が出土した。

**出土遺物** 実測に足る遺物は出土していない。

**時期** 出土遺物から東野VI期の可能性が高いと判断した。

### SA14（図233）

**検出状況** C地点KD4～6グリッド、P1は搅乱坑底、P2、P3、P4はSI26床下、P5はⅢ層上面で検出した。柱穴が直線上に位置することから檻と判断した。SI26に切られ、SI27を切る。長さ6.94mを測り、柱間は、P1-P2で1.86m、P2-P3で1.56m、P3-P4で1.74m、P4-P5で1.78mである。辺の方位はN-80°-Wである。

**柱穴** 5基の柱穴を検出した。柱穴の規模は、直径0.52～0.67m、深さ0.30～0.49mを測る。P1、P5で明瞭な柱痕跡と柱の当たりが確認できる。柱径は0.10mと想定できる。

**遺物出土状況** P5上層から古墳後期以降土師器類2点が出土した。

**出土遺物** 実測に足る遺物は出土していない。

**時期** SI26、SI27との重複関係から、東野Ⅲ～VI期と判断した。

### SA17（図234）

**検出状況** C地点KL1～2グリッド、SD47底で検出した。柱穴が直線上に位置することから檻と判断した。長さ3.04mを測り、柱間は、P1-P2で1.50m、P2-P3で1.54mである。辺の方位はN-86°-Wである。

**柱穴** 3基の柱穴を検出した。柱穴の規模は、直径0.26～0.57m、深さ0.21～0.23mを測る。すべての柱穴で明瞭な柱痕跡と柱の当たりが確認できる。柱径は0.09～0.17mと想定できる。

**遺物出土状況** P3下層から縄文土器4点が出土した。

**出土遺物** 実測に足る遺物は出土していない。

**時期** SD47との重複関係と出土遺物から、東野II～VI期と判断した。

## 3 溝状遺構（図235）

当該期に関連すると判断した溝状遺構は5条である。通水の痕跡はない。5条ともにVI期に属する遺構との重複関係や出土遺物によって、VI期に関連する溝状遺構と判断した。以下、特徴的な溝状遺構について記述する。

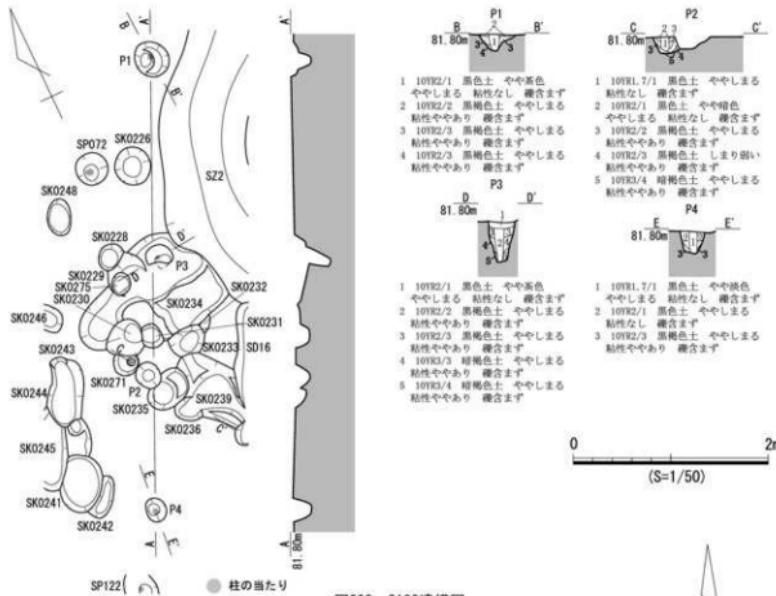


図232 SA02遺構図

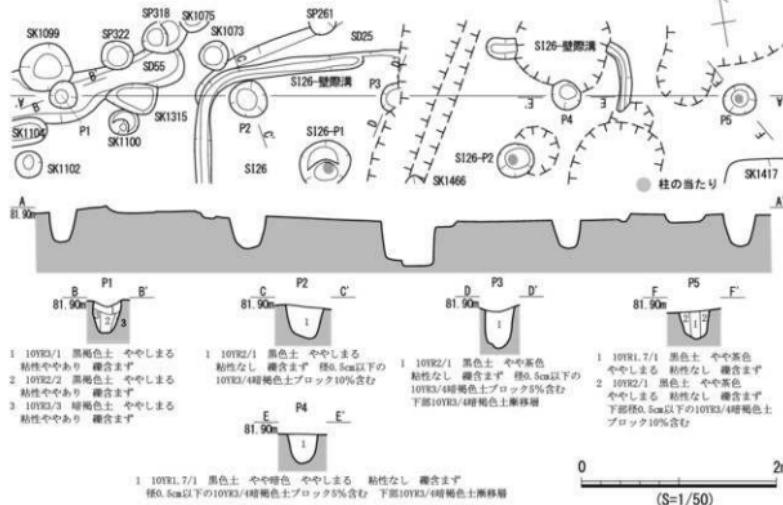


図233 SA14遺構図

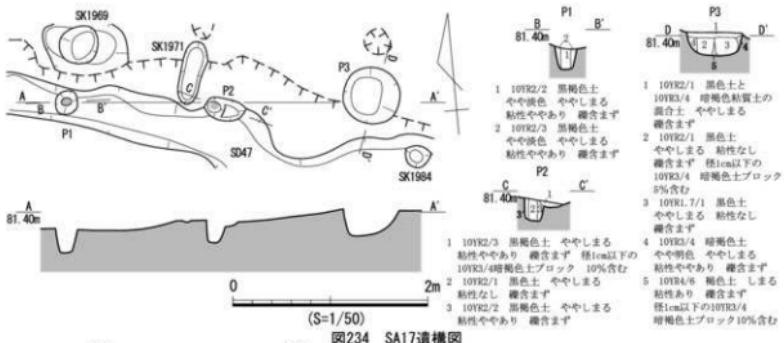


図234 SA17遺構図

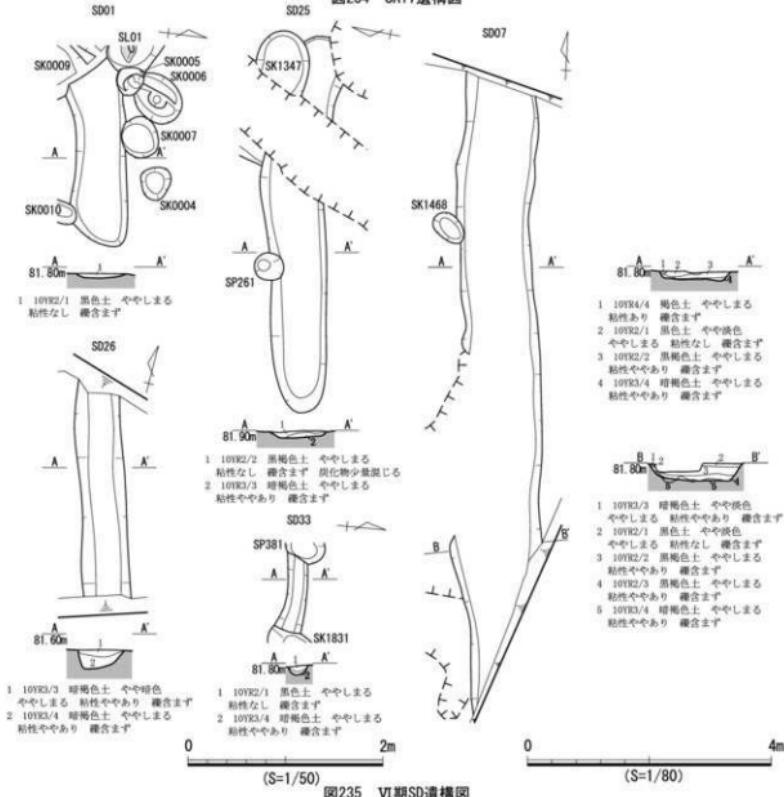


図235 VI期SD遺構図

**SD07 (図 235・240) (AS1969)**

**検出状況** C地点 KD8～KF8 グリッド、III層上面で検出した溝状遺構である。北部と南部は発掘区外へ延びる。北部で、SI29、SI49 を切り、南部で SI30 を切る。残存全長 13.4m、最大幅 1.58m、深さ 0.35m を測る。主軸は N-2° -W である。

**埋土** ほぼ水平の堆積である。底面は平らで、断面形は逆台形を呈する。通水を示す堆積は認められない。

**遺物出土状況** 埋土から縄文土器 29 点、弥生土器 5 点、古墳前期土師器 6 点、古墳後期以降土師器類 13 点、時期不明土師器類 60 点、須恵器 1 点、灰釉陶器 4 点、石器類 10 点が出土した。遺物は雑多に出土しているが、SI29・30・49 と重複する範囲で弥生土器や土師器の出土が比較的多い。埋土上層で石棒（534）が出土した。

**出土遺物** 530 は V・VI 期甕である。器壁は厚い。内外面は横ナデ調整する。531 は須恵器壺蓋である。天井部から 3 周のケズリが見られ、面をもつ。7 世紀代と思われる。532、533 は灰釉陶器碗である。532 の高台は断面形が逆三角形である。内面に施釉される。碗内に重ね焼きの痕跡が残る。533 は口縁部で、端部外方が肥厚する。灰釉は全面に施され、漬けがけかハケぬりかは不明である。534 は石棒である。断面形は八角形状で、それぞれの面に縦方向の線状痕が認められる。先端部はやや曲がり、ふくらむ。

**時期** III・IV 期の遺構を切ること、出土遺物が VI 期に収まることから IV 期以降に構築され、VI 期には埋没した区画溝と判断した。

**その他の溝状遺構出土遺物 (図 240)** VI 期に関連すると判断した溝状遺構から出土した特徴的な遺物について記述する。535 は SD26 出土の灰釉陶器碗である。外面下半の回転ヘラケズリによって面をつくる。いわゆる稜碗である。底部内面中央がくぼむ。灰釉が直線的であることから漬けがけと思われる。9 世紀後半に比定できる。536 は SD26 出土の打製石斧である。両側縁がほぼ平行の短冊形で、中央部や上方に装着痕状の摩耗範囲がある。刃部に斜方向の線状痕が見られる。

**4 柱穴 (図 237)**

当該期に関連すると判断した柱穴は 8 基である。8 基ともに VI 期に属する遺構との重複関係や出土遺物によって、VI 期に関連する柱穴と判断した。

**5 焼土遺構 (SL)・土坑 (SK) (図 236～239)**

当該期に関連すると判断した焼土遺構は 2 基、土坑は 74 基である。すべて VI 期に属する遺構との重複関係や出土遺物によって、VI 期に関連する土坑と判断した。以下、焼土遺構と特徴的な土坑について記述する。

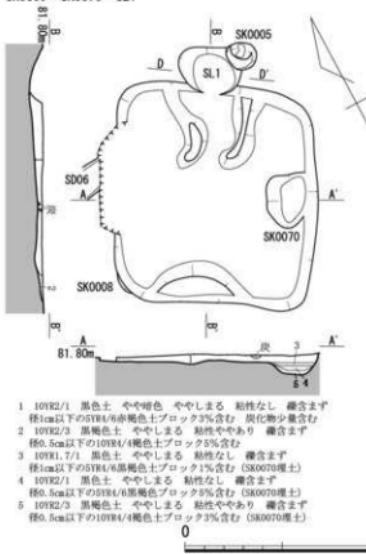
**SK0008 (図 236・240) (AS0012)**

**検出状況** C 地点 JE18 グリッド、III 層上面で検出した。平面形は円形である。検出面で灰釉陶器碗の高台部と口縁部が露出していた。

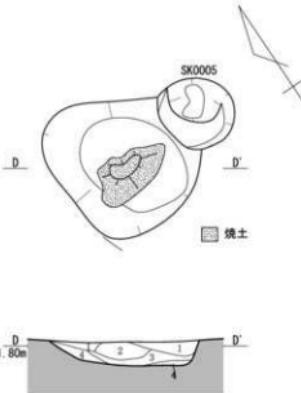
**埋土** 埋土は黒褐色土に褐色土ブロックを含む单層で、一気に埋没した状況を示す。

**遺物出土状況** 土坑東部出土の灰釉陶器碗（537）は逆位で出土した。高台部が割れ、西方へずれてい

SK0009・SK0070・SL1

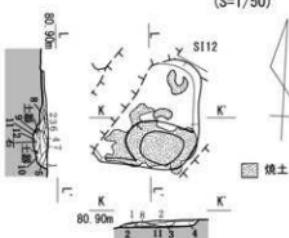


SL1

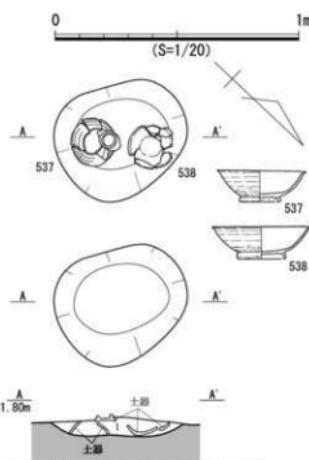


- 1 10YR2/1 黒色土 ややしまる 粘性なし 繩合ます
- 2 SYR4/6 赤褐色土粒1%含む
- 3 10YR2/4 極端赤褐色土 シamar 粘性なし 繩合ます
- 4 10YR2/6 赤土ブロック20%含む (焼土)
- 5 10YR2/2 黒褐色土 シamar 粘性ややあり 繩合ます
- 6 10YR4/6 赤土ブロック7%含む
- 7 10YR2/3 黑褐色土 シamar 粘性ややあり 繩合ます

SL2



SK0008



- 1 10YR2/2 黑褐色土 ややしまる 粘性ややあり 繩合ます
- 2 SYR4/4 極端褐色土 5%含む

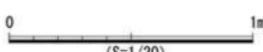


図236 SK0009・SK0070・SL1・SL2・SK0008遺構図

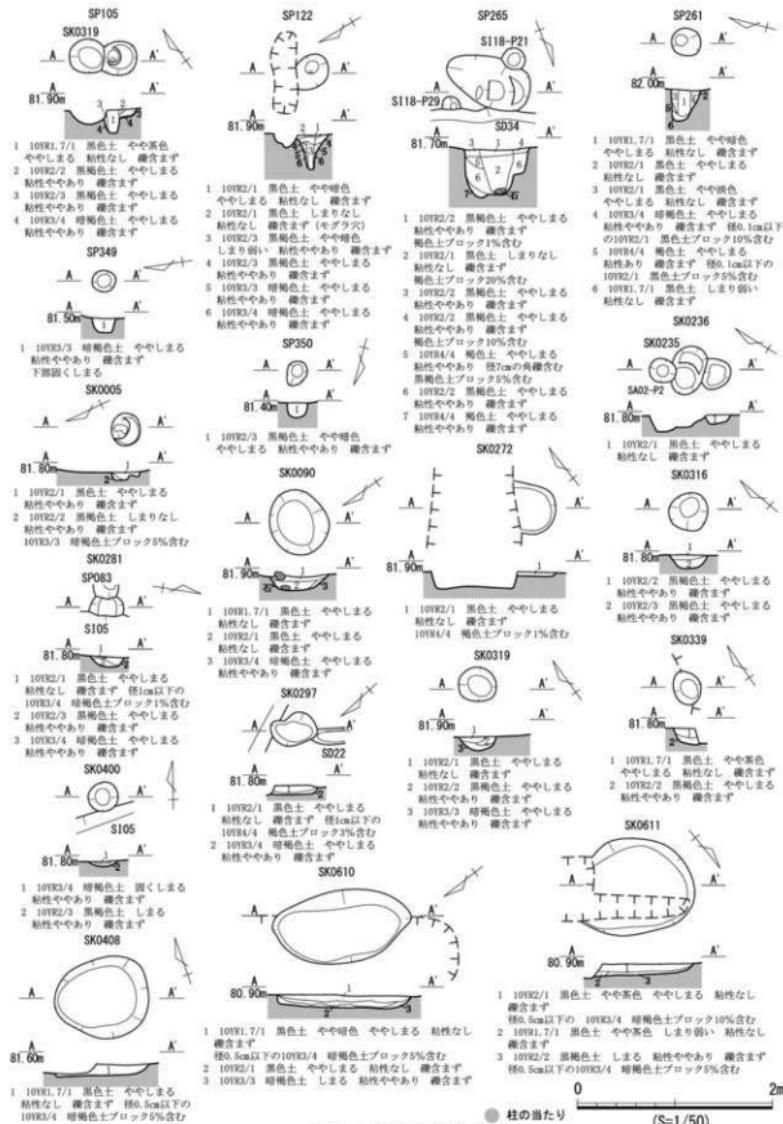


図237 VI期SP・SK遺構図

た。土坑西部出土の灰釉陶器碗（538）は正位で出土した。土圧のためやや潰れて出土した。251は口縁を、252は高台を底面に接することから、意図的に配置されたと考えられる。灰釉陶器碗2個体以外の遺物は出土しなかった。土器埋納遺構と判断した。

**出土遺物** 537、538は灰釉陶器碗である。537は口縁端部が外反する。高台はハの字状で潰れ気味である。ところどころ灰釉の濃さが異なり、内面に未施釉の箇所がある。よって、潰けがけの可能性が高いと思われる。9世紀中頃に比定できる。538は口縁端部が外傾する。内面に重ね焼き痕が見られる。高台は三日月状である。内面の灰釉に直線的なところがあることから潰けがけと思われる。9世紀中頃に比定できるが251に後出する。口径は537が大きい。

**時期** 出土遺物から、東野VI期と判断した。

**SK0009・SK0070・SL1（図236・240）（AS0013, AS0113, AS0009）**

**検出状況** C地点 JE18 グリッド、III層上面で検出した。平面形は隅丸方形である。SK0008に切られる。貼床、壁際構、柱穴などの豎穴建物関連遺構が確認できないことから豎穴状遺構と判断した。

**埋土** 埋土は南部の舌状部分が先に埋没し、その後全体が一気に埋没している。

**底面** 底部はほぼ平らだが、前述の通り南部に舌状の高まりが確認できる。SL1が北辺中央部に位置し、SK0009底部にSL1を挟むような竈の袖状の高まりが確認できる。袖状の高まりは、SK0009 挖削時平らにしてから構築したものではなく、基盤層（III層）を袖状に残したもので、SL1と連動して構築されている可能性が考えられる。SL1は、中央部に焼土を検出した円形の遺構である。中央部で確認した焼土（2層）は中央部が盛り上がる。最も被熱した部分である。その下層の3層に焼土ブロックが含まれるが2層ほどではない。また、東壁に接して床面で検出したSK0070は、豎穴東壁と一致することから、この豎穴状遺構に付属するものであると考えられるが性格は不明である。

**遺物出土状況** SK0009は、埋土全体から古墳前期土師器1点、古墳後期以降土師器類3点、時期不明土師器類3点、埋土上層から須恵器1点、灰釉陶器1点、山茶碗1点が出土した。また、埋土中から炭化物が17点出土した。SK0070からV・VI期土師器2点が出土した。SL1からV・VI期土師器類3点、時期不明土師器類1点が出土した。

**出土遺物** 539はSK0009出土の灰釉陶器小碗である。口縁端部を外方へつまみ出す。高台は外反する。外面は全面施釉される。底部内面に曲線の弱い灰釉が認められることから潰けがけと思われる。540はSK0070出土のV・VI期甕である。古代の長胴甕と思われる。外面は粗いハケ、内面は板ナデ調整する。頸部に沈線が1条巡る。胴部やや上方に最大径をもつ。

**時期** SK0008との重複関係と出土遺物から東野VI期と判断した。

**SL2（図236・240）（AS1338）**

**検出状況** C地点 JN15 グリッド、SI15 埋土中で検出した。平面形は不定形である。検出面に焼土が全体に広がる。SI15を切る。

**埋土** 南部がやや深くなる二段構造である。全体に焼土粒を含むが、底部被熱は僅かである。SI15の埋土が薄く、一部床面が露出していたことから、SI15の付属遺構の可能性も考えられる。

**遺物出土状況** 埋土から時期不明土師器類3点、須恵器32点、灰釉陶器4点、石器類1点が出土した。底部に接して須恵器有台盤（542）が出土した。

**出土遺物** 541は須恵器無台盤である。やや小型で、口縁部に向かって緩やかに開く。底部は平らに

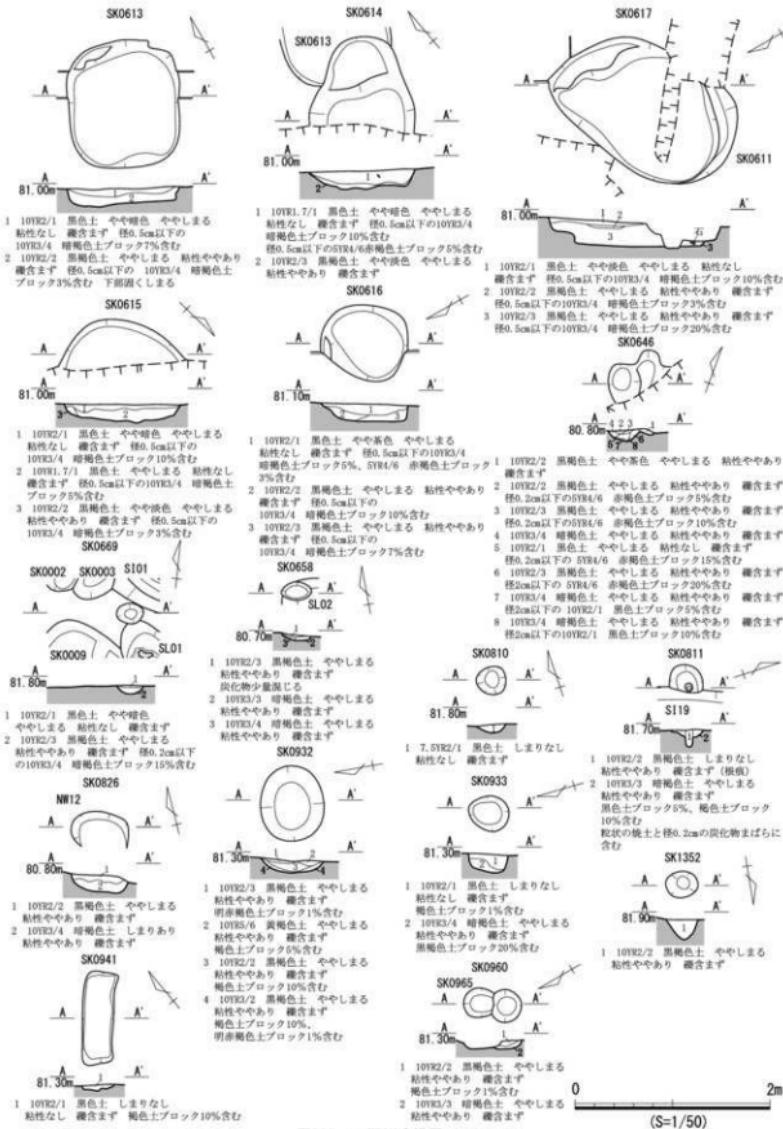


図238 VI期SK遺構図（1）

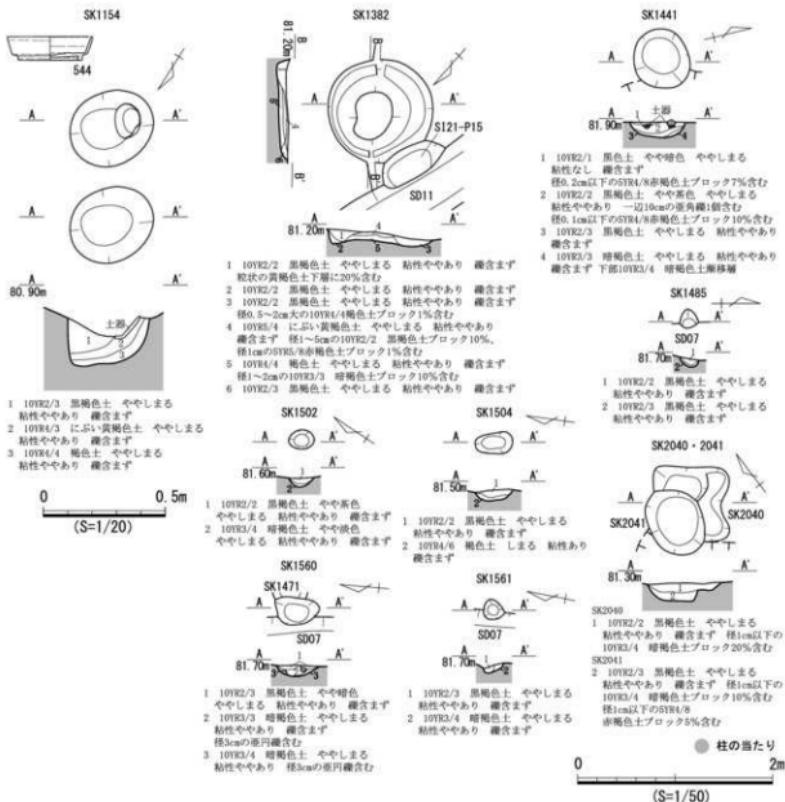


図239 VI期SK遺構図(2)

仕上げる。9世紀前半に比定できる。542は須恵器有台盤である。口縁部はやや開く。高台はハの字状で、中程が細くなる。9世紀前半に比定できる。543は灰釉陶器皿である。口縁部は端部で外反する。内面中央部のみ無施釉である。外面ナデが強く、凹凸が強い。9世紀後半に比定できる。

**時期** SI15と重複関係と出土遺物から、東野VI期と判断した。

#### SK1154 (図239・240) (BS0898)

**検出状況** JN17グリッド、倒木痕NW12の壁面で検出した性格不明の土坑である。平面形は梢円形である。NW12掘削時に須恵器壙蓋が出土したため、周囲を精査してプランを確認した。

**埋土** 北東部の壁が立ち、その方向にくぼみが偏る埋土である。

**遺物出土状況** 埋土最上層から須恵器有台盤(544)が正位で出土した。

**出土遺物** 544は須恵器有台盤で、箱形の形状である。内外面は回転ナデ、底部外面はヘラ切りが見

られる。貼付高台で、内側にやや屈曲する。8世紀前半に比定できる。

**時期** 出土遺物から東野VI期と判断した。

**その他の土坑出土遺物（図240・241）** VI期に関連すると判断した土坑から出土した特徴的な遺物について記述する。545はSK0090出土のIII期甕B3類である。口縁部はやや開き、僅かに内彎する。口縁部内面にヘラ状工具の当たりが沈線状に残る。546はSK0615出土の時期不明甕B1類である。口縁部は外反する。内外面はヨコナデ調整する。547、548はSK0932出土である。547はV・VI期甕で、口縁部は外反して開く。胎土が粗く、長胴甕である。548は須恵器有台坏で、箱形である。高台は開き、端部で肥厚する。内面に煤が付着する。8世紀前半に比定できる。549はSK1373出土の須恵器坏蓋である。端部で屈曲する。頂部にボタン状のつまみをもつ。8世紀後半に比定できる。550はSK1393出土のV・VI期甕の底部である。底部外面に木葉痕とヘラ描きが見られる。551はSK1395出土の須恵器坏蓋である。端部で屈曲する。頂部に宝珠状のつまみをもつ。8世紀後半に比定できる。552～554はSK1441出土である。552はV・VI期甕で、外面に煤が付着する。ハケは8本1単位と見られる。553はV・VI期甕の底部で、外面のハケは5本1単位である。丸底で、552とは別個体である。554は縄文土器深鉢B類で、外面に棒状工具による円形の刺突を施す。口縁端部上方に向かって平らな面をもつ。555～558はSK2041出土である。555はIII期壺A1類の小型品で、口縁部内面に赤彩を施す。口縁端部外面に面をつくり、棒状浮文状の粘土を貼り付ける。内面にも貼り付けた粘土が残る。556はIII期甕C類の口縁部で、直線的に開く。口縁端部に面をもち、叩き調整の痕跡が残る。内面はヨコハケ調整する。557は須恵器壺の底部で、高台である。外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ調整する。8世紀後半から9世紀前半に比定できる。558は灰釉陶器皿で、内面の灰釉の上層に自然釉が付着する。外面底部近くは施釉されていない。

## 6 摶乱坑・遺物包含層出土遺物（図241）

559～563は掲乱坑出土の須恵器有台坏である。559は箱形である。8世紀後半から9世紀前半に比定できる。560は箱形で、底部外面中央部のみに無回転ヘラ切りが見られる。8世紀後半から9世紀前半に比定できる。561は箱形である。高台はハの字状である。8世紀後半から9世紀前半に比定できる。562は碗形である。8世紀後半から9世紀前半に比定できる。563は底径が比較的大きい。底部外面中央に無回転ヘラ切りが見られる。8世紀後半から9世紀前半に比定できる。564、565は須恵器有台盤である。564は方形の透孔が3方向に見られる。8世紀後半から9世紀前半に比定できる。565は脚部が外反する。透孔が一部のこり、3方向と思われる。8世紀後半から9世紀前半に比定できる。566、567は灰釉陶器碗である。566は高台の先端が尖り気味である。567は内面に施釉される。568は灰釉陶器皿である。高台は逆三角形である。灰釉端部が波打つ。569は灰釉陶器長頸瓶の高台部である。底部は欠損する。高台部は外方に肥厚させる。

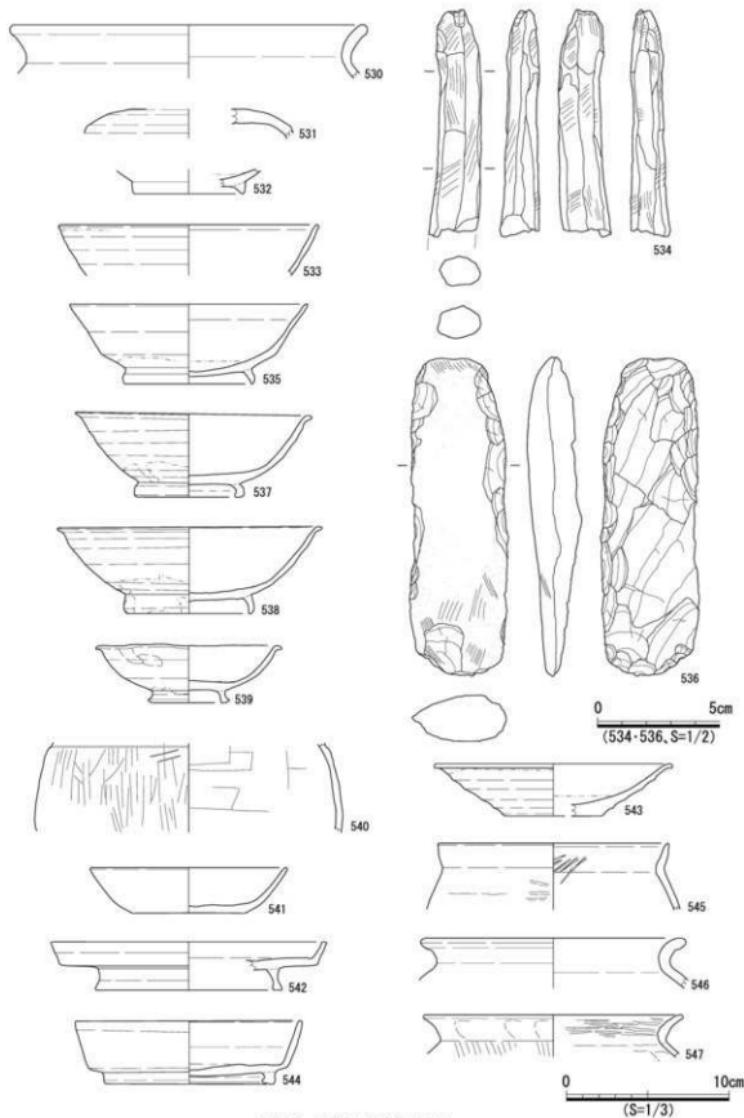


図240 VI期出土遺物（1）

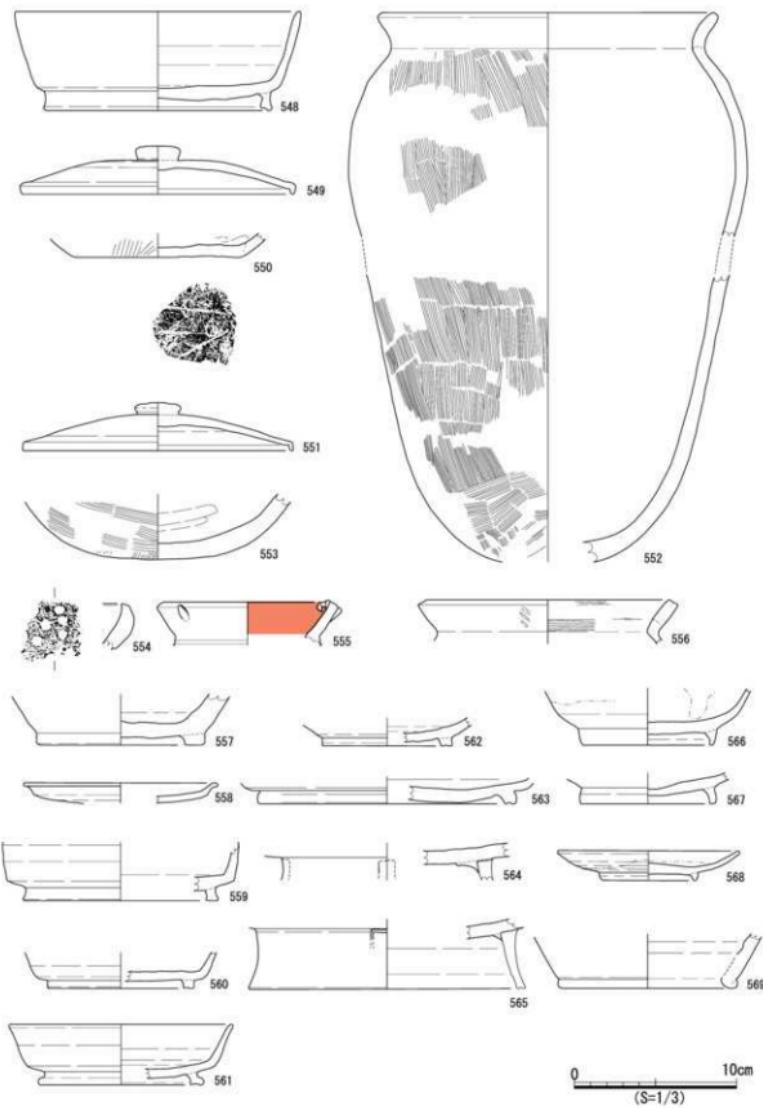


図241 VI期出土遺物 (2)

## 第9節 東野VII期（中世）

### 1 壺穴建物

当該期の壺穴建物を1軒確認した。

#### SI41（図242・243・255）(AS2774)

**検出状況** C地点 KK2～KL2グリッドで検出した。III層上面で検出した。SI38、SB10を切る。壺穴内部に貼床層を確認したことから、壺穴建物か掘立柱建物の一部である可能性を想定した。周囲に関連する柱穴が確認できなかったことから掘立柱建物ではないと判断した。各務原市広畠野口遺跡SB1は不整形形の壺穴状遺構とその4隅に近接する4基の柱穴からなる15世紀の壺穴建物である（岐阜県文化財保護センター2010）。美濃加茂市富田清友遺跡では、中世の壺穴状遺構を4基確認している（財団法人岐阜県文化財保護センター2002）。第3号壺穴状遺構は壺穴状遺構と周囲及び壺穴内部のピットによって支持される覆屋を想定している。第4～2号壺穴状遺構<sup>1)</sup>は、壺穴内部南側にテラス状の高まりが確認でき、壺穴外縁に近接するピットによって支持される覆屋を想定している。どちらも中世後期に比定している。当遺跡SI41は、不整形形プランの壺穴状遺構とその周囲に位置する軸がそろう柱穴によって構成されること、壺穴内部が2段構造になることが類似しており、壺穴建物と判断した。主柱穴から想定できる長軸の方位は、N-33°-Eである。

**埋土** 壺穴埋土は、黒色土がほぼ水平に堆積し、壁際埋土がやや傾斜して堆積する。埋土中に暗褐色土・黒色土ブロックを多く含むことから人為堆積の可能性が高いと考えられる。

**壁** III・IV層を掘り込んでいる。壺穴壁面は開く。壺穴壁の残存高は最大で0.14mである。

**床面** ほぼ平坦である。貼床（4層）が、壺穴全体にわたって明瞭に残る。貼床は黒褐色粘質土と暗褐色粘質土の混合土でしめる。壺穴床面で検出した遺構は性格不明土坑4基である。位置関係から壺穴周囲のP1～4を主柱穴と判断した。4基ともに柱穴で明瞭な柱痕跡と柱の当たりが確認できる。柱径は0.12～0.18mと想定できる。壺穴床面で検出した土坑はすべて浅い。土坑完掘後床面が残存していたことから、貼床形成後、これらの土坑を掘削している。P5は4基の柱穴の対角線の交点に位置する。

**床下** 貼床除去後、SB10柱穴と性格不明土坑1基を検出した。SB10柱穴を床下で確認したことから、SB10はSI41を遡る。性格不明土坑1基とSI41との関連は不明である。

**遺物出土状況** 壺穴埋土から、縄文土器4点、弥生土器2点、古墳前期土師器2点、時期不明土師器類5点、須恵器2点、灰釉陶器2点、山茶碗11点、陶器類2点、石器類1点、P3上層から陶器類1点、P2下層から山茶碗1点、P7下層から時期不明土師器類1点、P8上層から縄文土器1点、時期不明土師器類3点、山茶碗2点が出土した。壺穴床面出土遺物は12世紀後半から13世紀前半の山茶碗が主体である。

**出土遺物** 570は壺穴埋土上層出土のVII期土師器皿である。内外面はヨコナデ調整し、口縁端部は丸く收まる。571～574は山茶碗である。571は東濃産の碗で口縁端部に沈線状のくぼみが巡る。白土原窯式に比定できる。572は東濃産の碗で、底部外面に回転糸切り痕があり、高台はハの字型で粗穂痕が残る。丸石3号窯式か窯洞窯式に比定できる。573は東濃産の碗で、貼付高台の貼付痕が底部側にやや幅広で、粗穂痕が残る。浅間窯下窯式に比定できる。574はP2出土で、東濃産の皿である。内

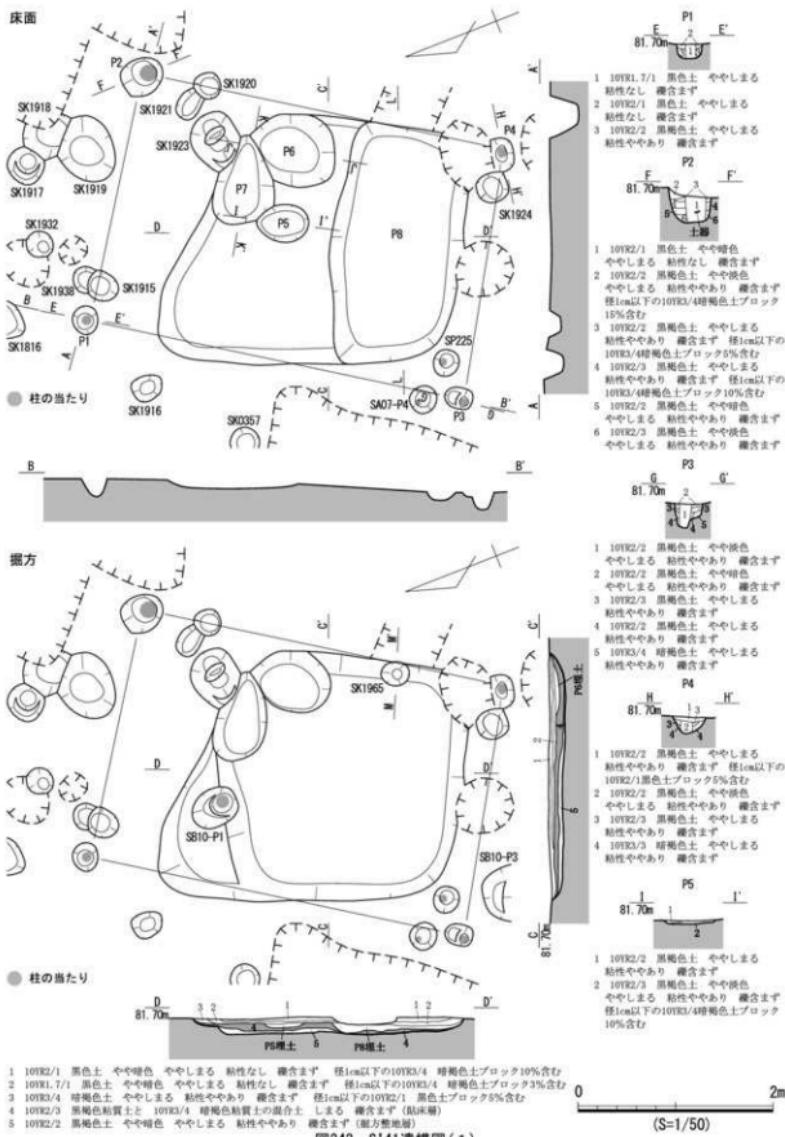


図242 S141造営図(1)

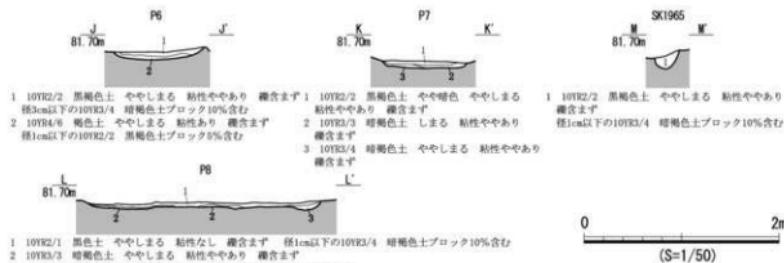


図243 SI41遺構図(2)

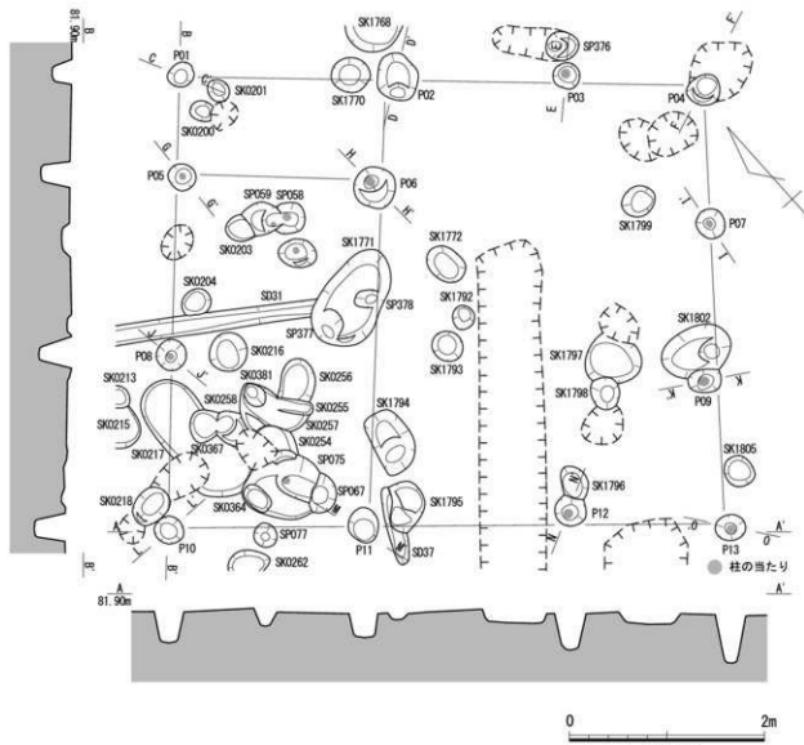


図244 SB04遺構図(1)

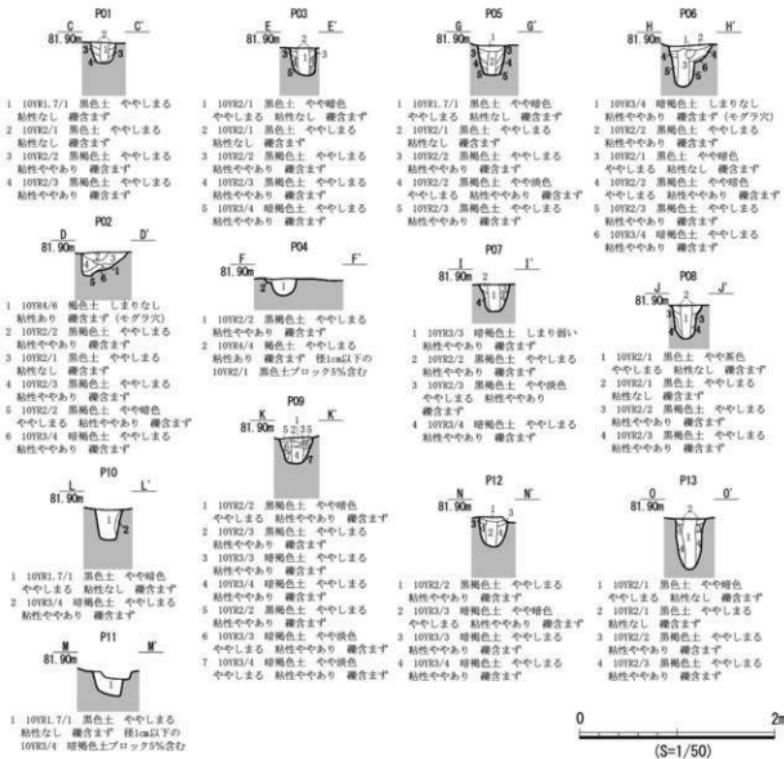


図245 SB04遺構図(2)

外面は回転ナデで、底部外面に糸切り痕が見られる。外面上方に煤が付着する。浅間窯下窯式か丸石3号窯式に比定できる。

**時期** 床面出土土器(571、572、573)から東野VII期と判断した。後述するSB04に近接し、軸の方位が類似することから、SB04と共に存していた可能性が考えられる。この場合、廐や倉庫等、主屋ではなく副次的な建物であった可能性が考えられる。

## 2 挖立柱建物

当該期の掘立柱建物を1棟確認した。

**SB04 (図244・245・255)**

**検出状況** C地点 KI 2 ~ KJ 3 グリッドで検出した掘立柱建物である。SZ 2 方台部から SZ 2 周溝をまたいで構築される。SZ 2 周溝埋土を切ることから SB04 > SZ 2 となる。桁行3間(5.76m) × 梁行3間(4.66

m）、床面積 26.8 m<sup>2</sup>を測る。桁行の方向はN-47° -Wである。

**柱穴** 13基の柱穴を検出した。柱穴の規模は、直径 0.27～0.37m、深さ 0.19～0.35mを測る。うち 9基で柱痕跡が、8基で柱の当たりが確認できる。柱径は 0.07～0.12mと想定できる。柱間は、桁行が P01-P02 で 2.00m、P02-P03 で 2.10m、P03-P04 で 1.66m、梁行が P01-P05 で 1.02m、P05-P08 で 1.82m、P08-P10 で 1.82mとなる。P06とP07の間に柱穴が確認できないことから、P06は建物内部を区画するための柱の可能性が高いと考えられる。

**遺物出土状況** P05 下層から弥生土器 1点、P10 上層から弥生土器 5点・時期不明土師器類 4点、下層から時期不明土師器類 1点・桃核 1点が出土した。

**出土遺物** 575はP05出土のⅢ期壺の体部片である。肩部分と思われる。器面をややハケ状工具によって調整した後に、上から波状文、直線文 10条、波状文を施す。上段の波状文の上から竹管による刺突を施す。内面は剥離により調整不明である。

**時期** SZ 2との重複関係から、SZ 2の周溝埋没と方台部の消失の後に構築されている。SI41と近接し、軸の方位が類似することから SI41と共に存していた可能性が考えられる。これらのことから東野VII期の可能性が高いと判断した。

### 3 檻

当該期に関連すると判断した檻は 1列である。

#### SA19（図 246）

**検出状況** C地点 K03・4～KP3 グリッド、Ⅲ層上面で検出した。柱穴が L字上に位置することから檻と判断した。東部、南部は発掘区外のため、延びる可能性がある。その場合、掘立柱建物になる可能性もある。長軸 6.74m、短軸 3.06 を測り、柱間は P1-P2 で 2.72m、P2-P3 で 2.08m、P3-P4 で 1.94m、P1-P5 で 3.06m である。長辺の方位は N-79° -W である。

**柱穴** 5基の柱穴を検出した。柱穴の規模は、直径 0.21～0.26m、深さ 0.20～0.44mを測る。すべての柱穴で明瞭な柱痕跡と柱の当たりが確認できる。柱径は 0.08～0.10mと想定できる。

**遺物出土状況** P3 上層から古墳前期土師器 1点、山茶碗 1点が出土した。

**出土遺物** 実測に足る遺物は出土していない。

**時期** 出土遺物から、東野VII期以降と判断した。

### 4 溝状遺構（図 247～250）

当該期に関連すると判断した溝状遺構は 14 条である。通水の痕跡はない。すべてVII期に属する遺構との重複関係や出土遺物によって、VII期に関連する溝状遺構と判断した。以下、特徴的な溝状遺構について記述する。

#### SD11（図 247・255）(AS0128・BS0520・AS2423)

**検出状況** JH19 グリッドを屈曲部にして東南東、南南東にのびる L字状の溝状遺構である。Ⅲ層上面で検出した。東と南は発掘区外へのびる。SZ 2、SI32、SI33、SI34、SD39 を切り、SD14、SD32、SD43 に切られる。全長約 74m、最大幅 1.53m、深さ 0.27mを測る。屈曲部は 95° である。南北方向の軸は N-17° -E である。KH 3 グリッド以東では SD11 と近現代の溝が重なり、この部分は明治以降の字

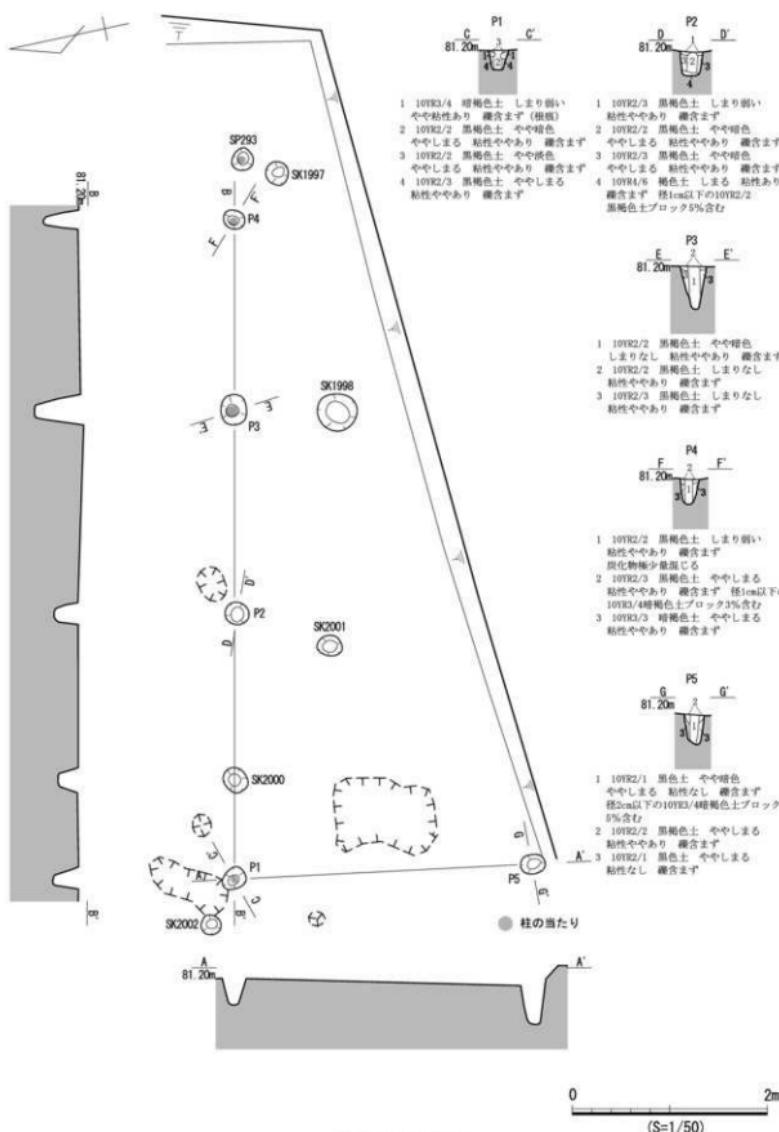


図246 SA19造構図

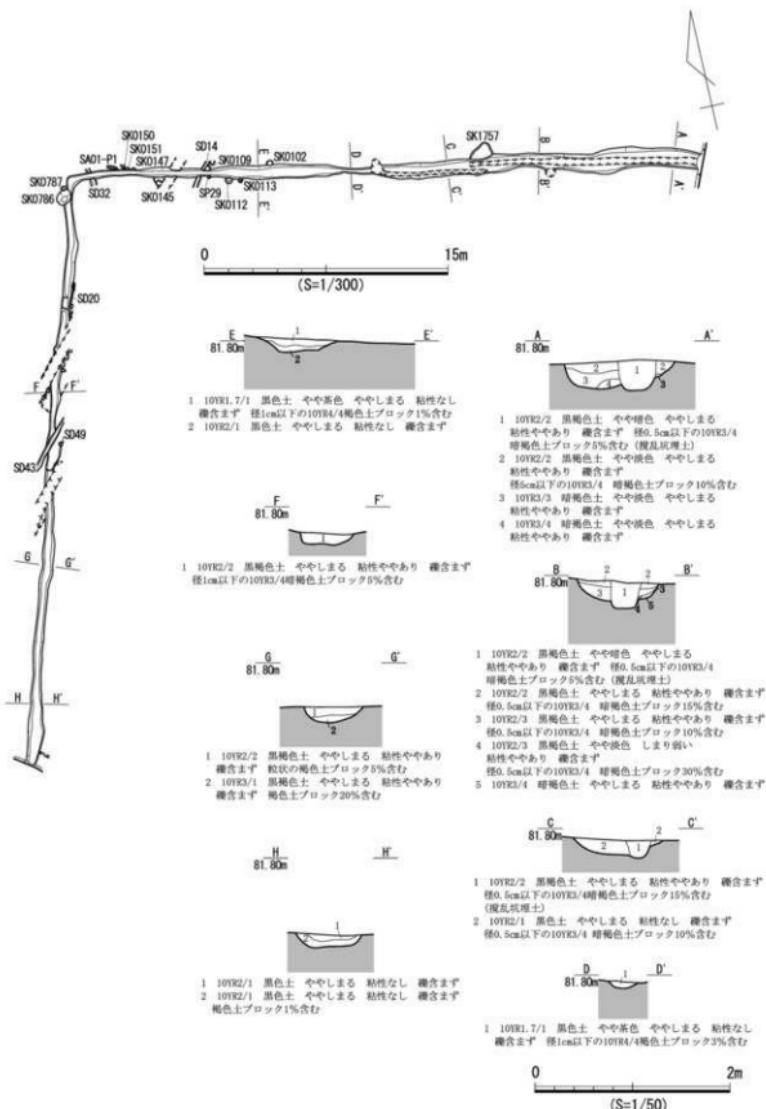


図247 SD11遺構図

境と一致する。区画溝と考えられる。

**埋土** 埋土は1～4層である。複数層を確認した断面はほぼ水平に堆積する。埋土中に暗褐色土ブロック、褐色土ブロックを含む。壁は緩やかに開く。底面は幅の広い範囲では平らで、幅が狭い範囲では丸みを帯びる。通水を示す堆積は認められない。

**遺物出土状況** 埋土から繩文土器18点、弥生土器6点、古墳前期土師器30点、古墳後期以降土師器類1点、時期不明土師器類40点、須恵器10点、灰釉陶器4点、山茶碗4点、石器類3点が出土した。

**出土遺物** 576、577は繩文土器深鉢B類である。576は口縁端部外面に隆帯を貼り付ける。内部に溝巻文をつくり、溝巻きにそって短沈線を充填する。577は口縁部外面に沈線が2条巡り、沈線間に棒状工具による刺突を施す。波状口縁である。578はIV期壺D1類である。口縁部が大きく直線的に開く。頸部外面に沈線が1条巡り、口縁部と胸部の境となる。胸部は下垂し、すぐに丸みを帯びることから浅い形状になると思われる。579はIII期壺C類である。口縁部外面に叩き痕が僅かに残る。内外面は摩耗のため調整不明である。580はIV期壺C2類である。S字の屈曲が弱い。頸部に沈線が巡るが浅く、両上端が不明瞭である。体部外面はハケ、内面はヨコナデ調整する。

**時期** 重複関係と出土遺物から東野VII期以降と判断した。

SD21・SD23・SD32・SD45（図248）（AS0502・AS0618・BS0055・BS0519）

**検出状況** JD19・JH19グリッドを屈曲部にして西北西、南南西にのび、JL18グリッドを屈曲部にして西北西、北北東にのびるコの字状の構状遺構である。III層上面で検出した。JD19以西は発掘区外へのびる。SI18、SZ3、SD11、SB05、SD39を切る。SD22、SD43、SD44、SK0783に切られる。ところどころ断続するが、軸をそろえて連続する状況を示すことから一体の可能性が高いと判断した。残存全長約26m、最大幅0.52m、深さ0.07mを測る。SD32屈曲部は丸みを帯び、SD45屈曲部はほぼ直角である。南北方向の方位はN-23°-Eである。区画溝と考えられる。

**埋土** 埋土は1～2層である。複数層を確認した断面はほぼ水平に堆積する。埋土中に暗褐色土ブロック、褐色土ブロック、黄褐色土ブロックを含む。壁は緩やかに開く。底面は幅の広い範囲では平らで、幅が狭い範囲では丸みを帯びる。通水を示す堆積は認められない。

**遺物出土状況** 埋土から繩文土器18点、弥生土器1点、時期不明土師器類2点、須恵器10点、灰釉陶器4点、山茶碗4点、石器類3点が出土した。

**出土遺物** 実測に足る遺物は出土していない。

**時期** 重複関係と出土遺物から東野VII期と判断した。

## 5 柱穴（図251・255）

当該期に関連すると判断した柱穴は17基である。すべてVII期に属する遺構との重複関係や出土遺物によって、VII期に関連する柱穴と判断した。

**柱穴出土遺物** VII期に関連すると判断した柱穴から出土した特徴的な遺物について記述する。581、582はSP295出土である。581は東濃産の山茶碗の皿で、口縁端部外面にくぼみが巡る。外面に墨が付着する。浅間窯下窯式か丸石3号窯式に比定できる。582はVII期鍋・釜類の脚部である。端部は折損する。上部内側に屈曲部が見られる。断面はほぼ円形だが、内側にやや平らな面が見られる。形状から三足と思われる。

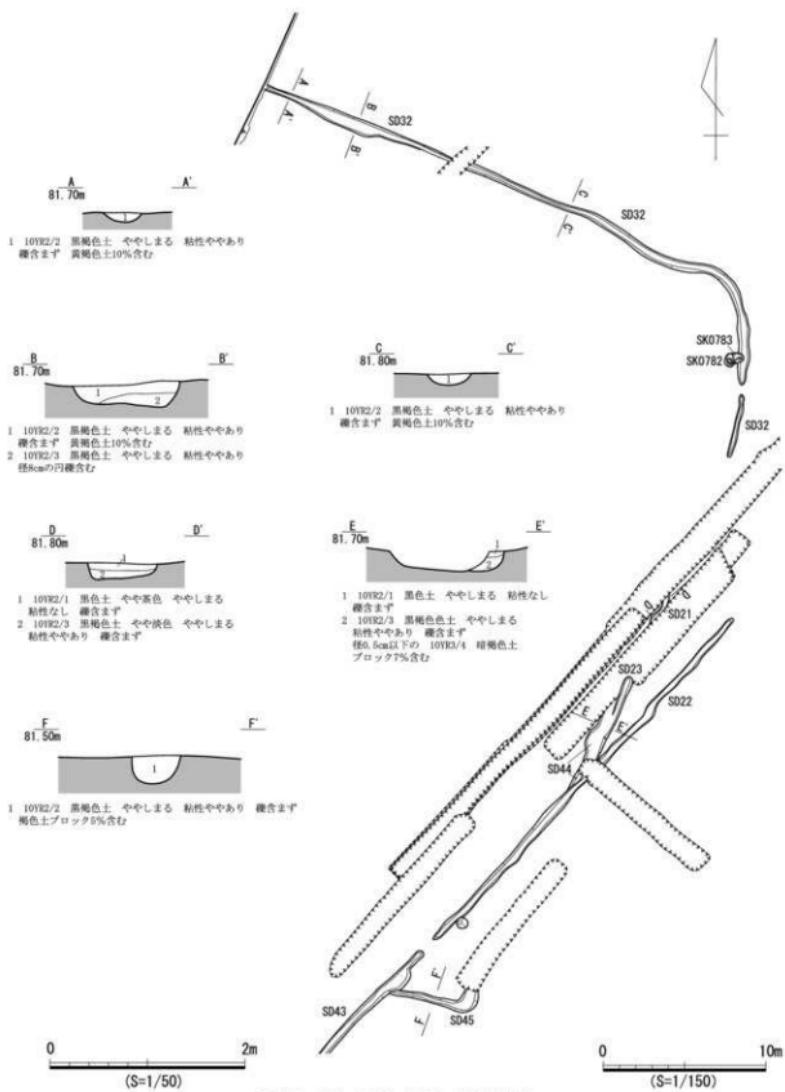


図248 SD21・SD23・SD32・SD45遺構図

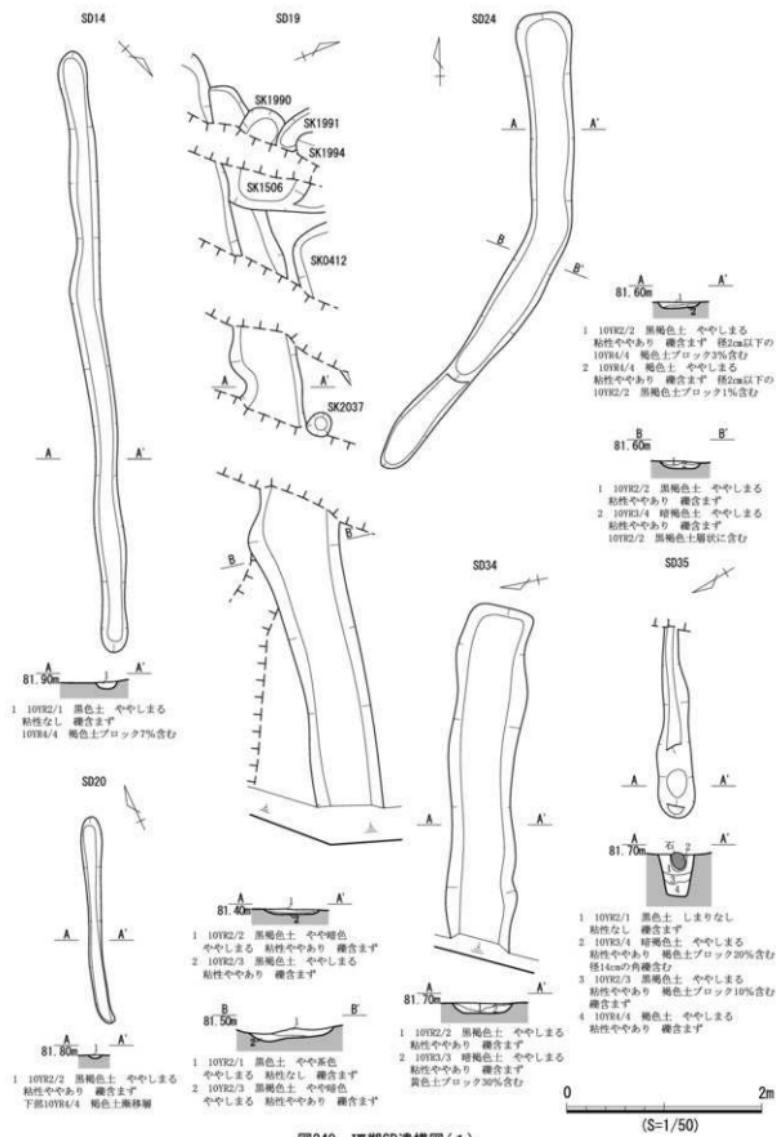


図249 VII期SD遺構図(1)

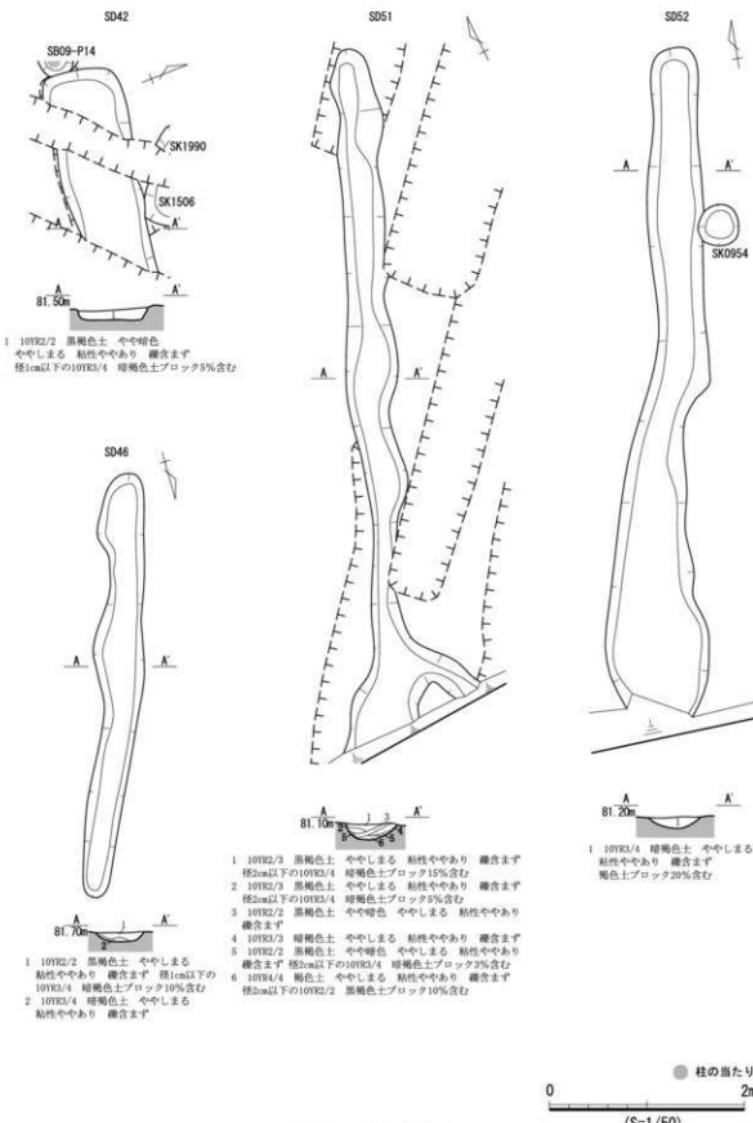


図250 VII期SD遺構図(2)

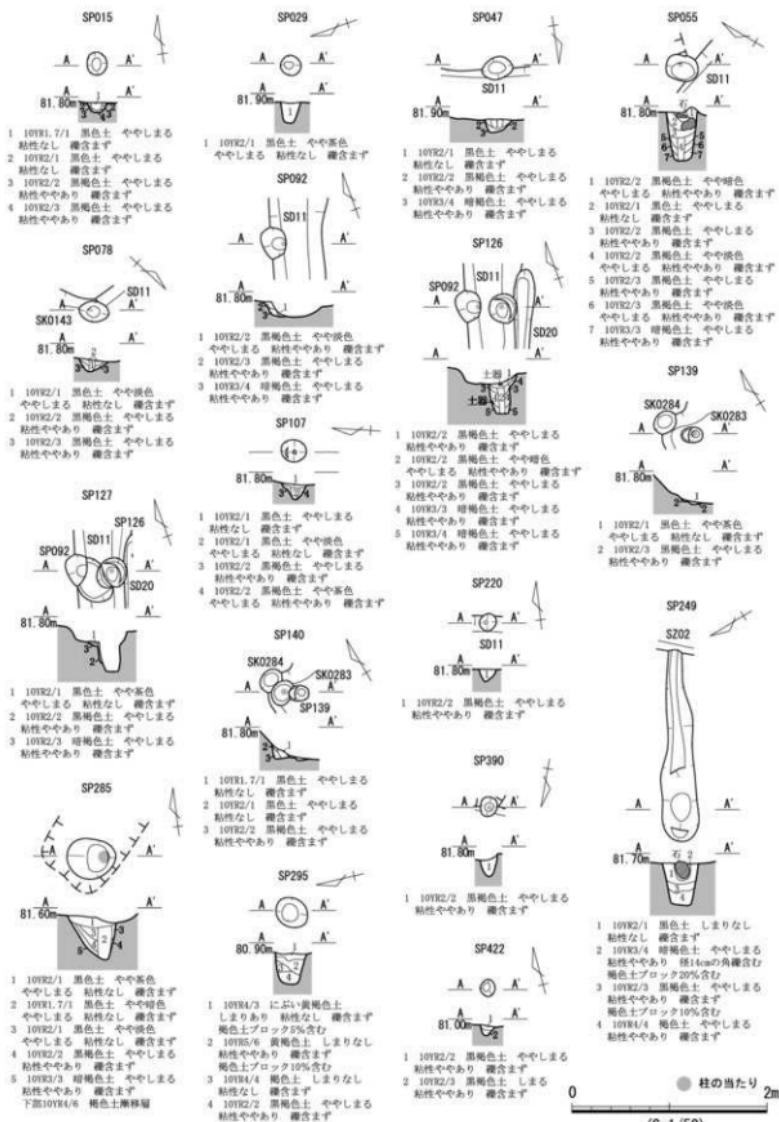


図251 VII期SP造構図

柱の当たり 2m  
(S=1/50)

## 6 土坑（図252～254）

当該期に関連すると判断した土坑は58基である。すべてVII期に属する遺構との重複関係や出土遺物によって、VII期に関連する土坑と判断した。以下、特徴的な土坑について記述する。

### SK0326（図253）（AS0574）

**検出状況** JJ20グリッド、III層上面で検出した。平面形は方形である。長軸の方位はN-13°-Eである。同様の平面形をもつ遺構にSK0373・SK0444がある。長軸の方位が、15°前後東に傾くことも共通する。

**埋土** 埋土は単層で、黒色土に暗褐色土ブロックを含む。壁は開き、底面は平らである。

**遺物出土状況** 埋土1層から古墳前期土師器2点、時期不明土師器類11点、須恵器3点、灰釉陶器1点、石器類1点が散在した状態で出土した。灰釉陶器は底部付近から出土した。

**出土遺物** 実測に足る遺物は出土していない。

**時期** 長軸の方位がVII期のSD11とほぼ一致することと出土遺物から東野VII期以降の可能性が最も高いと判断した。

### SK0373（図253）（AS0690）

**検出状況** JK20グリッド、III層上面で検出した。平面形は方形である。長軸の方位はN-17°-Eである。同様の平面形をもつ遺構にSK0326・SK0444がある。長軸の方位が、15°前後東に傾くことも共通する。

**埋土** 埋土は単層で、黒色土に暗褐色土ブロックを含む。壁は開き、底面は平らである。

**遺物出土状況** 埋土1層最上層から山茶碗1点が出土した。

**出土遺物** 実測に足る遺物は出土していない。

**時期** 長軸の方位がVII期のSD11とほぼ一致することと出土遺物から東野VII期以降の可能性が最も高いと判断した。

### SK0444（図253）（AS0914）

**検出状況** JM19グリッド、III層上面で検出した。平面形は方形である。長軸の方位はN-13°-Eである。同様の平面形をもつ遺構にSK0326・SK0373がある。長軸の方位が、15°前後東に傾くことも共通する。

**埋土** 埋土は単層で、黒色土に暗褐色土ブロックを含む。壁は開き、底面は平らである。

**遺物出土状況** 埋土上層から古墳前期土師器1点、時期不明土師器類5点、須恵器3点、山茶碗1点が出土し、下層から山茶碗2点が出土した。

**出土遺物** 実測に足る遺物は出土していない。

**時期** 長軸の方位がVII期のSD11とほぼ一致することと出土遺物から東野VII期の可能性が最も高いと判断した。

**その他の土坑出土遺物（図255）** VII期に関連すると判断した土坑から出土した特徴的な遺物について記述する。583はSK0383出土のVII期土師器皿の口縁部である。口縁端部は丸く收める。内面はナデ、外面はナデと指押さえである。

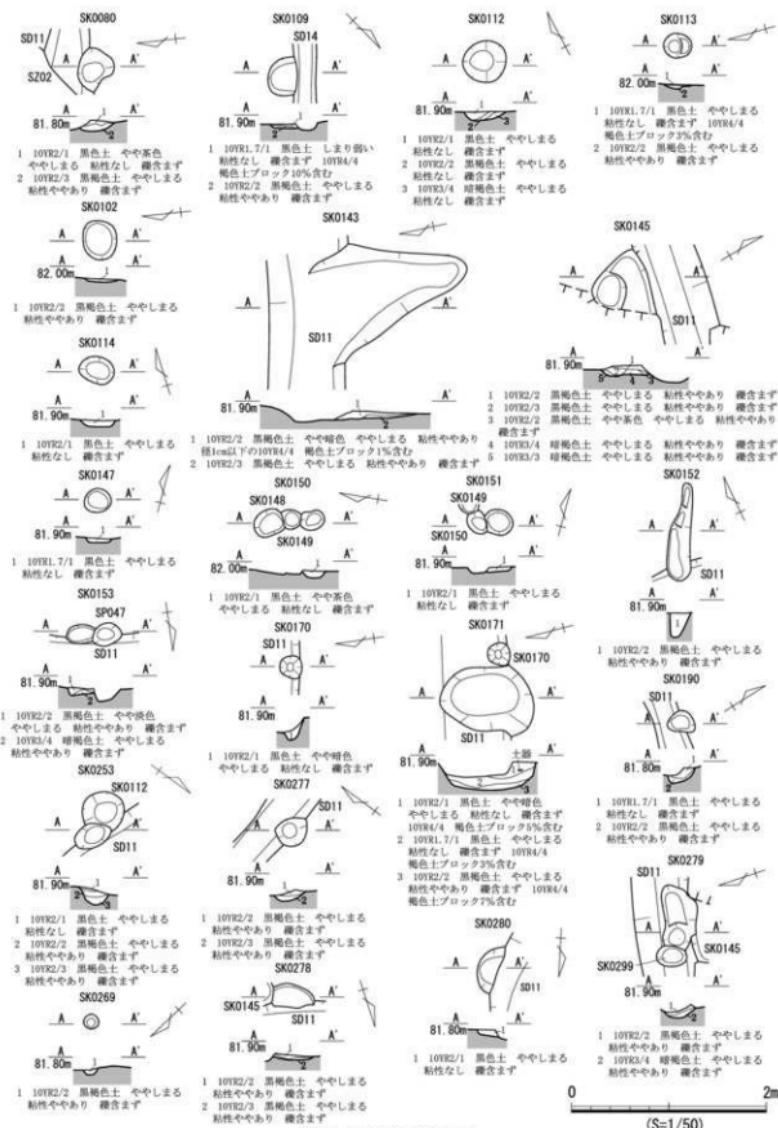


図252 VII期SK遺構図(1)

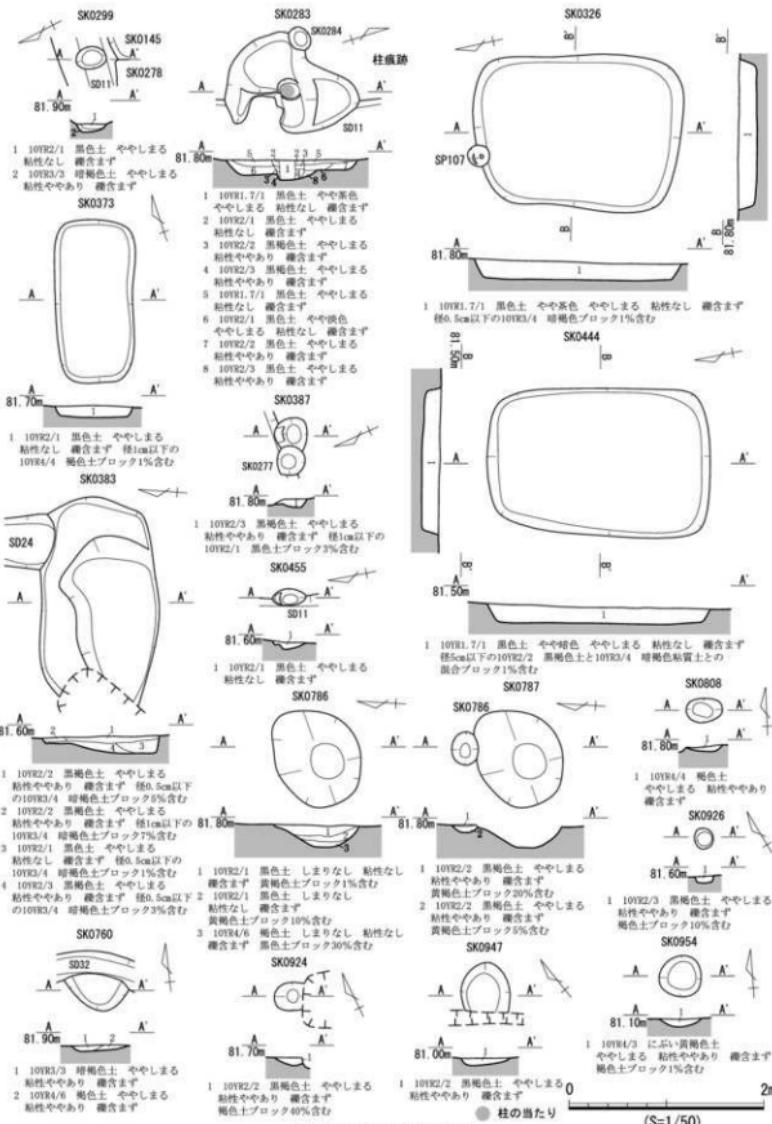


図253 VII期SK遺構図(2)

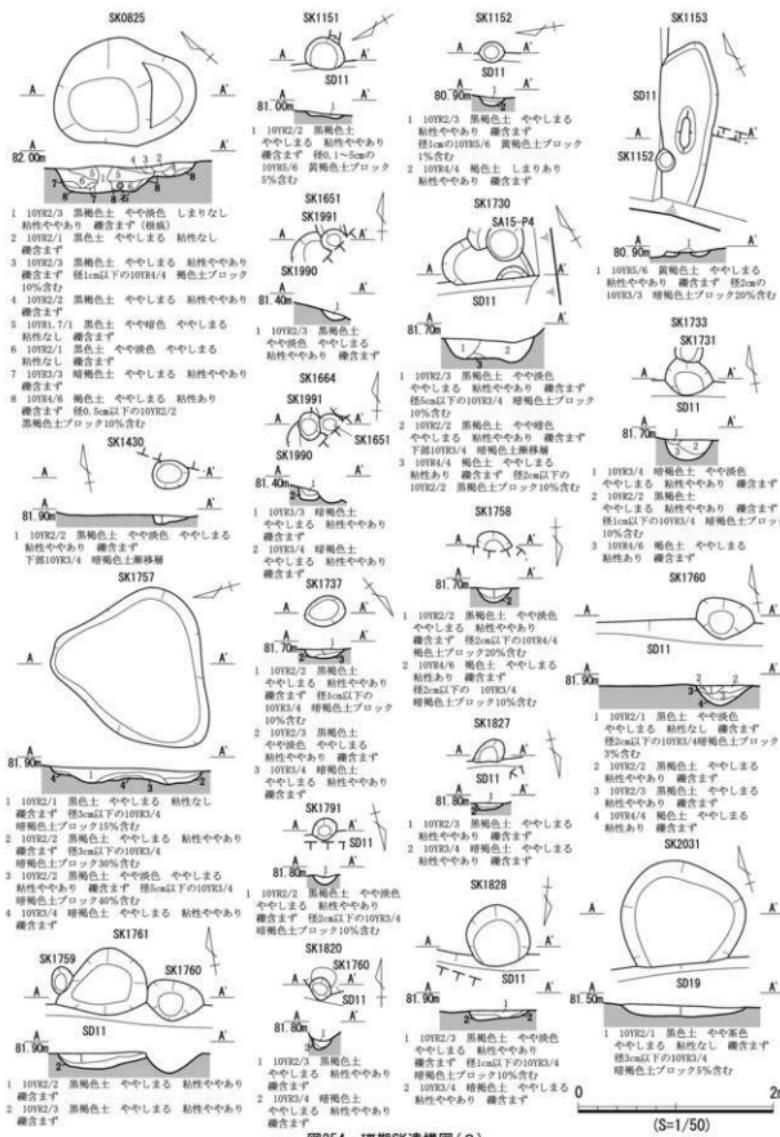


図254 VII期SK遺構図(3)

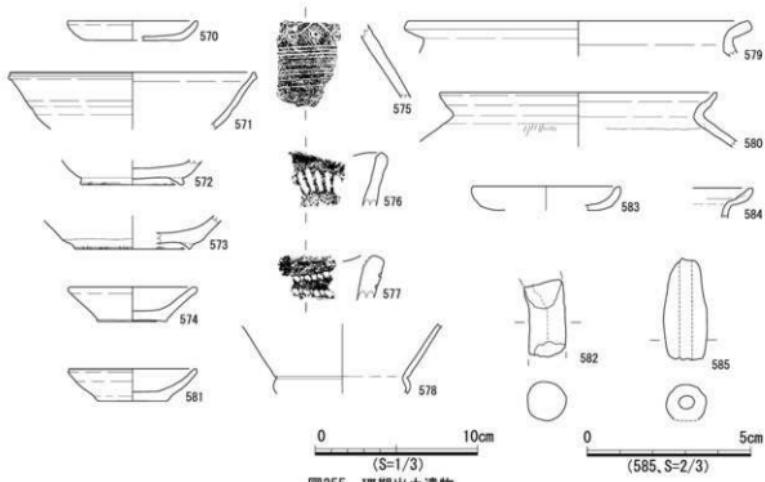


図255 VII期出土遺物

## 7 遺物包含層出土遺物（図255）

584はKJ2グリッド出土のVII期伊勢型鍋の口縁部である。受口状に緩やかに屈曲し、端部で折り返す。内外面はヨコナデ調整する。外面に煤が付着する。585はJK17グリッド出土の土錐である。長軸方向の片側の端部を折損する。形状は長楕円形で、穴は直線的である。内外面はナデ調整する。

注

1) 富田清友遺跡発掘調査報告書では、異なる第4号竪穴状遺構が2基報告されているため、便宜的に、報告書掲載順に4-1号、4-2号とした。

## 第10節 東野VII期（近世）

## 1 墓坑

当該期の墓を2基確認した。

## ST1（図256・259）

**検出状況** C地点 JD18グリッド、V期の竪穴建物であるSI03床面で検出した。平面形は方形である。SI03床面到達時点で検出したため、SI03の付属遺構と判断して掘削したが、埋土掘削時に人骨と鉄釘が出土した。年代を示す遺物の出土がなかったため人骨の年代測定を実施した（第4章第2節参照）。その結果、近世墓と判明した。

**埋土** 埋土は褐色土ブロックが多く含む黒褐色土の単層で、一気に埋没した状況を示す。中央部や南寄りにVI層起源の自然疊が出土した。これは墓坑底面がVI層を掘り込んでいることから、掘削土中の疊が埋戻し時に入ったと考えられる。

**遺物出土状況** 最下部の大腿骨は斜め方向に立ち、骨盤は底部に接する。最上部で頭蓋骨が出土し、後頭部を天に向ける。その間に多様な部位がまとった状態で出土した。また底部からは鉄釘2点（586、587）が出土した。鉄釘には木質が残存していることから、棺に使用されたものであると考えられる。出土遺物や出土状況から、膝を曲げてしゃがんだ状態で木棺に納め、埋葬したと考えられる。

**出土遺物** 出土した人骨はおおむね全部位が確認できる。頭蓋骨は頭頂骨、側頭骨、上顎骨、下顎骨が残存する。上・下顎骨に歯が複数残存する。下顎骨は第1・2大臼歯は確認できるが第3大臼歯が生えておらず、このことから被葬者は10代前半であると思われる。また、側頭骨の乳状突起はあまり発達していない。乳状突起が発達していない場合は女性であるといわれるが、生育の途上である10代前半であるため、性別は特定できない。脊柱は確認できない。これは、脊柱が海綿骨であるために、土中で腐食・分解が進みやすいためと思われる。同じくそれぞれの部位に存在する海綿骨はほとんどが消失し、残存する人骨はほぼ緻密骨のみである。鎖骨は左右が残存する。肋骨は第1・2肋骨と思われる半環状のものは確認できるが、下部のものは確認できない。寛骨は腸骨の一部が残存するが、性別を判断できるような部分は確認できない。その他、大腿骨、橈骨、腓骨、指骨等の部位が確認できる。骨全体に有機質は残存していない。被熱による石灰化が進んでいないことから土葬と考えられる<sup>1)</sup>。586は鉄製角釘である。頂部に面が認められる。円筒状に木質が残る。残存する木質は、ともに杼目が明瞭である。587は鉄製角釘である。S字状に曲がり、頂部は折損する。中央部に木質が残存する。

**時期** 人骨の分析結果から東野VII期と判断した。

#### ST2（図256）

**検出状況** C地点 JD18 グリッド、SI03 床面で検出した。平面形は方形と想定できる。SI03 埋土掘削中、床面到達時点で検出したため、SI03 の付属遺構として掘削したが、発掘区西壁面の観察から SI03 の埋没後に掘り込まれている遺構と判明した。2分の1以上が発掘区外である。ST1と主軸を描えること、埋土中に褐色土ブロックを多く含み人為的な堆積を示すこと、底面最深部の標高が ST1 とほぼ一致することなどから、ほぼ同時期に同目的で掘削されたと考え、近世墓の可能性が最も高いと判断した。

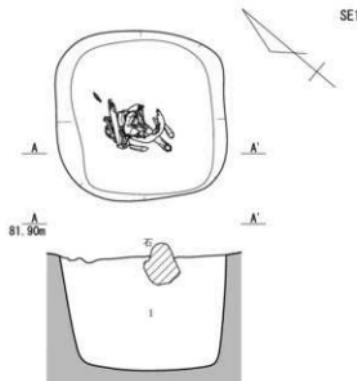
**埋土** 埋土は褐色土ブロックを多く含む黒褐色土で、くぼみの偏りが不均一であるがほぼ中央付近がくぼむ堆積状況を示す。棺の痕跡は確認できなかったが、棺の腐食に伴い上層の埋土が落ち込んだことによって中央がくぼむ堆積を示すと思われる。人骨は確認できず、残存していると仮定すると発掘区外に存在する可能性が考えられる。

**遺物出土状況** 埋土からV・VI期土師器1点が出土した。

**出土遺物** 図化に足る遺物は出土しなかった。V・VI期土師器は甕の体部片でハケ調整が見られる。SI03出土土師器と同時期であることから、墓坑を埋める際に埋土とともに混入した可能性が考えられる。

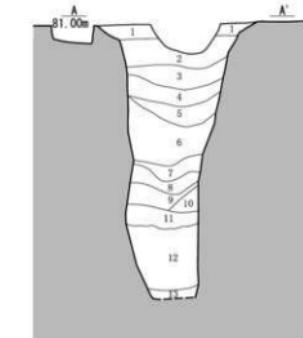
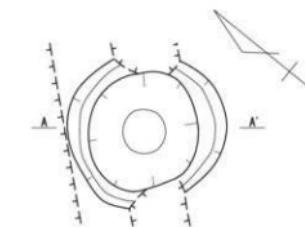
**時期** ST1との類似から東野VII期の可能性が最も高いと判断した。

ST1



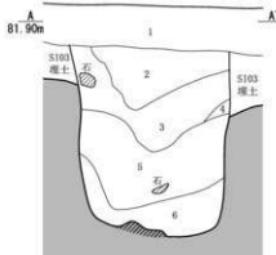
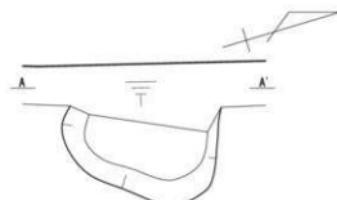
1. 10YR2/2 黒褐色土 やや淡色 しまり弱い 黏性ややあり  
径1cm以下の中円礫含む 径3cm以下の10YR4/4褐色土ブロック15%含む

SE1



1. 10YR3/4 基褐色土 ややしまる 黏性ややあり 緩含まず  
2. 10YR2/1 黒色土 しまりなし 黏性なし 径2cm以下の角礫1%含む  
3. 2.SYR2/1 黒色土 ややしまる 黏性なし  
径4cm以下の角礫下層を中央に30%含む  
4. 2.SYR2/1 黒色土 ややしまる 黏性ややあり 黏性なし 径1cm以下の角礫5%含む  
5. 2.SYR2/1 黑褐色土 ややしまる 黏性ややあり 黏性なし 径1cm以下の角礫5%含む  
6. 2.SYR2/1 黒色土 ややしまる 黏性なし 径1cm以下の角礫5%含む  
7. 2.SV2/1 黑褐色土 しまりなし 黏性ややあり 径2cm以下の円礫含む  
径12cm以下の10YR4/4褐色土ブロック30%含む  
8. 7.SVR2/1 黑褐色土 ややしまる 黏性ややあり 緩含まず  
9. 2.SYR2/1 黑褐色土 ややしまる 黏性ややあり 径5cmの角礫含む  
径2cm以下の10YR4/4褐色土ブロック10%含む  
10. 7.SVR2/1 黑褐色土 ややしまる 黏性ややあり 緩含まず  
径6cm以下の10YR4/4褐色土ブロック1%含む  
11. 7.SVR2/1 黑褐色土 ややしまる 黏性ややあり 緩含まず  
12. 10YR2/1 黑褐色土 ややしまる 黏性ややあり 径2cm以下の円礫含む  
13. 10YR1.7/1 黑褐色土 ややしまる 黏性ややあり 緩含まず

ST2



1. 10YR2/2 黑褐色土 やや茶色 ややしまる 黏性ややあり  
緩含まず (1層)  
2. 10YR2/2 黑褐色土 やや暗色 ややしまる 黏性ややあり  
緩含まず 径3cm以下の10YR4/4褐色土ブロック5%含む  
3. 10YR2/2 黑褐色土 やや淡色 ややしまる 黏性ややあり  
緩含まず 径3cm以下の10YR4/4褐色土ブロック5%含む  
4. 10YR2/2 黑褐色土 ややしまる 黏性ややあり 緩含まず  
5. 10YR2/2 黑褐色土 しまり弱い 黏性ややあり 径3cm以下の円円礫含む  
径2cm以下の10YR4/4褐色土ブロック15%含む  
6. 10YR2/1 黑褐色土 しまり弱い 黏性なし 緩含まず  
径1cm以下の10YR4/4褐色土ブロック1%含む

0 1m  
(S=1/20)

0 2m  
(S=1/50)

図256 ST1・ST2・SE1造構図

## 2 井戸

当該期の井戸を1基確認した。

### SE1 (図 256・259) (BS0321)

**検出状況** C地点 J116 グリッド、Ⅲ層上面で検出した。平面形は円形である。南西方向にくだる緩傾斜面上に位置する。中央を搅乱坑に切られる。周囲に覆屋となるような柱穴は確認できなかった。壁は、深さ約 0.15m のVI層上面まで朝顔状に開き、VI層以下は岩盤を削り抜き、径 0.8m、深さ 3m 以上垂直に掘り込む。

**埋土** ほぼ水平に堆積する。埋土は黒色土が主体で、各層内にVI層の木曽川泥流堆積物の小礫を含む。深さ約 1.4m から下層は、黒色土に黄褐色土ブロックや褐色土ブロックを含む。深さ 2.89m まで掘削したが、底面に到達せず、安全管理上掘削を中止した。そのため、底部は検出できていない。

**遺物出土状況** 古墳前期土師器2点、時期不明土師器類3点、須恵器5点、灰釉陶器5点、山茶碗1点、近世陶磁器8点、石器1点が出土した。尾呂徳利片(593)は深さ 0.2m で、丸碗(592)は深さ 0.7m で出土した。

**出土遺物** 588 は須恵器壺である。口縁端部が直立し、端部で僅かに外反する。頸部でややふくらむ。589、590 は灰釉陶器碗である。589 は高台の断面が三角形で、590 は高台がへの字状である。591 は東濃産の山茶碗の碗である。高台径が小さく、楞穀痕が残る。大洞東窯式に比定できる。592 は美濃産の登窯第5～7小期の丸碗である。全面施釉で、猪口のやや大きい形状で口縁に向かって立つ。593 は美濃産の登窯第5・6小期の尾呂徳利である。外面肩部に沈線が7条巡る。内外面に施釉され、外面の施釉は二度がけで飴釉である。

**時期** 出土遺物から、廃棄時期は東野VII期以降と考えられる。字絵図によると、C地点北西に隣接する墓地は明治時代まで北面の林を背景に営まれていた。墓地の南側に当時から現存する細長い地割り（現在の 1387-6 番地）はその形状から當時墓道であった可能性が考えられる。SE1 は現在の墓地南東角から約 22m 南東に位置しているが、今回の調査で確認した近世墓付近まで墓地の東・南辺を広げる約 7m 南東に位置することになる。この位置関係から、墓地で利用する水を獲得する目的で SE1 が構築された可能性が考えられる。また、近世に SE1 が利用されていたが、明治になって道路が墓地北側に開通したことによって墓地への出入口が北に移り、取水も出入口側に移った可能性も考えられる。この場合、SE1 の廃棄時期は近代以降にくだる可能性が考えられる。

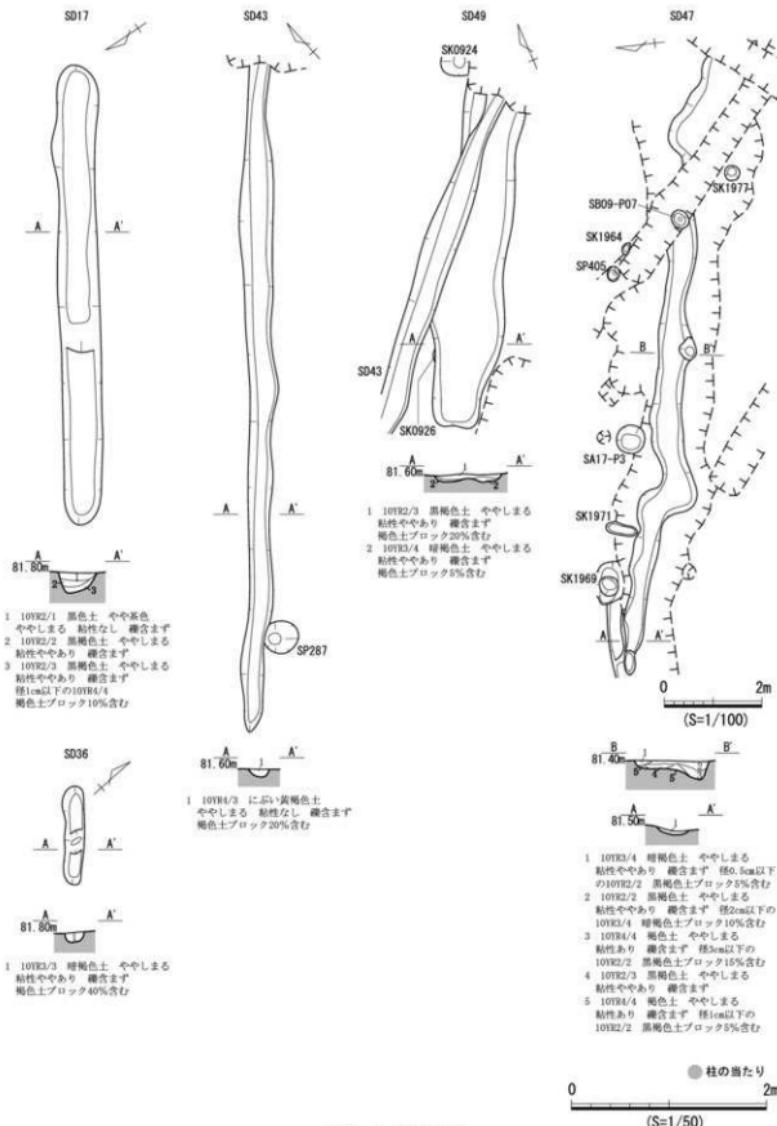
## 3 溝状遺構（図 257）

当該期に関連すると判断した溝状遺構は5条である。通水の痕跡はない。5条ともにVII期に属する遺構との重複関係や出土遺物によって、VII期に関連する溝状遺構と判断した。

## 4 柱穴（図 258）

当該期に関連すると判断した柱穴は4基である。すべてVII期に属する遺構との重複関係や出土遺物によって、VII期に関連する柱穴と判断した。

**柱穴出土遺物（図 259）** VII期に関連すると判断した柱穴から出土した特徴的な遺物について記述する。594 は常滑窯の口縁部である。口縁内側部の立ち上がり部で、径は約 40 cm と思われる。



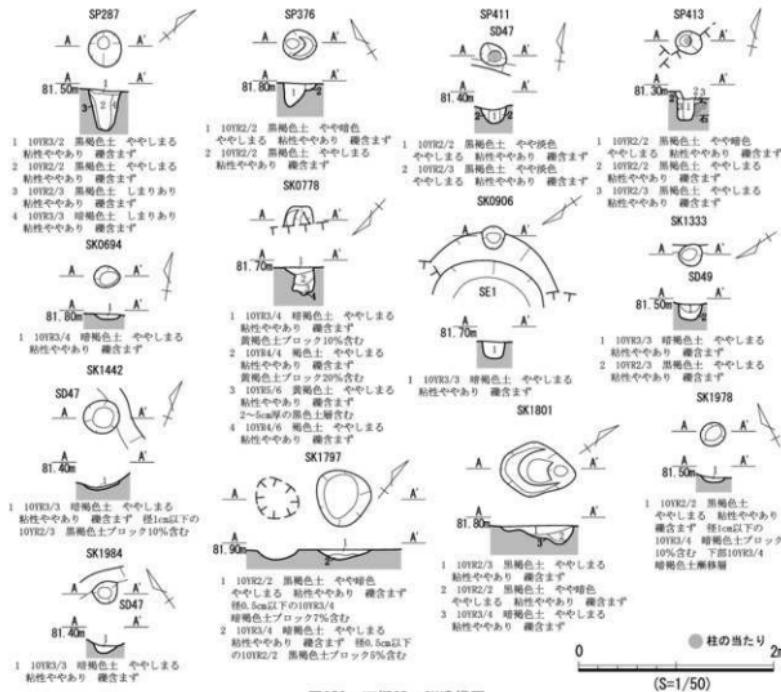


図258 VII期SP・SK遺構図

## 5 土坑（図258）

当該期に関連すると判断した土坑は9基である。すべてVII期に属する遺構との重複関係や出土遺物によって、VII期に関連する土坑と判断した。

## 6 搅乱坑・遺物包含層出土遺物（図259）

595～599は搅乱坑出土の近世陶器である。595は瀬戸産の登窯第8・9小期の練鉢で、貼付高台が低い。白色系の釉薬を施す。596は美濃産の登窯第8小期以降の片口鉢で、削り出し高台である。底部は高台付近まで施釉され、内面は全面施釉される。口縁端部に段をもち、外方へ引き出す。597は美濃産の登窯第10小期の広東茶碗で、削り出し高台である。内面中央部に、中心に1個と周囲に6個の円形の染め付けを配置する。その外方に正円の線を1条描く。外面は高台との境に染め付け線が2条巡る。上方にグラデーション線が2条巡る。染め付けはすべて紺色である。598は美濃産の登窯第7小期の刷絵皿で、内面中央部に梅花とウグイスの染め付けを配する。内外面を施釉する。599は美濃産の登窯第7・8小期の小碗で、削り出し高台である。底部高台付近まで施釉され、内面はほぼ全

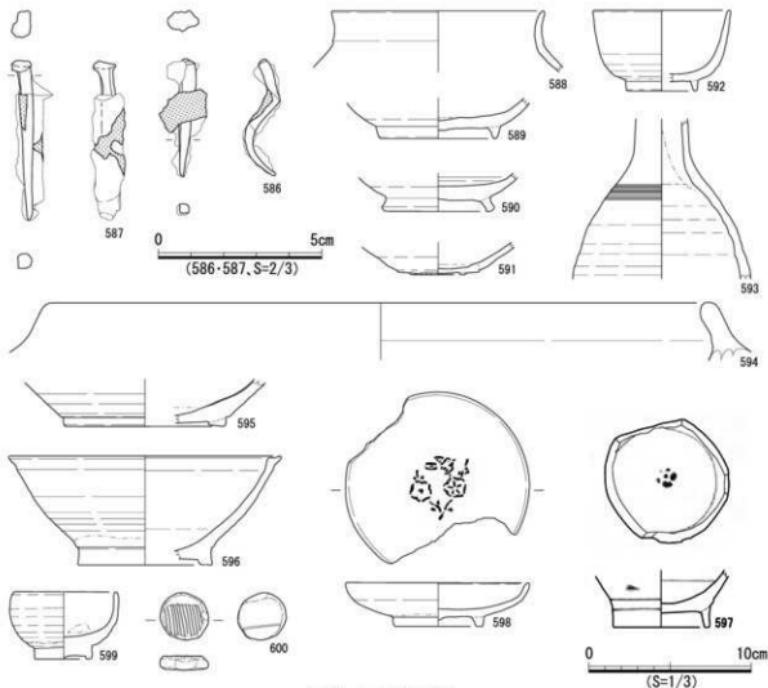


図259 VII期出土遺物

面施釉される。口縁部は直立する。600はKD7グリッド出土の加工円盤である。擂鉢を加工する。断面は長楕円形で、表は擂溝、裏に擂鉢外面の沈線が残る。側面に、研磨時にできたと思われる面が複数見られる。

注

- 1) 千田隆夫氏のご教示による。

## 第11節 時期不明

### 1 柱穴群

時期の判明しなかった柱穴群を1群確認した。時期を判断する材料に乏しく時期不明としたが、前節までの時期に属する可能性がある。

**柱穴群1（図260）**

**検出状況** C地点 JI15～JJ16 グリッド、Ⅲ層上面で検出した。柱穴が SP442 を中心に長楕円状に巡ることから柱穴群と判断した。柱穴群としての長軸径は 5.35m、短軸径は 3.75m を測る。長軸の方位は、N-68° -W である。

**柱穴** 9基の柱穴を検出した。SP442を中心いて、SP443-SP447、SP444-SP448、SP445-SP449、SP446-SP450 と 2基1組で放射状に位置する。SP445-SP446間と SP449-SP450間がやや離れている。西側の SP443、SP444、SP445、SP450 の底面は丸みを帯び、東側の SP446、SP447、SP448、SP449 と中心の SP442 の底面は平らである。深さは 0.14～0.35m で、比較的東側の柱穴が深い。中心に位置する SP442 の深さは 0.29m で、他の柱穴と際だった差はない。柱痕跡は SP443、SP444、SP445、SP446、SP447、SP450 にあり、柱径は 0.08～0.18m と想定できる。柱痕跡から、柱は垂直に埋設された可能性が高いと考えられる。美濃加茂市野笛遺跡 SB27 は、深さ約 0.5m の支柱を中心に、放射状に深さ 0.1～0.2m の浅い柱穴を配し、その柱痕跡が斜方向であることから支柱に向かって梁を巡らせた円錐形の建物を想定し、弥生時代前期に比定している（岐阜県文化財保護センター2000）。当遺跡の柱穴群1を建物と仮定すると、柱痕跡が前述の通り垂直であることから、平面形は野笛遺跡 SB17 に類似するが、上屋の構造は異なる可能性が考えられる。

**遺物出土状況** SP450 埋土から石器類1点（MF）が出土した。また、柱穴群の位置する遺物包含層（JI15～JJ16 グリッド）からは、縄文土器1点、弥生土器2点、古墳前期土師器類11点、時期不明土師器29点、灰釉陶器6点、山茶碗2点、近世陶器4点、石器類4点が出土しているが、グリッド出土遺物が柱穴群に属するかは不明である。

**時期** 時期は不明である。

**2 柵（図261～263）**

時期の判明しなかった柵は5列である。時期を判断する材料に乏しく時期不明としたが、前節までの時期の属する可能性がある。

**SA07（図261）**

**検出状況** C地点 KK1～KL2 グリッド、Ⅲ層上面で検出した。柱穴が直線上に位置することから柵と判断した。長さ 6.54m を測り、柱間は P 3-P 2 で 2.54m、P 2-P 1 で 1.70m、P 1-P 4 で 2.30m である。長辺の方位は N-32° -E である。

**柱穴** 4基の柱穴を検出した。柱穴の規模は、直径 0.29～0.42m、深さ 0.16～0.33m を測る。すべての柱穴で柱痕跡を、P 2・P 3・P 4 で柱の当たりを確認した。柱径は 0.06～0.13m と想定できる。

**出土遺物** 柱穴からは遺物は出土しなかった。

**時期** 時期は不明である。

**SA09（図262）**

**検出状況** C地点 JE20～KE1 グリッド、Ⅲ層上面で検出した。柱穴が直線上に位置することから柵と判断した。長さ 5.20m を測り、柱間は P 1-P 6 で 0.96m、P 6-P 2 で 0.78m、P 2-P 3 で 0.66m、P 3-P 4 で 0.54m、P 4-P 5 で 2.26m である。長辺の方位は N-54° -W である。

**柱穴** 5基の柱穴を検出した。柱穴の規模は、直径 0.29～0.51m、深さ 0.16～0.41m を測る。すべて

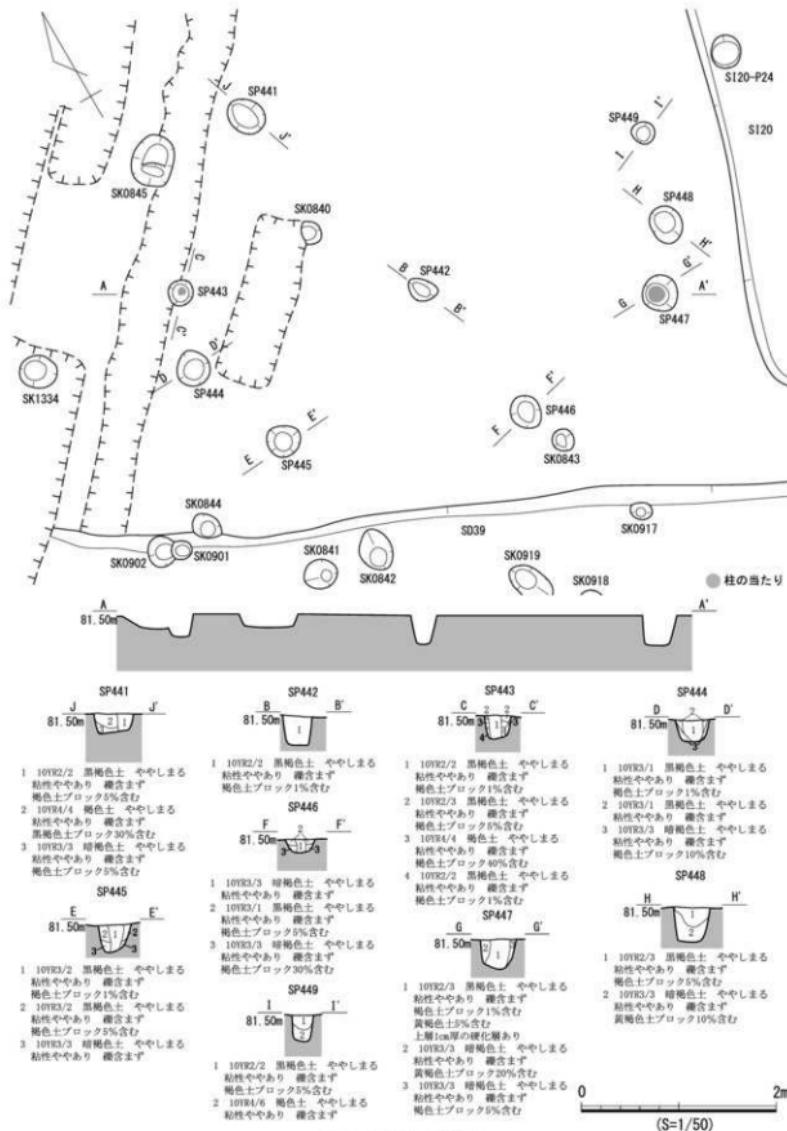


図260 柱穴群1遺構図

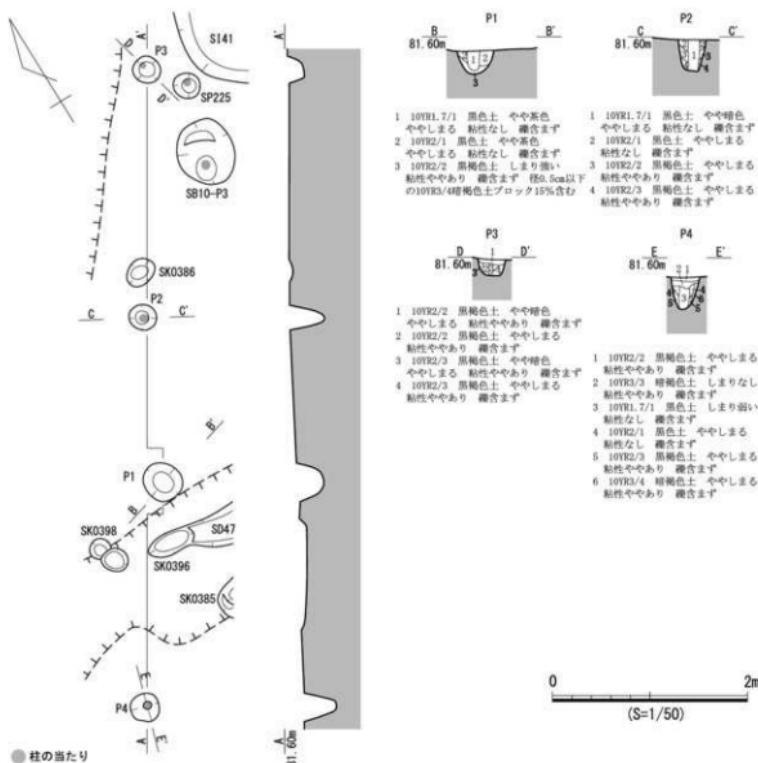


図261 SA07遺構図

の柱穴で柱痕跡と柱の当たりを確認した。柱径は 0.07~0.11m と想定できる。

**出土遺物** 柱穴からは遺物は出土しなかった。

**時期** 時期は不明である。

SA10 (図 262)

検出状況 C地点 JI16～JJ17 グリッド、III層上面で検出した。柱穴が直線上に位置することから槽と判断した。SA11 と並行する。長さ 4.26m を測り、柱間は P 2 - P 1 で 1.72m、P 1 - P 3 で 2.54m である。長辺の方位は N-50° - W である。

**柱穴** 3基の柱穴を検出した。柱穴の規模は、直径 0.25~0.28m、深さ 0.27~0.30mを測る。P3 で柱痕跡を確認し、柱径は 0.10m と想定できる。

**出土遺物** 柱穴からは遺物は出土しなかった。

時期 時期は不明である。

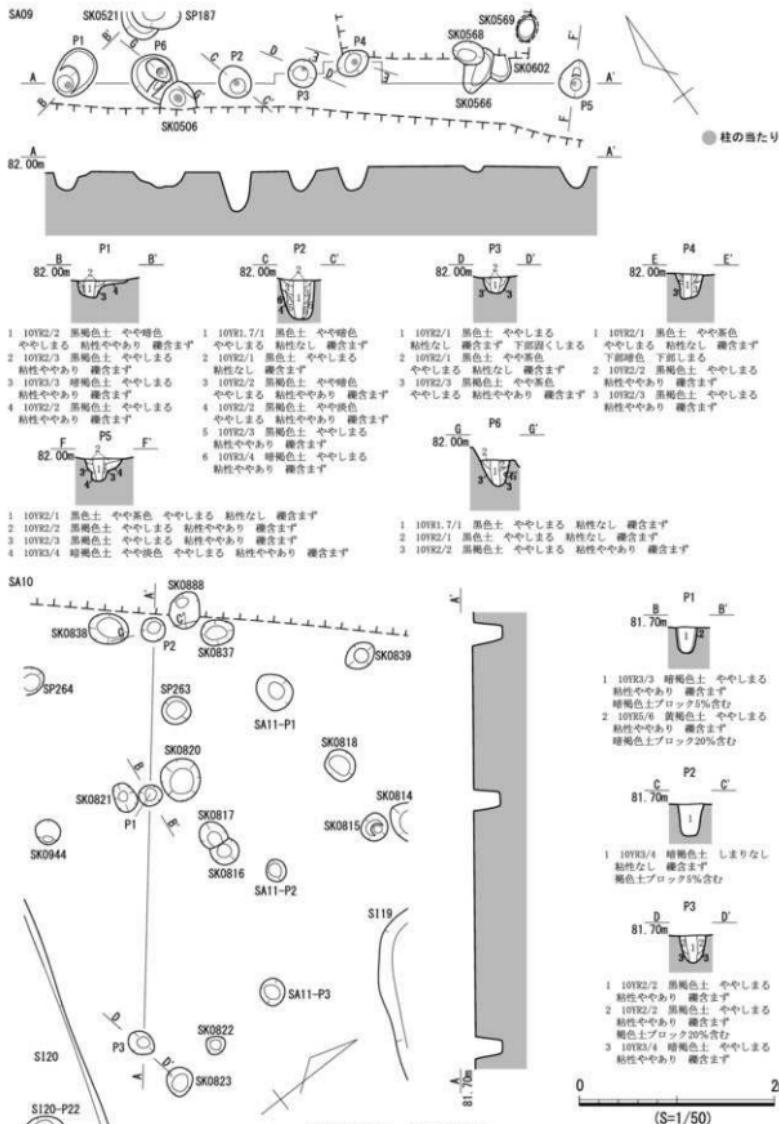


図262 SA09・SA10遺構図

**SA16（図263）**

**検出状況** C地点 KJ 3～4 グリッド、III層上面で検出した。柱穴が直線上に位置することから柵と判断した。SB04 東に並行する。長さは 3.38m を測り、柱間は P 1-P 2 で 1.44m、P 2-P 3 で 1.94m である。長辺の方位は N-45° -E である。

**柱穴** 3基の柱穴を検出した。柱穴の規模は、直径 0.33～0.38m、深さ 0.37～0.40m を測る。すべての柱穴で明瞭な柱痕跡と柱の当たりが確認できる。柱径は 0.10～0.17m と想定できる。

**出土遺物** 柱穴からは遺物は出土しなかった。

**時期** 時期は不明であるが、SB04 と関連するならば東野VI期以降の可能性が高い。

**SA20（図263）**

**検出状況** B地点 HB 5・6～HC 5 グリッド、III層上面及び搅乱坑底で検出した。柱穴が直線上に位置することから柵と判断した。長さ 5.80m を測り、柱間は P 1-P 2 で 3.31m、P 2-P 3 で 2.49m である。長辺の方位は N-11° -E である。

**柱穴** 3基の柱穴を検出した。柱穴の規模は、直径 0.30～0.34m、深さ 0.18～0.29m を測る。すべての柱穴で明瞭な柱痕跡と柱の当たりが確認できる。柱径は 0.10～0.11m と想定できる。

**出土遺物** 柱穴からは遺物は出土しなかった。

**時期** 時期は不明である。

**3 溝状遺構（図264・265）**

時期の判明しなかった溝状遺構は 17 条である。通水の痕跡はない。時期を判断する材料に乏しく時期不明としたが、前節までの時期の属する可能性がある。

**4 柱穴（図266～280）**

時期の判明しなかった柱穴は 282 基（うち 9 基は柱穴群 1 に属する。）である。時期を判断する材料に乏しく時期不明としたが、前節までの時期の属する可能性がある。

**5 土坑**

時期の判明しなかった土坑は 1,453 基である。時期を判断する材料に乏しく時期不明としたが、前節までの時期の属する可能性がある。紙面の都合上、土層断面図を割愛した。

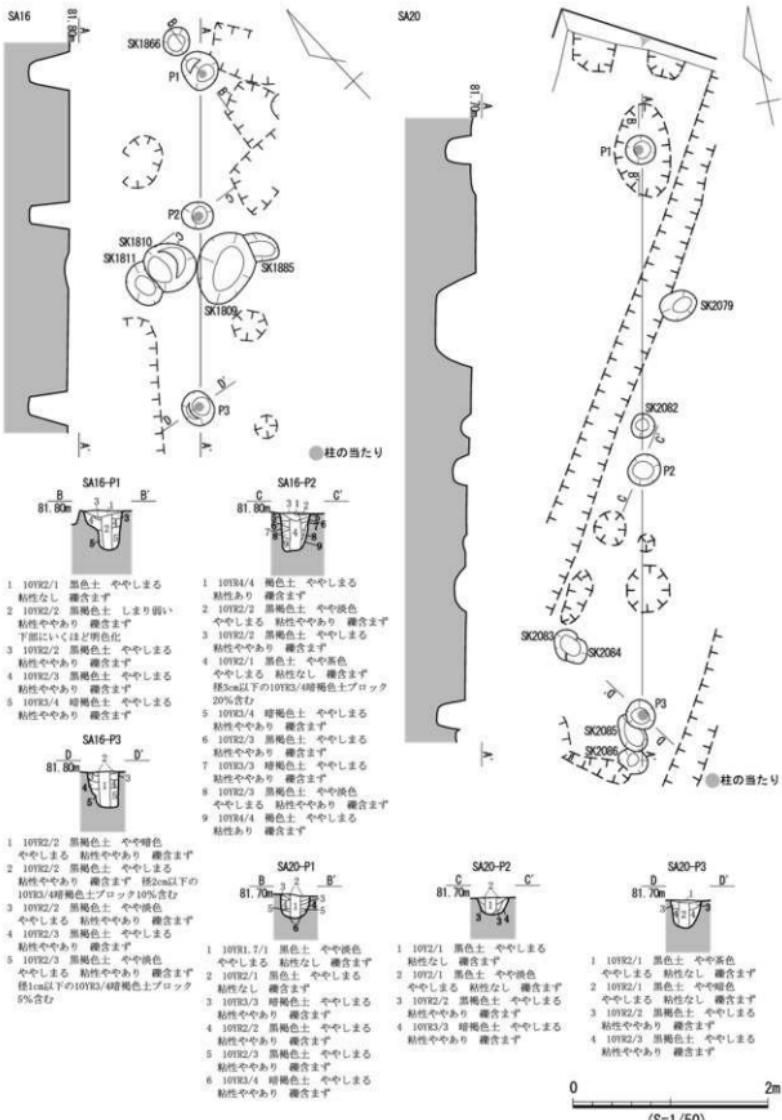


図263 SA16・SA20造構図

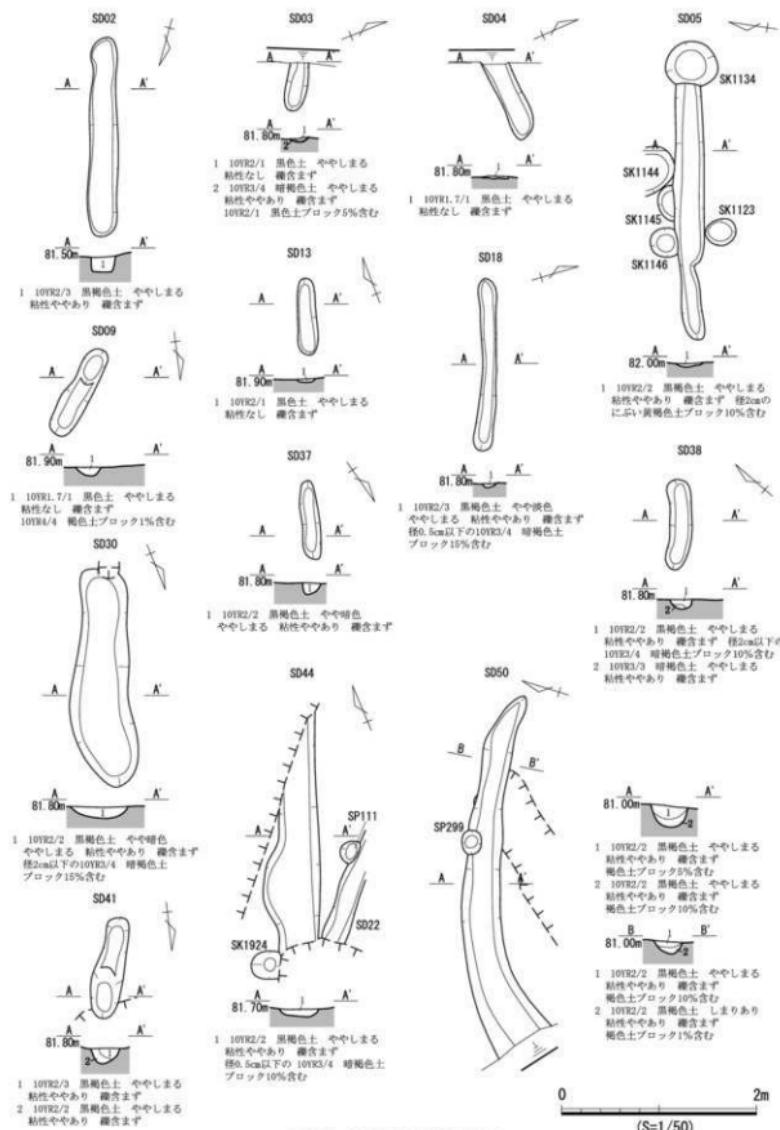


図264 時期不明SD遺構図(1)

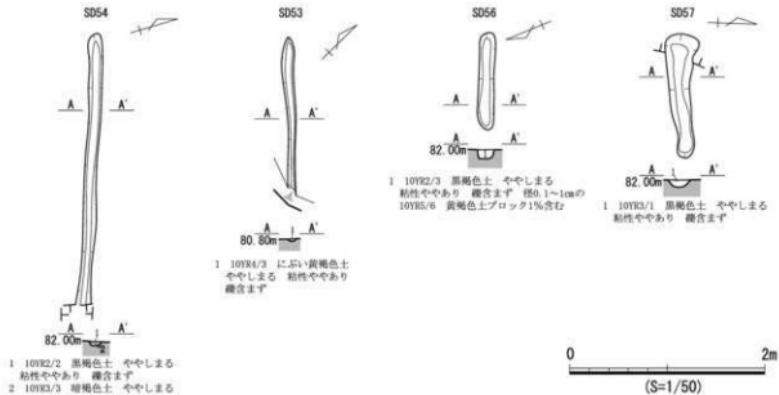


図265 時期不明SD遺構図(2)

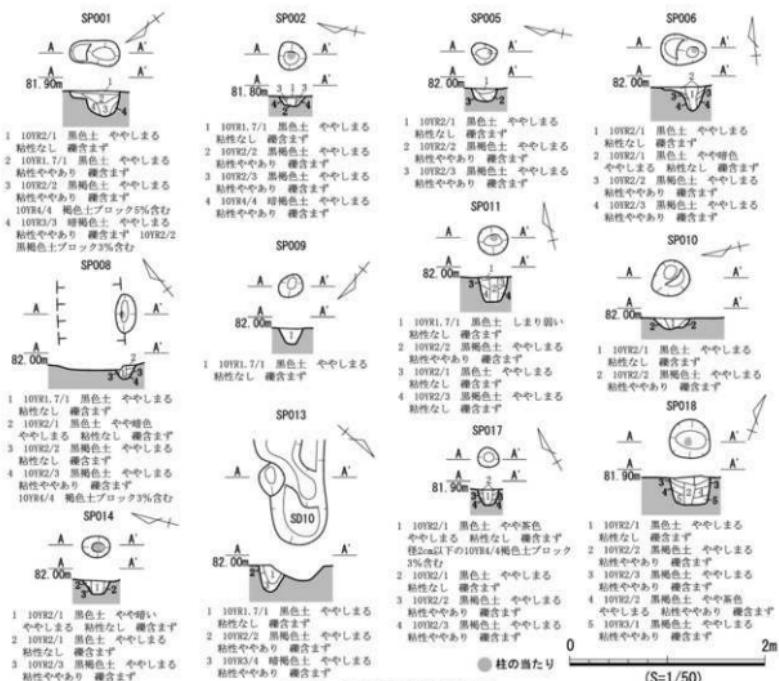


図266 時期不明SP遺構図(1)

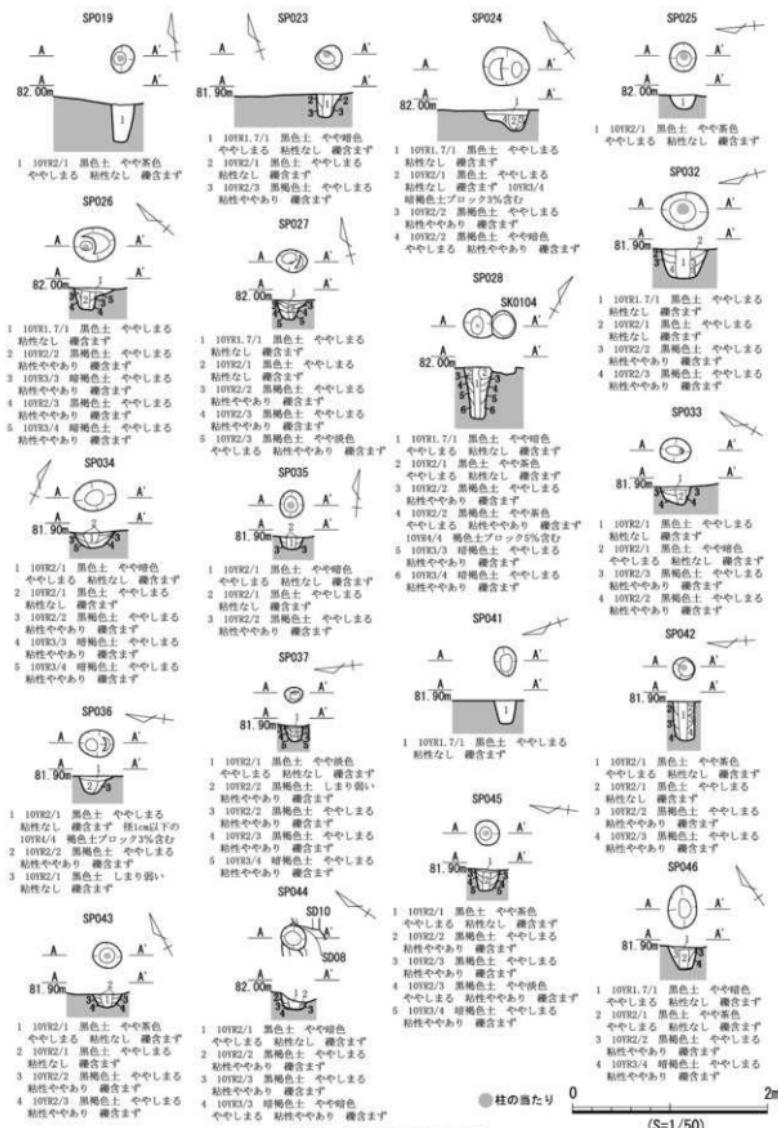


図267 時期不明SP遺構図(2)

柱の当たり

(S=1/50)

2m

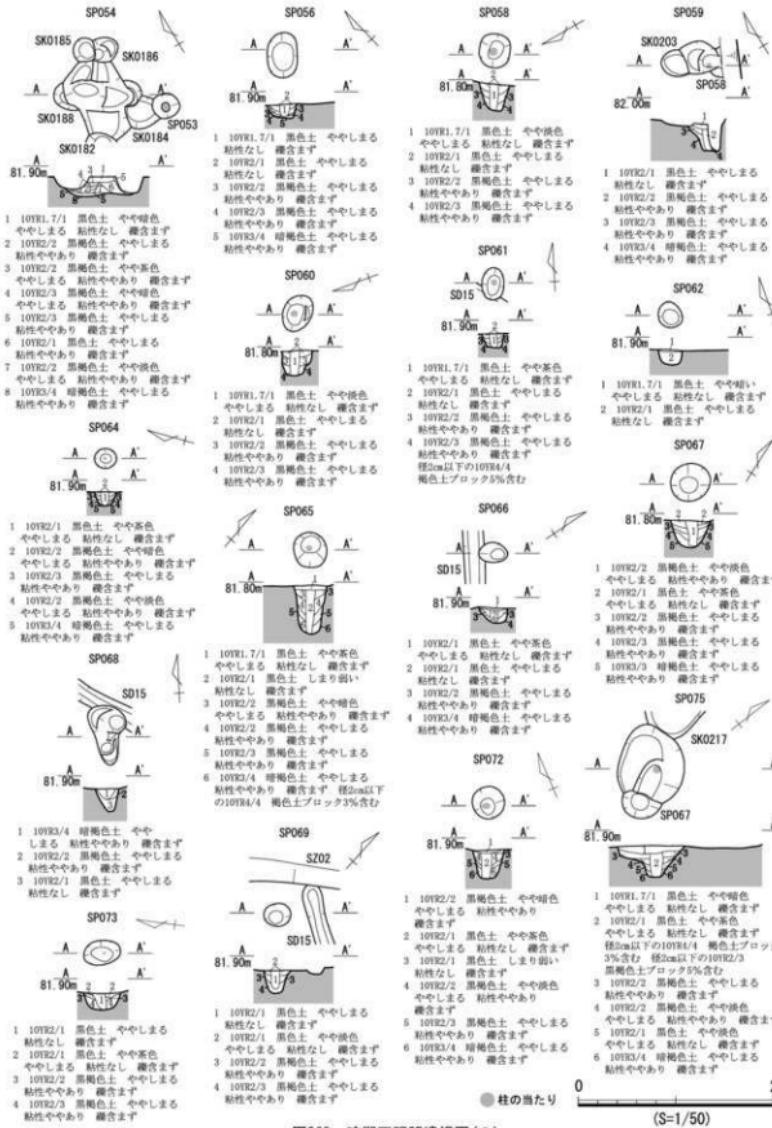


図268 時期不明SP遺構図(3)

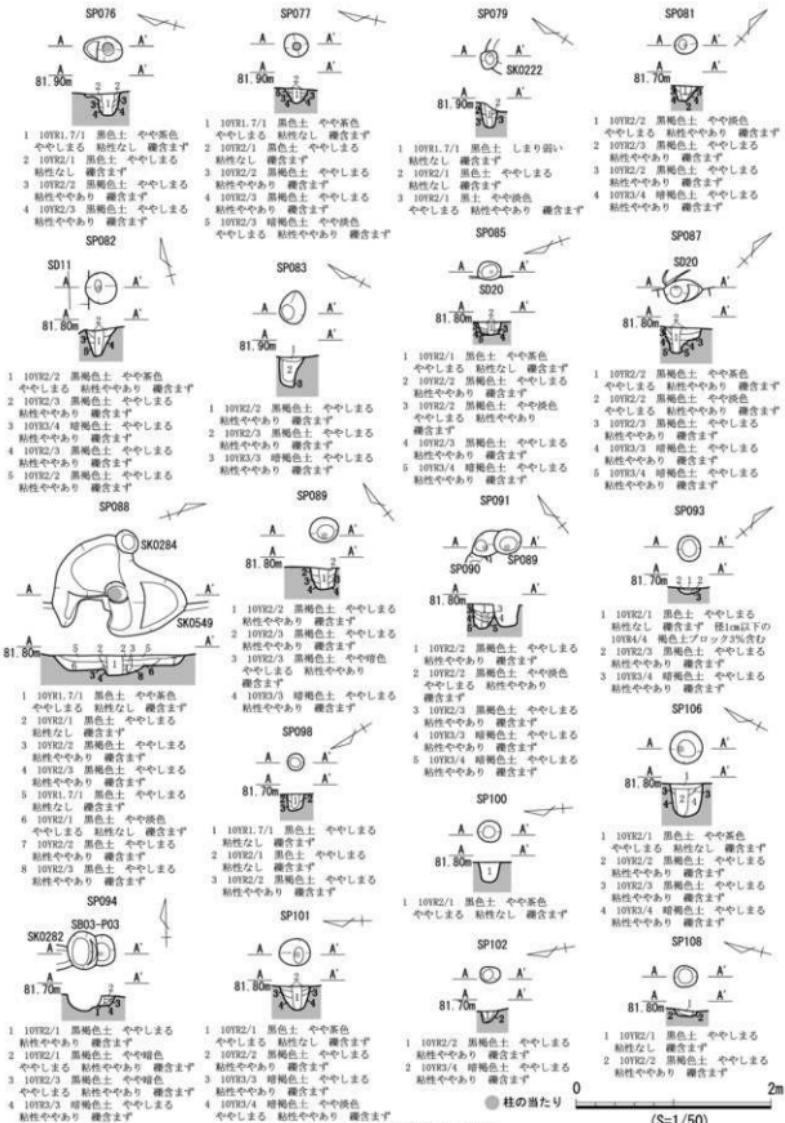


図269 時期不明SP構造図(4)

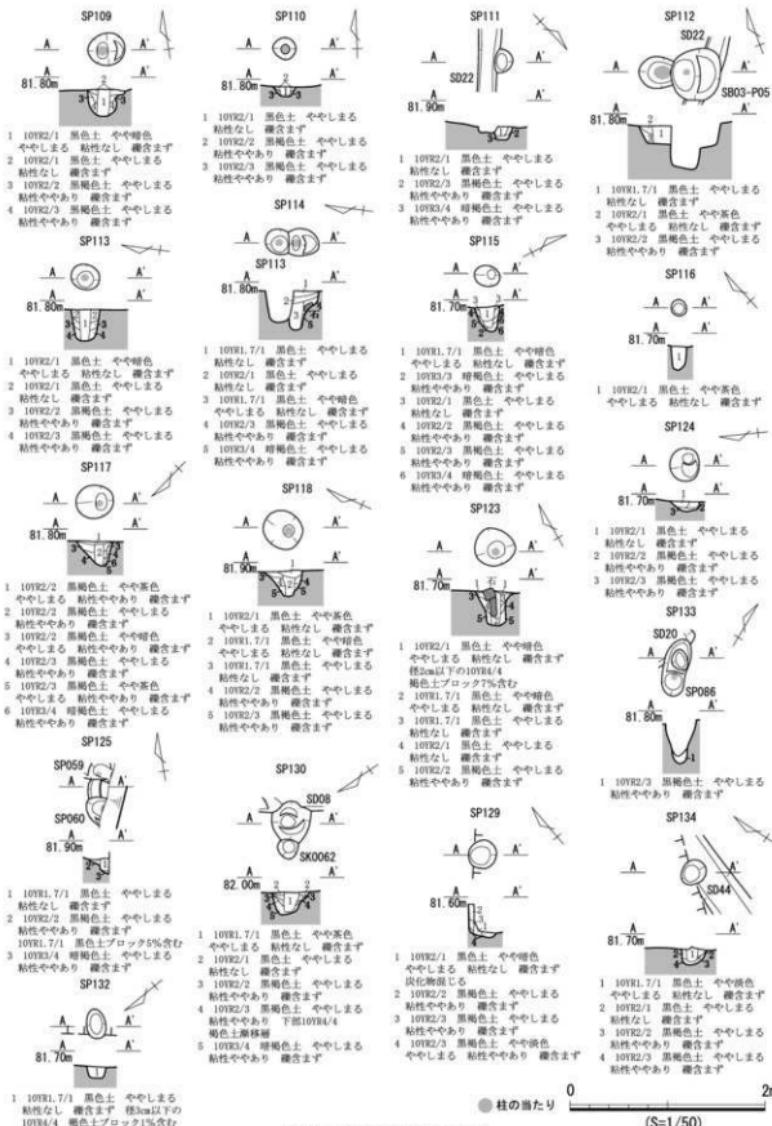


図270 時期不明SP構造図(5)

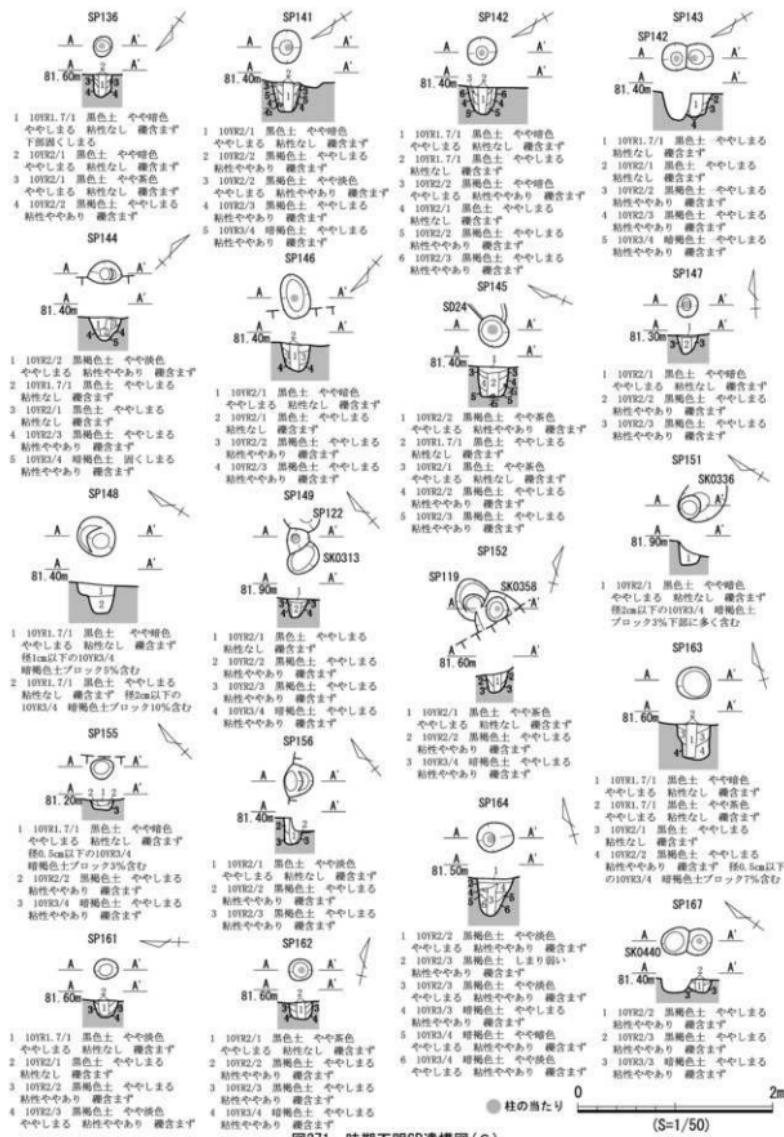
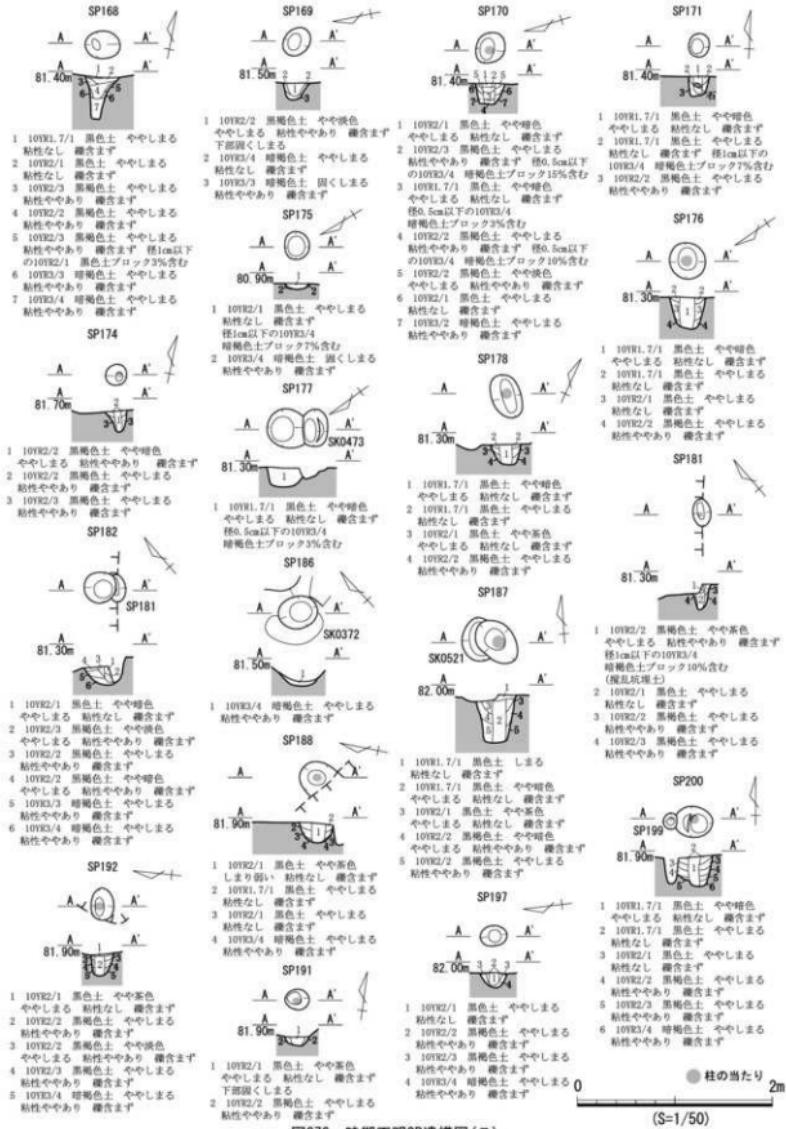


図271 時期不明SP遺構図(6)



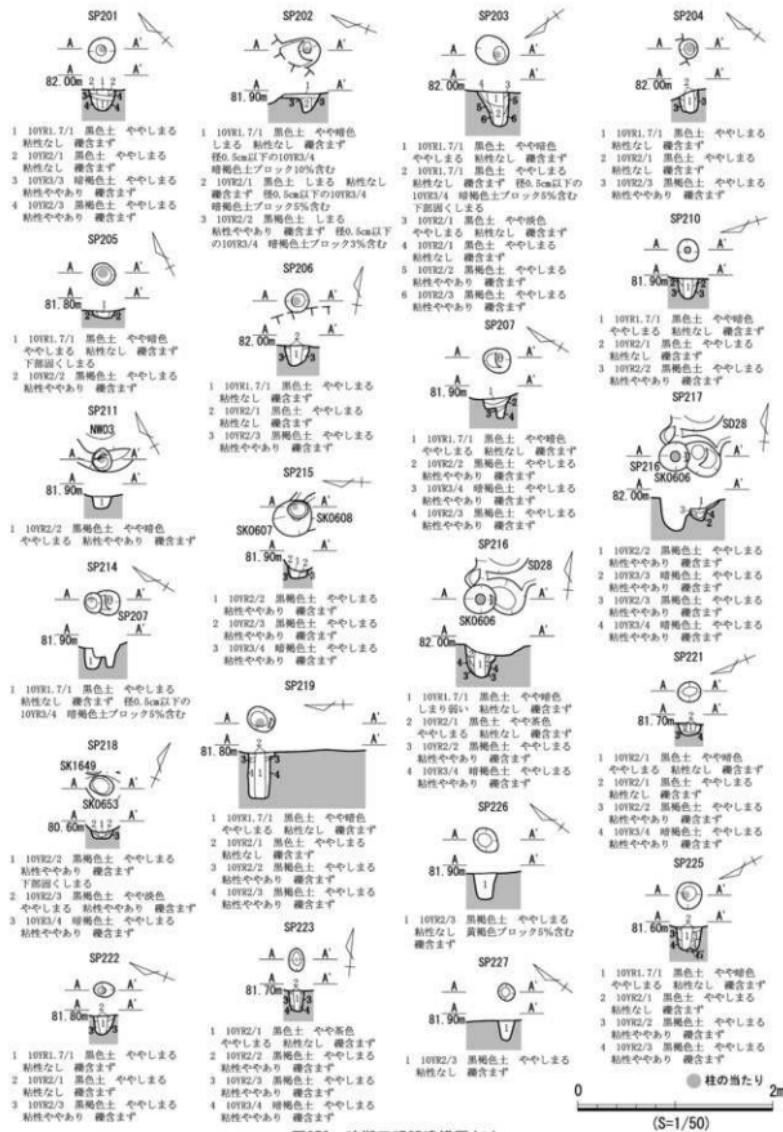


図273 時期不明SP遺構図(8)

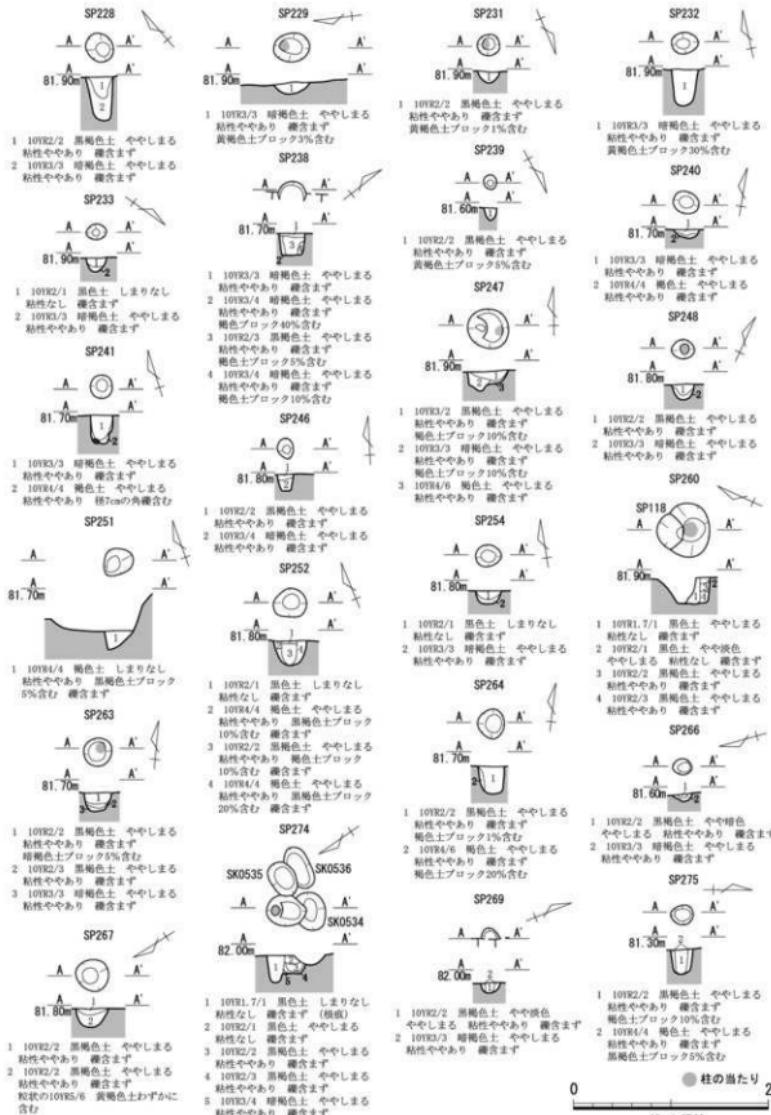


図274 時期不明SP遺構図(9)

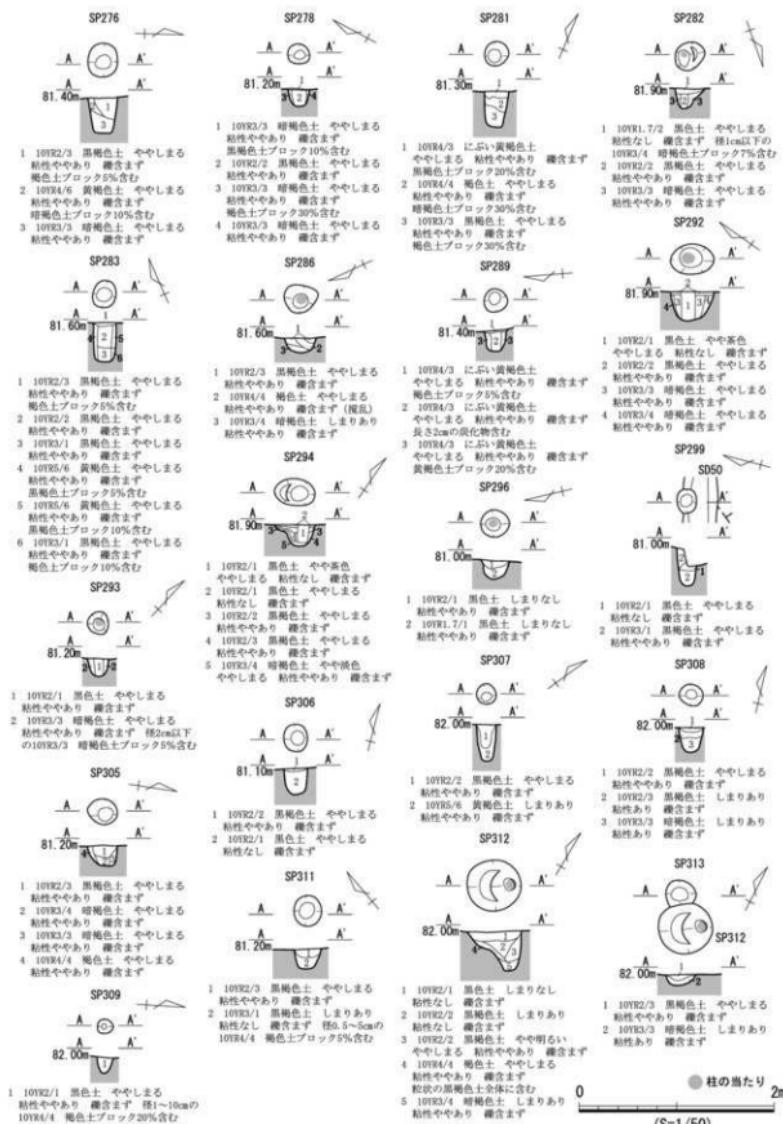


図275 時期不明SP遺構図(10)



図276 時期不明SP遺構図(11)

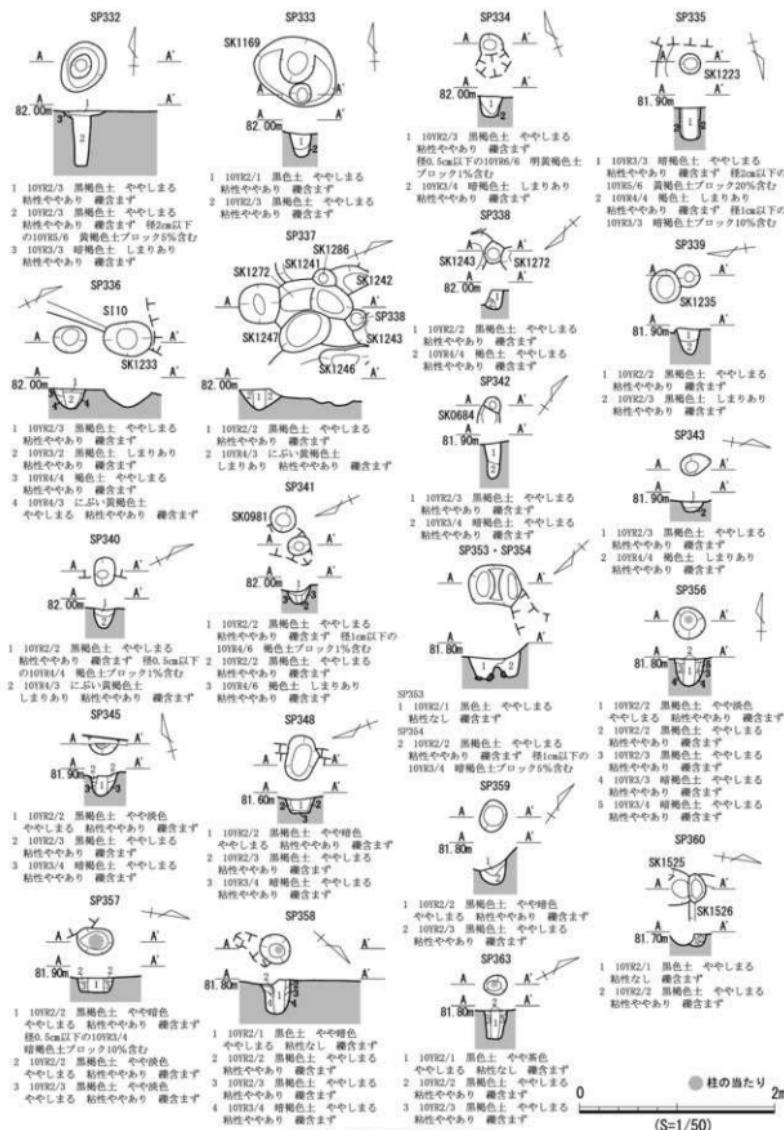


図277 時期不明SP遺構図(12)



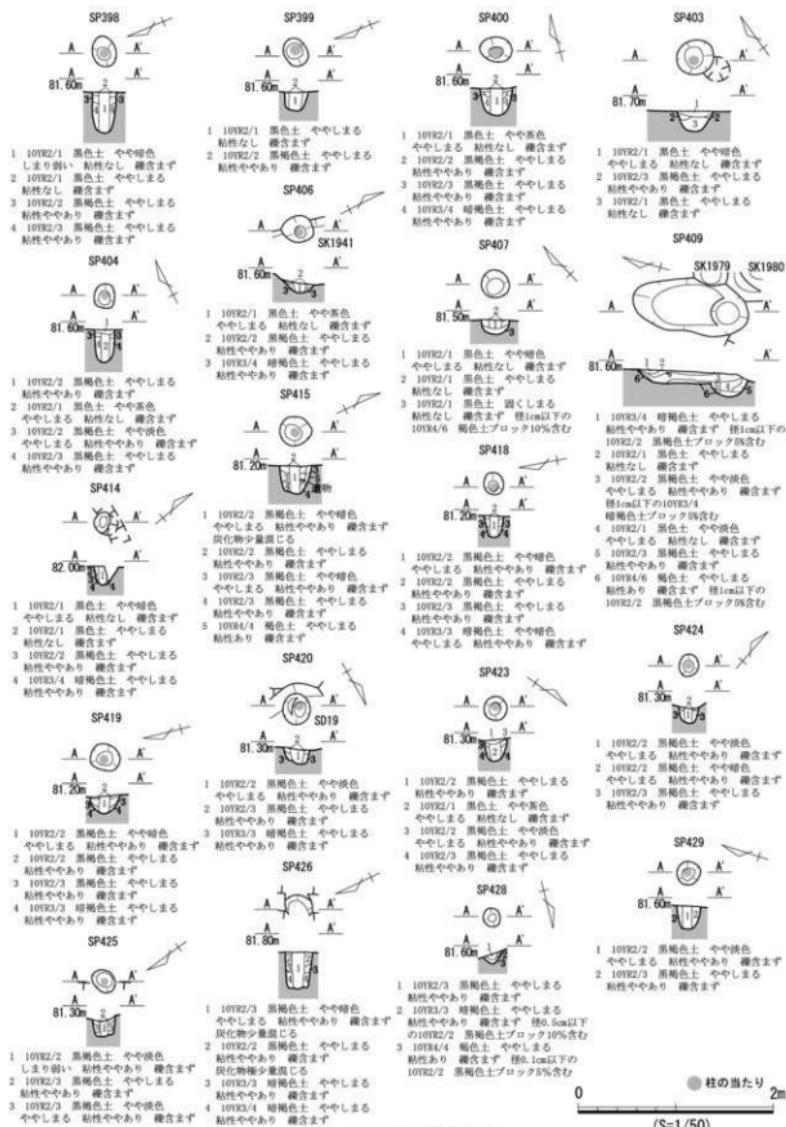


図279 時期不明SP構造図(14)

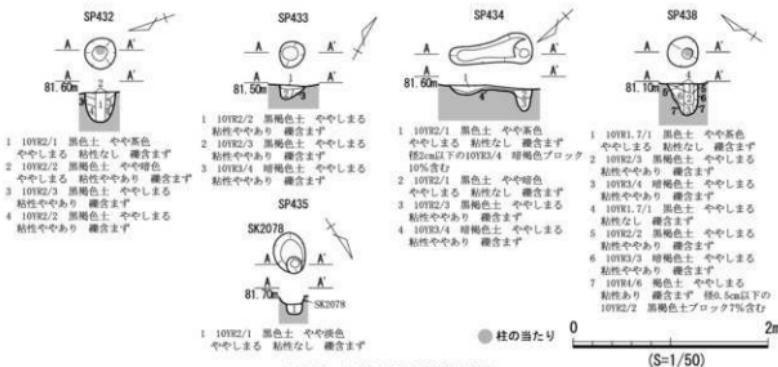


図280 時期不明SP遺構図(15)



## 報 告 書 抄 錄

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第136集

## 東野遺跡 II

(第1分冊)

平成28年1月12日

編集・発行 岐阜県文化財保護センター

岐阜市三田洞東1-26-1

印 刷 株式会社もとすいんさつ